仮面の英雄の聖杯探求記？

カナリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面の英雄の聖杯探求記？

【Ｎコード】
Ｎ４９８８Ｗ

【作者名】
カナリヤ

【あらすじ】
第四次聖杯戦争に、どういう訳か召喚されないはずのモノが召喚された。それは物語りを歪めていく。注意　作者の完結済みの前作「強欲な力＋αを持っていく」のアーロニーロが召喚される話です。

はじめに

これは、「強欲な力＋αを持っていく」の主人公のアーロニーロがＦａｔｅ／Ｚｅｒｏの第四次聖杯戦争にキャスターで参戦させた話になります。なので、「強欲な力＋αを持っていく」を読んでからでないと楽しめないと思います。ＢＬＥＡＣＨのまんまのアーロニーロではありません。それでも良いと言うのなら、読んで下さい。

前情報

聖杯

あらゆる願いを叶えるとされいるモノ

聖杯戦争

聖杯を降臨させる為の儀式。7人のマスターと7体のサーヴァントによって行われる戦争でもある。聖堂教会が監督役をしており、神秘の秘匿をしなければ排除に掛かる事も……

聖杯に選ばれたマスターには令呪と言う己のサーヴァントへの3回限りの絶対命令権が与えられる。コレ無くしては、サーヴァントを従わせるのは不可能であるとされている。

人物紹介

キャスター

仮面の英雄。アーロニーロ・アルルエリ。なんの因果か、聖杯戦争に呼び出された。聖杯に託す願いは無いが、戦いを楽しむために聖杯戦争に参戦した。

雨生（うりゅう）　龍之助（りゅうのすけ）

キャスターのマスター。偶然にもキャスターを召喚して聖杯戦争に参加した純粋無垢な快楽殺人者。聖杯戦争はとてつもなく刺激的な遊び程度の認識。

セイバー

騎士王。見た目は少女だが、騎士王の称号に相応しい正々堂々とした戦いを好み、王として戦いに臨む。そして、祖国を救う為の願いを聖杯に託すために聖杯戦争に参戦した。

衛宮（えみや）　切嗣（きりつぐ）

セイバーのマスター。アインツベルンに雇われた“魔術師殺し”。魔術師の背中を取る事を得意とし、多くの魔術師を狩ってきた実績を持つ。救済の願いを聖杯に託すために聖杯戦争に参戦した。

アイリスフィール・フォン・アインツベルン

切嗣の妻。アインツベルン家が錬成した人造人間（ホムンクルス）であり、聖杯の担い手。

久宇（ひさう）　舞弥（まいや）

切嗣の助手。切嗣により殺しの技術を叩き込まれている。低級の使い魔の使役に才を持っており、使い魔による諜報を行う。

ランサー

二槍を使う武人。魔貌と言う女性に対する魅力の呪いを持っている。生前に果たせなかった事を成す為に聖杯戦争に参戦した。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト

ランサーのマスター。時計塔所属のエリート魔術師で、講師も務めている。

ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ

ケイネスの許嫁。変則契約により、ランサーに魔力提供している。

ライダー

征服王。他のサーヴァントを臣下にできないかと企てている。己の野望の第一歩を聖杯に託す為に聖杯戦争に参戦する。

ウェイバー・ベルベット

ライダーのマスター。時計塔所属の見習い魔術師。聖杯を勝ち取るために聖杯戦争に参戦する。

アーチャー

英雄王。英雄の原点とも言える存在。聖杯に託す願いは無いが、この世のモノは全てが自分のモノであるとして、聖杯を盗もうとする盗人を粛清する為に聖杯戦争に参戦する。

遠坂（とおさか）　時臣（ときおみ）

アーチャーのマスター。最も魔術師を体現する男。魔術師の悲願たる根源への到達の為に聖杯戦争に参戦する。

アサシン

百の貌のハサン。分裂能力を持っており、それを利用してほとんどのマスターとサーヴァントに最初に脱落したと思わせた。切嗣とその茶番を知らないキャスターには警戒されている。

言峰（ことみね）　綺礼（きれい）

アサシンのマスター。アサシンによる諜報で時臣のバックアップをしている。異端を狩る聖堂教会の代行者であり、高い戦闘力を持っている。切嗣を自分の同類として付け狙っている。

バーサーカー

正体不明の狂気の英霊。常に黒い霧を身に纏っているために、正確な姿を確認できない。凶化しているために理性は無いが、その技巧は狂化しても失われてはいない。

間桐（まとう）　雁夜（かりや）

バーサーカーのマスター。蟲による改造でのにわか仕立ての魔術師。魔力消費は命を削るも同義であり、最も脆い存在。聖杯を持ち帰れば、愛する人の子供を救えるために聖杯戦争に参戦した。

戦争開始

雨生（うりゅう）　龍之助（りゅうのすけ）はどこにでも居る普通の一般人とは言える人間では無いが、彼なりの娯楽を持ち合わせた狂人であった。ソレの犠牲になった人間は多く、その数だけ人間の死と生を理解して、愛して止まなかった。

だが、彼の娯楽にも飽きやマンネリ化などの事はあり、彼はそれに困り、原点に立ち返った。

何が問題かと言うと、そもそも殺人趣味が悪かったのか、彼が魔術回路を持っていたのが悪かったのか、原点に返った際に見つけた胡散臭い本通りの儀式をしたのが悪かったのだろう。

偶然に偶然が重なり、まさに奇跡と言える確率で、表の人間――――殺人鬼であったが――――の龍之助は聖杯戦争にマスターとして巻き込まれたのだから。

ソレが幸か不幸か聞かれれば、こう答えたであろう。

「やっぱりこの世に勝る娯楽なんてありゃしないんだ！！今の俺は最高にＨＡＰＰＹだ！！」

新たに見つけた、神が仕込んだおもしろおかしい事を迷わずに楽しんだろう。

「サーヴァント、キャスター。召喚に応じ、今此処に現界した」

その場に居た“人間”には、何が起きたのか少しも理解が出来なかった。
龍之助にとってはこの地でする最後の儀式殺人で、右手の甲に痛みがあったと思ったら、自分が描いた魔法陣から何かが現れたのだ。なにか起こればおもしろい。と、考えはしたがコレは完全に予想外のことであった。

「なんだ？呼ばれたから来たというのに。まさか間違いで呼び出したか？」

「え、え～と。あんたは悪魔なんですか？」

質問した後で、これは無いな。と、龍之助は思ったが言ってしまったのは仕方が無い。

「……本当に間違いで呼び出されたのか。質問には答えよう。悪魔と聞かれれば、違うと言わざるおえないな」

「へ？じゃあ、旦那は何なんだ？」

自分はてっきり悪魔かソレに準ずるなにかを召喚してしまった。と、思っていた龍之助にとっては当然の疑問であった。

「口で言うのは面倒だから、能力で直に伝えるぞ」

「能力？」

疑問に思えたのは一瞬で、すぐに頭に直に伝えられる情報に混乱してしまう。
だが、そんなものはすぐに収まり、状況を理解する。

「あ～つまり、魔術師って奴らの殺し合いに巻き込まれたって訳ね」
「怖じけついたか？」
「まさか！こんな面白そうな事に参加出来て最高さ！！」

こうして別世界で『仮面の英雄』と呼ばれた存在と、快楽殺人者のコンビが結成された。
現界するはずの無い英霊が、物語を狂わせる。

まずキャスターがした事は自分のマスターが安全に隠れられる拠点の確保である。
目的は簡単に達成できた。問題があるとすれば、自分のマスターが引き籠ってくれるかどうかであった。龍之助はアウトドアな快楽殺人者である。それ故に、獲物を探しに行くときは事前に教えてもらい、なるべく行動を共にする事にした。
わざわざ、街の中央で無駄に魔力による爆発を起こして、聖杯戦争に参加してる者の目が集中している内に、霊脈のある寺に侵入して住人に暗示をかけ、認識阻害で解らないようにした。
もしかしたら、セイバーのサーヴァントの対魔力なら効果がないかもしれないので、気は抜けないのだが……

次にする事は、敵の把握である。
一番危惧するのは、アサシンによるマスター暗殺である。
偶然が重なれば、令呪を保持したマスターと巡り合え再契約も可能だが、そんな低い可能性に賭けるほどキャスターは楽観的では無い。
他にも供給される魔力は少ないが、今のマスターならどのような事をしようが止めないだろうが、もしも今のマスターを失い、運良く他のマスターと再契約できたとしても思う通りに行動できないか

もしれない。それに、自分のクラスも問題である。誰が、好き好んで最弱のキャスターを使役しようというのだ。クラススキルのおかげで、寺を簡単に自分の砦に出来たが……

しかし、例外は常に存在する。三騎士には勝てないだろうが、ライダーかアサシンになら、十分勝てる見込みはある。

それに、アーロニーロは永遠に進化し続ける存在だ。今は、勝てなくとも霊脈から引き上げる魔力を貯めていけば、勝てる状態になるであろう。

それから程無くして、第四次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントが、互いに引き寄せ合うかのように集結したのだった。

キャスターがサーヴァントの存在に気付いたのは街を散策している時だった。そのサーヴァントは気配を発しながら街を歩き回っているのだ。空は茜色に染まっており、もうすぐ日が落ちる頃合いという要因で考えれば敵サーヴァントを誘っているのであろう。

騎士として不意打ちなどをせず、戦いを誘っている所から考えるに敵のクラスはセイバー、ライダー、ランサーのどれかであろう。此処で取る選択肢は決まっている、誰かがアレと戦うのを待てばいい。自分が勝てないかもしれない相手に戦いを挑むなんて馬鹿な真似は絶対にしない。

それと、例え一騎討ちになったとしても、絶対に漁夫の利を狙って行動はしない。それを狙うのが自分だけとは限らない、おそらくずっと街を練り歩いてたと思えるから監視をしているのが必ずいるはずである。

なら、取るべき行動は1つただ傍観するだけ。戦ってかなり消耗していない限りは、ただ観察してあわよくば拠点を探り出せれば上々だろう。

キャスターが待っていると、挑発にのる――――キャスターからすれば――――馬鹿が現れた。ただ勝ち残る事を考えれば、最初から戦うのは得策ではない。
自分の真名(しんめい)を秘匿しながら戦うのあれば、そもそもなるべく戦わないか、完全に1対1の状況で戦って討ち取るのが理想的だ。だが、ああも挑発して誘っている相手に挑むのは真名をばらしに行くようなものだ。
誘いに乗らずにただ見るのが普通だ。サーヴァントが余程強くならない限りは……

「凄いな……」

英雄として名を上げ、世界に認められて英霊として神格化された存在同士の戦いは、人智を超えた現象を引き起こす。ただ強く踏みしめただけで地面を舗装しているコンクリートを粉砕し、一撃で戦場に選ばれた倉庫街に置いてあった金属製のコンテナを破壊してなお且つ吹き飛ばす。
不可視の剣を使うセイバーと、2つの槍を操るランサーの衝突がそれを引き起こしているのだ。キャスターも生前なら普通にできた事だが、マスターから魔力供給が少ないのと、座(クラス)に縛り付けられて為に能力が低下しており、魔力を使って強化しなければ厳しいものがある。

「楽しめそうだな」

それは悲観することでなく、むしろ喜ぶ事実である。勝負の結果はキャスターにとっては二の次で、どれ程楽しめるかが求めるモノ

だ。勿論、勝てるに越した事はないし、不用心に敵と戦おうとは考えない。あくまでルールに則りながら聖杯(ゲーム)戦争を楽しむのだ。

セイバーとランサーの戦いは互角であり、どちらも決め手に欠けていた。決め手ならサーヴァントなら持っているが、まだどちらもそれを攻撃に使っていない。いや、使っていなかったが、ランサーのマスターが痺れを切らしたか、使えば勝てると踏んで宝具の開帳を許した。

宝具の多くはそれ自体が強力な武器である事が多く、使い手の象徴であり、使い手の後世に語り継がれる逸話の具現である。そして、それがセイバーに牙を剥いた。

「なるほど、紅が断魔で黄が治癒が不可能か……随分と厄介なモノをもっているなランサーも。セイバーも黄金の剣に不可視にするなにかも十分厄介だな」

ランサーの宝具によりセイバーの不可視であった剣はその姿を曝し、さらに奇策により左腕に治癒不能の傷を負った。完全に戦況がランサーに傾きつつある。相性を考えるのならこのままなら聖杯戦争を勝ち残るのには望ましい結果になるだろう。勝ち残るだけなら……

轟音と共に稲妻の上を走る逞しい雄牛に引かれて古風の戦車(チャリオット)が対峙していたセイバーとランサーの丁度中間に新たなサーヴァントが降り立つ。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

なにを言ってるんだ、あいつは？おそらく見ている人物全員が似通った事を思い、現れたサーヴァントの行動を疑問に思っただろう。

襲撃ならわざわざ2体のサーヴァントの目の前に出ずに、乗って来た戦車でどちらかを轢いたであろうし、尋常な勝負をしたいのならセイバーが傷付いたこのタイミングで戦場に出てこないだろう。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争の場においてはライダーのクラスを得て現界した」

堂々と名乗るのは王と納得できる名乗りだが、聖杯戦争では愚行でしかない。真名を知られるのは、手の内を知られると同義なのはライダーも知らない訳では無いだろう。だが、名乗りをあげたのは知られても不利にならないのか、弱点を突かれてもそれを乗り越える自信の表れか……それとも、ただ単純に馬鹿なのか。判断に困ったのが、その場にいたライダー以外の心境であっただろう。

「何を———考えてやりますかこの馬ッ鹿はあああ！！」

ライダーのマスターたるウェイバー・ベルベットは馬鹿だと判断し、すぐさま自身のサーヴァントに抗議の声を上げるが、ライダーの右手中指の行動———つまりはデコピンで黙らさせられた。どちらの立場が上かを簡単に解る光景であったが、通常はマスターの方が上の立場になる。サーヴァントは死後であっても叶えたい望みがあるから、聖杯戦争で英霊となっているのに人に使役されているのだ。マスター無しで現世に留まる事すらできず、聖杯に辿り着けず、下手に機嫌を損なえば勝ち残ったとしても3回限りの絶対命令権である令呪によって自害させられる可能性もある。

実力的にはいくらサーヴァントが上でも、マスターが上に立てるのはそういう要因があってのモノで、逆に言えばそれらの要因を失くせば簡単にマスターは上に立てなくなるのだ。尤も、そんなモノをまったく気にしないライダーのようなサーヴァントも存在するから、マスターが絶対上に立てる訳ではない。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まず問うておくことがある。
うぬら各々が聖杯に何を期するかは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してもなお、まだ重いものであるかどうか」

ライダーは問いかけた。真意がハッキリと判らない問いであったが、セイバーは持ち前の直感でその問いに不穏なモノを感じて問いかける。

「貴様――――何が言いたい？」

「うむ、噛み砕いて言うとだな。
ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友（とも）として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存でおる」

ライダーが真名を平然とばらしたとき以上に、全員が絶句した。平たく言うなら、自分の部下になって聖杯を自分に譲れ的な事を提案としたのだ。征服王イスカンダルは知名度や伝記を鑑みれば破格の英霊と言えるが、それでもこの提案は突拍子すぎた。

「先に名乗った心意気には、まぁ感服せんでもないが……その提案は承諾しかねる」

苦笑しながらランサーは答えるが目は笑っておらず、セイバーとの勝負に水を差された事とライダーの提案により侮蔑の念すら感じられる。

「俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「……そもそも、そんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたというのか？」

「別段聖杯なんて欲してないから、最後まで残っていればくれてやってもいいが、従属は俺の性に合わん」

戦争開始（後書き）

更新速度は前作より遅くなると思います

戦争開始2

突如追加された声にその場の全員に緊張が奔る。この場所は戦闘が始まる前にランサーのマスターによって、人払いの結界などが張られたことにより魔術師かサーヴァントしか進入してこないはずである。つまり、戦場に新たに別のサーヴァントが入った事を意味する。声は魔術などで細工などされて無かったから、声を出したの人物を容易に発見できた。

その姿は一言で言うなら白であった。一部を除いて全てを白で統一された服を着ていて、なお且つ模様などない縦長で穴が8つ開いてる仮面を着けていた。つまり、キャスターが姿を自ら表した。

「あ～聖杯を譲ってくれるのは嬉しいが、できれば朋友にもなってくれると更に嬉しいんだがな？」

新たなサーヴァントの出現になんら驚く事無く答える。流石は征服王と言ったところだが、キャスターはそんな事をまったく意に介さずに話す。

「悪いが、お前がどのような野望を語ろうと俺には興味の無い事だ。人の身で語る野望としては世界征服は正に夢だろう。だから、俺には興味が無い」

「夢と断じられようとも、余にとっては違える事の無い目標。同じ夢を分かち合おうとは思わんのか？あー……」

「キャスターのクラスで現界した、仮面の英雄アーロニーロ・アルルエリだ」

サラッと、当然のように真名を名乗ったのでライダー以外は再び驚愕する。それと、キャスターが自分の拠点に籠らずに戦場に出て来ている事もあって驚愕も一層大きくなる。良くも悪くも魔術に特化しているキャスターは、搦め手を使わずに他のクラスに勝てるとは考えにくいのだ。それがこの場にいる状態が。

「ふむ、キャスターか。夢を見ようと思わんのか？」

「夢に興味はない。現実が一番面白いからな」

断言されたライダーは困ったようにセイバー、ランサー、キャスターを順に見て口を開く。

「……待遇は要相談だが？」

「「くどい！」」

「一時的に雇われるなら、考えなくもない」

どれもがライダーが望む答えではないので、若干肩を落とす。

「重ねて言うなら――――私もまた1人の王としてブリテン国を預かる身だ。いかなる大王といえども、臣下に降りるわけにはいかぬ」

「ほう？ブリテンの王とな？」

平時なら、戯言と笑い飛ばせる内容だが今は異常が普通にとって変われる聖杯戦争中である事と、騎士王と名高いアーサー王ならセイバーのクラスで召喚されても何らおかしくない。

「こりゃ驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは」

ただ、それが可憐な少女（見た目だけ、なお且つ死んだ年齢を考えると……）だというのは驚きであり、ライダーはそれを隠そうともしない。

「――――その小娘の一太刀を浴びてみるか？征服王」

セイバーは声を声を低くし、ライダーに鋭い眼光を向けながらすぐにでも斬りかかれる様に構える。ライダーにその気は無くとも、小娘の単語はセイバーには侮辱と取れる。女である前に騎士であり、王であった彼女にとってはそれが当然で、自分が選んだ道だ。ランサーによって治癒が不可能な傷を受けた左手に握力が無くとも、セイバーの闘気は微塵も衰えておらず、ライダーに向けられているのは「斬って捨てるぞ」と言わんばかりだ。

「こりゃーキャスター以外は完全に交渉決裂かぁ。勿体ないなぁ。残念だなぁ」

「ら、い、だぁぁぁ……」

ライダーのデコピンで黙らされたウェイバーは、会話に支障が無い程度には痛みが退いたので恨み事を言うように、しかし未だに完全に退かない痛みのせいで情けなくしゃべりだす。

「ど～すんだよぉ。征服とか何とか言いながら、けっきょく総スカンじゃないかよぉ……オマエ本気で他のサーヴァントを手下にできると思ってたのか？」

ウェイバーの疑問は真っ当な疑問だろう。叶えたい願いがあるか

ら聖杯戦争に参加しているのだ。伝説に残るような人物が、いきなり従えと言って従うなんてまずはありえない。それこそ、令呪のような縛りや共通の目的でも無い限りは……

「いや、まぁ、“ものは試し”と言うではないか」

「“ものは試し”で真名バラしたンかい！？」

あまりの無計画さと戦略の要であるはずのモノを捨て石の如き扱いに、正当な怒りをぶつけるべくライダーをポカポカと言う感じで殴るが、ウェイバーが非力な事とライダーとの体格差によってまるで子供が大人に駄々をこねているかの様な光景を作り出す。

『そうか、よりにもよって貴様か』

底冷えするような、どこから響いて来ているか解らない怨磋の声が静かに響き渡る。

声の主はランサーのマスター。ランサーに宝具の開帳を許してから一言もじゃべらなかったまるで、なにか縁があるかのような口振りしゃべり出す。

『いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思ってみれば———よりにもよって、君みずからが聖杯戦争に参加する腹だったとはねぇ。ウェイバー・ベルベット君』

聖遺物を盗み出した。その時点でウェイバーは嫌な気がし、名前を呼ばれた時には確信した。声の主が時計塔の講師のケイネス・エルメロイ・アーチボルトだと。ライダーを召喚する際に使用したイスカンダルの聖遺物であるマントはケイネスが用意した物だが、手違いによってウェイバーが受け取ってそのまま盗んだ物だ。

『残念だ。実に残念だなぁ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられたはずだったにねぇ』

『致し方ないなぁウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持ってあげようではないか。魔術師同士が殺し合うという本当の意味――――その恐怖と苦痛とを、余すところなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

敵視した事はあっても、敵視された事などなかった。ケイネスがウェイバーに向けた殺意は、ウェイバーにとって致命的だった。声だけというのに、見えもしない相手に恐怖し、身を震わせる。魔術師が殺意を胸に懐くのが、ここまで決定的な“死の宣告”であったとはこれまで知らなかった。

そんな恐怖に支配されていたウェイバーは、自分の肩を優しく力強く包み込むものに驚いた。自分に何度もデコピンあてた手が、今度はどういう訳か肩に置かれているのだ。

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな。だとしたら片腹痛いのぅ。余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者なぞ、役者不足も甚だしいぞ」

『……』

今度はランサーのマスターは怒りが漏れ出す。それを向けられいるライダーはどこ吹く風と、笑って声を張り上げる。

「おいこら！他にもおるだろうが。闇に紛れて覗き見をしておる連

中は！」

セイバーも、ランサーも、これには怪訝な顔をした。

「――――どういうことだ？ライダー」

「セイバー、それにランサーよ。うぬらの真っ向切っての競い合い、まことに見事であった。あれほどに清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊が、よもや余とキャスターだけとはあるまい」

闇に紛れている連中の1人、いや、2人に心当たりのあるセイバーのマスターを演じているアイリスフィール・フォン・アインツベルンは内心肝を冷やしたが、続いてライダーの言い放った言葉でサーヴァントにしか興味の無いと取れたので、ひとまず安堵の念を抱く。少なくとも今は、夫であり、セイバーの真のマスターである衛宮切嗣（みやきりつぐ）とその助手の久宇舞弥（ひさう まいや）を闇の中からあぶり出そうとはしないと。ただでさえセイバーは左手の傷で全力を出せないのに、守るべき存在が3人に増えたら負担が大きくなると言う話では無くなり、またアインツベルンが早期に聖杯戦争から退場する事になる。尤も、切嗣ならサーヴァントを奪う位はしようとするだろうが……彼にはそこまでしても叶えたい願いがあるのだから。

「情けない。情けないのぅ！冬木に集った英雄豪傑どもよ。このセイバーとランサーが見せつけた気概に、何も感じるところがないと抜かすか？誇るべき真名を持ち合わせておきながら、コソコソと覗き見に徹するなら、魔術師（キャスター）の英霊以下の腰抜けだわな。英霊が聞いて呆れるわなぁ。んん！？」

キャスターを馬鹿にしているように聞こえるが、ライダーとしては褒めている。魔術師の英霊なら、自分の工房に引き込んだりする

ような搦め手が定石だとマスターであるウェイバーから聞いている。だというのに、剣戟に惹かれて出てきたのだ。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮辱を免れぬものと知れ！」

ライダーの大熱弁は全マスターと全サーヴァントの耳に入った。マスターはライダーの横に1人、闇に紛れて潜んでいる3人、結界外から戦況を見ている3人。ほとんどが、ライダーの大熱弁を冷ややかに聞き、2人ほどはこれは拙いと思った。対するサーヴァントはライダーを含めた5体はただ聞き流し、1体は大熱弁とすら理解できる理性は無く、最後の1体は挑発と解かっていても、それを見過ごすような器で無かった。

戦争開始２（後書き）

これで書いてあったのを全部吐きだしましたので、次は遅くなると思います。

戦争開始３（前書き）

感想　かにかま様

ありがとうございます！

戦争開始3

黄金の輝きと共に、残る2体の内の1体のサーヴァントが姿を現す。黄金の鎧を身に纏い、なお且つ挑発を受けて出てきたのを鑑みれば、クラスはアーチャーとおのずと判る。弓を扱う英霊と考えれば、キャスター同様に容易に姿を現すモノではないが、昨夜の戦いを知っているキャスター以外は驚愕する。アサシンをいとも簡単に葬り去ったその実力を。

「我(オレ)を差し置いて“王”を称する不埒者が、一夜内に二匹も涌くとはな」

アーチャーとしてか、それとも他のサーヴァントと同じ地に足をつけるのが嫌ってか、1体だけ街頭のポールの頂上に出現した黄金の英霊は不愉快そうに自分以外を見下しながら言う。

「難癖つけられたところでなぁ……イスカンダルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

冷酷にして無慈悲な声で、確信している事柄をハッキリと言い。他の王を名乗るセイバーとライダーを同時に敵に回すなどとまったく意に介していないのだろう。不遜のレベルではなく、自身が決める事がそのまま世の心理としているような、一歩間違えば狂人とさして変わらぬ目で見られるが、その風格はライダーと比べても霞むまず、アーチャーの方が格上とさえ思える。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？貴様も王たる者ならば、まさかおのれの威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？雑種風情が、王たるこの我に向けて？」

問いを投げるそのものを不敬と取ったのか、あるいは問いを「おまえは本当に王なのか？」とでも受け取ったのかどうかは解らないが、ライダーの問いはアーチャーにとっては許すにあるまじき行為だったのだろう、不愉快さを更に強めて言う。

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を知らぬと申すなら、こんな蒙昧は生かしておく価値すらない」

アーチャーの背後の空間が揺らめき、まるで水面から出てくるかのように空間を波立たせて2つのアーチャーの武器が出てくる。どちらも装飾のなされて煌びやかな印象と共に、宝具としか考えられない魔力を放っている。その刃先はライダーに向けられ、今すぐにでも撃ち出しかねない。

そのアーチャーの攻撃態勢を見て、誰にも見られない位置から憎悪の念を燃やして、自身の命を魔力に変える魔術師、間桐雁夜（まとうかりや）が嗤う。アレは間違いなく遠坂時臣（とおさかときおみ）のサーヴァントであろう。アレを潰せば時臣は聖杯戦争から脱落し、きっと屈辱に塗れた顔をするに違いないと。だから、己がサーヴァントに1つの命令を下す。

「殺すんだバーサーカー！あのアーチャーを殺し潰せッ！！」

その命令を受け、バーサーカーは5体のサーヴァントがいる戦場へと赴く。マスターと同じく、憎悪の念を燃やしつつ。

いきなりの魔力の奔流に驚いたのは全員だろう。アーチャーの攻撃が炸裂した訳でもなく、先んじてライダーが戦車で突撃をかました訳でもないのだから。

全員の視点がその魔力の奔流の出所に集中する。次第に形の無かった魔力はある1つの形に成る。誰もが驚いたが、誰もが可能性として考えた事の1つだろう。残る最後のクラスであるバーサーカーの登場に。その姿は“負の波動”を放ち、一分の隙間もなく甲冑に覆われていた。しかし、同じサーヴァントであるセイバーの白銀の鎧や、アーチャーの黄金の鎧のような煌びやかさまったく無く、底の見えない穴のようにただ黒い鎧だ。

英霊なら、語り継がれる華々しい戦果や何かしらの活躍がある。それに当てはまらない英霊もいるが、それはアサシンやキャスターのようなクラスに呼ばれる事が多い。だが、鎧を着込んでいるという事は、騎士ような戦場での逸話を持つような者であろう。だというのに、ここまでの差はなんなのだろうか？唯一直に見える、爛々と燃える双眸の不気味な輝きは狂化の影響として見ても、怨霊のような不気味さは……それが狂化の影響だけなのか、元々のモノか、あるいはその両方かは真名が解らなければ判断ができないのだが。

“輝き”の要素を持っていないのは気にかかるところである。出揃っている1体以外の他のサーヴァントを見ても、それぞれの備え持つ“華”がある。キャスターだけは、バーサーカーのように“輝き”の要素は皆無なのだが……。それでも、キャスターですら持っている“輝き”を持っていないのは異常なのだ。

「……なぁ征服王。アイツには誘いをかけんのか？」

「誘おうにもなぁ。ありゃあ、のっけから交渉の余地なさそうだわなぁ」

理性の無いバーサーカーでは、会話すら出来ないのだ。交渉などできようはずがないし、バーサーカーは他のサーヴァント全員に殺気しか向けていない。

「で、坊主よ。サーヴァントとしちゃどの程度のモンだ？あれは」

マスターであるなら、サーヴァントのステータスを“観れる”特殊能力が聖杯より授けられる。その事を承知しているから、敵に成り得るバーサーカーがどれほどかをライダーは聞く。

「……判らない。まるきっり判らない」

「何だぁ？貴様とてマスターの端くれであろうが。得手だの不得手だの、色々と“観える”ものなんだろ、ええ？」

通常であるなら、それはありえない事だ。現に、ウェイバーはバーサーカー以外のサーヴァントの能力値をすでに透視して把握した。

「見えないんだよ！あの黒いヤツ、間違いなくサーヴァントなのに……ステータスも何も全然見えない！」

それは、ほとんどのマスターの狼狽でもあった。闇に潜んでいたり、なにかを通してバーサーカーを見ているマスター達はそのステータスは一切窺い知る事が出来なかった。なぜ観えないのか？疑問に思いつつもしっかりとバーサーカーの姿を確認しようとして気付く。黒い甲冑と燃える双眸しかハッキリと確認できない。もっと正確に言うのなら、黒い甲冑としか確認できないのだ。特徴と言える特徴が確認できず、細部がハッキリと見えないが為に没個性なモノとして認識してしまう。それだけなら、まだ姿と真名を隠されているだけで済むが、隠蔽の効果は姿だけでなく観れるはずのステータ

スまで及んでいる。それが何らかの呪いなのか、宝具の効果かは判らないがバーサーカーの能力である事は確かだろう。

「どうやら、アレもまた厄介な敵みたいね……」

アイリスフィールの呟きに、セイバーは頷いた。

「それだけではない。5人を相手に睨み合いとなっては、もう迂闊には動けません」

バトルロワイヤルの常道なら、一番劣勢な者を総掛りで潰すのが最も堅実だ。サーヴァントのクラスでの常識の強さで言うのなら、キャスターが劣勢と考えるの自然だろう。

しかし、セイバーの直感は違うと訴える。アレはどのサーヴァントにも早々には引けを取らない程の強さは持っている。なら、どのサーヴァントが一番劣勢かと言えば、セイバーだろう。マスターを後ろに控えさせ、ランサーによって治癒不可能な傷を左手に付けられた状態だ。手傷を負っているのはセイバーだけであり、キャスター、アーチャー、バーサーカーの三者は消耗なんてしておらず、自分のマスターの心配をせずに戦える。ランサーは消耗しているが、どこかに隠れているだろうマスターの心配はしなくて済む。ライダーは戦車にマスターを乗せているからマスターを守る必要性があるが、常に隣にいるのだからマスターを守る事はセイバーよりも格段に楽だろう。例え劣勢だとしても、そう簡単に討ち取られるつもりはセイバーには無いが、他のサーヴァントとマスターもそう考えるとは限らない。

動けばそれは隙になる。それを解っているから、誰もが他のサーヴァントの動向を観察し、自分がどう動くかの算段をつけているのだ。その過程で、どうしてこの場に姿を現したのかが気に掛かる存在が2体居る。キャスターとバーサーカーだ。どちらも何の突拍子

も無しにこの場に姿を現した。そもそもキャスターはなぜ、ライダーのセイバーとランサーへの提案を答えるかたちで姿を現したのか？最弱（キャスター）のクラスで召喚された英霊がなんの備えもなく戦場に出てくるものなのだろうか？疑問の尽きない存在だが、バーサーカーも同等に疑問がある。一番最後に姿を現した理由が誰にも見当がつかない。真っ当に戦略を組み立てるのなら、敵のサーヴァントが潰し合うのを傍観してサーヴァントが1体だけが残る状況か、どのサーヴァントも疲弊した状況になるのを待ってから投入すれば、漁夫の利を得られる可能性が高いはずなのに、混沌とした戦場になぜバーサーカー投入したのかが。

目的の不明さから、自然とキャスターとバーサーカーが注視される。だが、ただ1人だけはその真紅の双眸で、ただ純然なる怒気と殺意を秘めて眼下のバーサーカーを見下ろしている。

「誰の許しを得て我を見ておる？狂犬めが……」

バーサーカーは初めから、アーチャーしか見ていなかった。見られる事は有り触れた事なのだから、見ているのが普通であれば、アーチャ―は特に気にも止めない。だが、今回アーチャーを見ているのは―――アーチャーから言わせれば―――卑しく下賤なサーヴァントだ。それが自分を値踏みするように視線を浴びせられるのは侮辱に他ならない。

「せめて散りざまで我を興じさせよ。雑種」

アーチャーの号令によりライダーに狙いをつけていた宝具の刃先は向きを変え、バーサーカーに向けて放たれる。

戦争開始４（前書き）

感想　コクイ様、かにかま様
ありがとうございます！

戦争開始４

無造作な宝具の射出。アサシンを簡単に葬り去った実績で、ある程度の威力は誰もが予想していたが、ソレは路面を吹き飛ばし、アスファルトを粉塵にして巻き上げて破壊力を示す。その破壊力はサーヴァントなら再現可能だが、それが無造作に宝具を射出してだと話が変わってくる。宝具はサーヴァントなら持っているが、それは虎の子の一撃として使ったり、常時使用型として戦闘を有利に進める為に使う。普通は、捨てるかのように宝具そのものを射出するような使い方はしない。

「……ッ！」

誰もが息を呑んで驚いた。粉塵の中に五体満足のバーサーカーの影が現れ、一陣の風が粉塵を払い除けてアーチャーの攻撃の結果を全員の目に晒させる。

アーチャーによって射出された宝具の１つはバーサーカーから僅かにそれた位置にクレーターを作りだした。これには、誰もが納得した。バーサーカーと言えど、避けるくらいは普通にするから避けたのなら十分あり得る事だ。だが、射出されたもう１つの宝具の結果は誰もが目を疑った。それが、バーサーカーの手に握られているという結果に。

バーサーカーがした事は口に出せば単純だった。飛んで来た宝具を掴み取り、後に続いてきた宝具を掴んだ宝具で打ち払った。たったそれだけだが、それが他のサーヴァントに可能かと言えば、不可能に近い。能力の問題もあるが、いくら無造作に射出されたとして強力な力を持つ宝具を掴もうなどまず思い付かず、思い付いても実行しようとはしない。考える為の理性がないバーサーカーだからこそ、実行したのだろう。他にも、要因があるのだが。

「……奴め、本当にバーサーカーか？」

当然の疑問だろう。理性が無いのに、バーサーカーの行動は荒々しい獣のモノで無く、洗礼された技術による動きと見て取れる。

「狂化して理性を無くしているにしては、えらく芸達者な奴よのぉ」

「あんなのが……バーサーカー……？」

「理性が無いゆえの行動なのに、その行動は技術が際立っているか……体に染み付くほどの武練を積んでいる。と、いったところか？」

「バーサーカーに相応しくない英霊が呼ばれたという事でしょうか？」

「そうね。本来なら、弱い英霊を狂化で能力値を強化させて使うのがバーサーカーのサーヴァント。だけど、アレは狂化無しでも他のサーヴァントに引けを取らないって私でも解るわ」

宝具は英霊にとっては半身に近く、使い手の英霊以外は原則は満足に使えない。だが、バーサーカーはまるで使い慣れた自身の宝具かのように十全に使いこなして、間髪容れずに迫った追撃を鮮やかに打ち払って見せたのだ。その手腕に驚きつつも、口には出さないが――敵であろうと――称賛しているのがほとんどであった。

だが、宝具を取られたアーチャーは驚愕も称賛も心に片隅に押し遣られて、ただ一つの感情に凍えていた。

「――その汚らわしい手で、我が宝物にふれるとは……そこまで死に急ぐか、狗（いぬ）ッ！」

怒り一色に感情を染め上げ、先程向けたバーサーカーへの怒気と殺意は更に上がる。それを目に見える形として、１６挺の宝具が展開させられた。どれもが装飾がされいて美しく磨き上げられている。そして、その全てがバーサーカーに狙いを付けている。先程射出された宝具は剣と槍だったが、今度は剣と槍だけでなく、斧、槌、矛といった武器の形状には統一性がなく、中には分類が判らない形状の武器までもある。その１つ１つがアーチャー自身の宝具だとすれば、昨夜アサシンを葬り去ったのを含めれば現状では１９もの宝具を持つ有り得ない英霊となる。

「そんな、馬鹿な……」

英霊の宝具は１つとは限らない。だが、１９の宝具も持つのは常識に照らし合わせれば多すぎる。多くても、４つくらいが限度だ。だが、宝具の捨て石のような扱いを考えると、アーチャーはまだまだ射出する宝具を持っていると考えられる。

「その小癪な手癖の悪さでもって、どこまで凌ぎきれるか――――さぁ、見せてみよ！」

後光のようにアーチャーの背中に展開していた宝具の群は、号令一つでバーサーカーを射るべく殺到する。

宝具の風を切って進む音は轟音となって響き、宝具が輝きながら突き進む様は流星や打ち上げ花火のように見える。見惚れるような輝き持っているが、それが攻撃である事は変わらない。雨のように降り注ぐ宝具の群によって、倉庫街の街路はまばたきをしきる前に無残な瓦礫ばかりの広場のようになった。

だが、まだ終わっていない。アーチャーの宝具の射出は途切れる事なくいまだに宝具の雨を降らし続けている。バーサーカーが倒れ

ていないからだ。
　バーサーカーは最初にしたように、飛来した宝具を今度は空いている左手で掴み取って、後続の宝具を掴み取った宝具でこのごとく打ち払っているのだ。本来ならバーサーカーの立っている位置も爆撃に晒されたように瓦礫に呑まれたのだろうが、バーサーカーの迎撃でそこだけが相も変わらず原型を留めている。

「――――どうやらあの金色は宝具の数が自慢らしいが、だとするとあの黒いヤツとの相性は最悪だな」

　目の前の常軌を脱したサーヴァント同士の戦いにセイバーとランサーは言葉を失って見ているだけだが、ライダーとキャスターは冷静に分析し、ライダーにいたっては1人呟いた。

「黒いのは武器を拾えば拾うだけ強くなる。金色も、ああ節操なく投げまくっていては深みに嵌る一方だろうに。融通の利かぬ奴よのぉ」

　誰が予想したのだろうか？アーチャーが１６もの宝具を展開した時点で、誰もがそれでバーサーカーが貫かれたりして聖杯戦争から退場すると思っていた。だが、結果は違った。バーサーカーは最初に凌いだように、１６の宝具全てを凌いだ。それによって付近は流れ弾となった宝具によって更地同然されたが、そんな事は神秘の秘匿さえしているなら気に掛ける事では無い。
　アーチャーの宝具の射出が途切れた事で、場を静寂が支配する。その静寂の中でバーサーカーだけに視線が集中される。
　狂気の英霊がこのまま攻勢に出ないはずが無い。そんな確信にも似た感情で全員がバーサーカーの動向に集中した。
　バーサーカーは握っている宝具を掲げ上げ――――予備動作無しで街灯のポールの上のアーチャーめがけて投げ放った。握っている時

は腕の延長かのように感じたが、元々中てる意図があったかは謎だがバーサーカーの手を離れた宝具の軌道は雑に感じられた。アーチャーの足場になっていた街灯をバターのように寸断して三等分にさせて倒壊させた。だが、そこに既にアーチャーは居ない。街灯が寸断されるより先に身を翻しており、街灯が倒壊するのよりやや遅れて地に足を付けた。

「痴れ者が……。天に仰ぎ見るべきこの我を、同じ大地に立たせるかッ」

宝具を取られ、続けて自分の攻撃を完璧に凌ぎ切り、あまつさえ自分を同じ大地に立たさせられた。その全てが眼前のサーヴァント1体によってだ。しかも、狂気に呑まれた下賤な雑種によって行われたのだ。アーチャーにとっては、度重なる不敬によって憤怒は自制が効かない段階に達した。

「その不敬は万死に値する。そこの雑種よ、もはや肉片ひとつも残さぬぞ！」

怒りによって紅蓮の炎のように真紅の双眸を燃え上がらせ、再び攻撃態勢に移る。展開された宝具――――総勢３２。予想を嘲笑うかのようにアーチャーは軽々と先程の倍の宝具を出現させた。怒りで我を失っているようだが、アーチャーが限界ギリギリまで出しているようには見えない。１６もの宝具を打ち払ったバーサーカーにも驚愕したが、その倍の宝具を展開せしめたアーチャーへの方が驚愕の度合いが大きい。

アーチャーの力の底はどれ程に深いのだろうか？誰にも予測できる域でないとしか解らなかった。

『……ギルガメッシュは本気です。さらに『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』を解き放つ気でいます』

アーチャーのマスターである遠坂時臣は、戦場となっている倉庫街から遠く離れた深山町の高台に建つ自分の家――――通称　遠坂邸――――の地下室で戦場をアサシン、言峰綺礼（ことみねきれい）、遠坂家の宝石魔術を応用した“通信装置”を通して不自由無く把握していた。今なら、例えそういう手段が無くても、アーチャーが何をしでかそうとしているかは、アーチャーに吸い上げられる魔力で嫌でも解るのだが……

備えは、態勢は万全なはずだった。綺礼とアサシンは実に上手くやってくれており、御蔭で戦況を知るのには苦労していない。問題は満を持して呼び出した英雄王ギルガメッシュが、高い単独行動を得られるクラスであるアーチャーで召喚された事だった。サーヴァントであるのにマスターの意思をまったく尊重しないのは、王の中の王であるギルガメッシュだからい仕方なしと思い、仕える家臣としてスタンスを取るのも、たとえ写し身であろうとも高貴なることを尊ぶ時臣の信条からのモノだ。

サーヴァント同士の戦いについてはギルガメッシュに基本は一任している。マスターとして、時にはギルガメッシュの自由にさせずに何かしら方法で強制するしかないとも考えていた。それが、こんなにも早く再び必要に駆られるとは思ってもみなかった事だ。前回は分裂したアサシンの1体と戦わせる時は説得で済んだ――――それでも、それなりの時間が掛かった――――が、今はその手段は使えない。連絡手段が無いというのもあるが、今はマスターである時臣の言葉に耳を貸そうとすらしないだろう。単独行動のスキルを持っていなければ魔力供給を切れば嫌でも戦闘を中断させられるが、クラススキルで持っているために無意味に終わる上にギルガメッシュと

の関係に亀裂や溝を作りかねない。なら、最終手段しか残っていない。令呪による強制だ。しかし、時臣は目的の為には3回の内2回しか使用する事ができない。その貴重な2回の内の1回を此処で使わざるおえないとは……代々伝わる遠坂の家訓である、どんな時でも余裕を持って優雅たれに反するだろうが、此処は決断しなければならなかった。

『導師（マスター）よ、ご決断を』

綺礼に催促されずとも、時臣はもう決断している。今はまだギルガメッシュの本気を曝す時期ではない、アサシンでの情報の収集に徹する雌伏の時なのだ。早い段階で曝してしまえば、下手をすれば複数のマスターが結託してギルガメッシュに挑みかねない。そうなれば、いくらギルガメッシュでも危険かもしれないと自分に言い聞かせて令呪によって命令を発する。

今まさに攻撃をしようとしていたアーチャーがピタリと動きを止め、忌々しそうに視線をバーサーカーから外して東南を見据える。

「貴様ごときの諫言で、王たる我の怒りを鎮めろと？大きく出たな、時臣……」

吐き捨てるように言い、すぐさま展開していた無数の宝具何処にともなくしまう。

「……命拾いをしたな、狂犬」

殺意の炎は双眸から消え失せてはいるが、その表情は不服だと語

っている。

「雑種ども。次までに有象無象を間引いておけ。我と見(まみ)えるのは真の英雄のみで良い」

最後に言いたい事だけ言い、実体化を解いてすぐにアーチャーは姿を完全に消す。

「フムン。どうやらアレのマスターは、アーチャー自身ほど剛毅な質(タチ)ではなかったようだな」

予想外のあっけない終わり方に呆れたようにライダーは嘯くが、誰もがそれに頷こうとするほど呑気に構えてはいない。いまだに、アーチャーを撤退にさせるほどの実力を持つバーサーカーが立ちはだかっているのだから。

戦争開始４（後書き）

ぶっちゃけると、アーロニーロがほとんど関われない最初の方は原作様の劣化コピーですよね。

戦争開始５（前書き）

感想　竜華零様

ありがとうございます！

戦争開始5

サーヴァントは現界しているだけで魔力を消費し、指一本動かすのにも魔力を消費するような存在だ。それが全身を使う戦闘をすればただ立っている状態と比べれば数倍の魔力を消費し、消費した分をマスターの魔術回路から吸い上げる。吸い上げる量はサーヴァントが決める事が出来るので、マスターが未熟な場合はサーヴァントによって吸い上げる量を調節する事もある。その逆の、マスターの方からも魔力供給を断ち切る方法がある。

だが、雁夜にはそれに思い当たったり、実行する理由や余裕など微塵も無かった。間桐雁夜は蟲による改造――――刻印虫を体に埋め込む事――――によって魔術師になっている。刻印虫は疑似魔術回路となっており、雁夜自身の魔術回路と共に魔力を生成している。ただ、刻印虫は雁夜を蝕んで魔力を生成する。

「ぐ……が、ぐぁ……ッ！！」

蝕まれる痛みは生成される魔力量に比例されるので、サーヴァントが霊体化でもしていて消費を抑えていれば時折おきる動悸や眩暈で済むが、サーヴァントたるバーサーカーは全力を出していないとはいえ、消費する魔力量は他のサーヴァントより数段勝ることもあり、並外れている。

「がぁぁぁッ……」

その為に刻印虫は活発に雁夜を蝕んで魔力を供給する。内側から喰われる激痛が全身を襲い、いったいどこが痛いのかが解らなく程である。魔力消費によって体が蝕られる雁夜は、まさに身を削って戦っているのだ。

その痛みが和らいだ瞬間には思考能力はほぼ無く、落ち着くまで少し時間が必要であった。

「……はぁ……はぁ……」

荒い呼吸しながら痛みを鎮め、戦場に居る使い魔の視覚を借りて戦況を見る。残っているサーヴァントはバーサーカーを除いて４体。痛みで戦場を見ている余裕が無かった雁夜は何があったかは解らなかったが、これだけは解った。アーチャーが退いたと。

戦況を判断するマスターが居るのだ、分が悪いと悟ればサーヴァントを退かせるだろう。

「……ふふ、ははは……」

雁夜からすれば自分の勝ちだ。聖杯戦争のルールに照らし合わせれば無駄な戦いだ。それも、敵に手の内を晒した失敗作のような代物だ。

だとしても、アーチャーを撤退させたのは雁夜の中では大きな意味を持つ。自分でもやれる。苦痛にさえ耐え切れば聖杯を取れると……

今回はそれだけど良しとし、帰ろうとする。当面はアーチャーだけが雁夜の狙いであり、そのアーチャーが退いた今はわざわざ戦う意味も、全てのサーヴァントを自分で倒す必要も無いのだからこの戦場にもう興味は無い。

だが、バーサーカーは違った。次なる標的をセイバーに見定めて突進を開始した。

「やめろ……戻れ！戻ってこいバーサーカー！」

言葉を発し、念話で単純な命令を出すがバーサーカーはそれが聞

こえないのか、無視しているかは解らないが、そのままセイバーに突進を続ける。

「バーサーカァァッ！やめろォ！！」

再開された刻印虫の活動によって激痛が全身を奔り始めた事で絶叫に近かったが、それでもバーサーカーには届く事は無かった。雁夜は痛みによって暗闇でのた打ち回る事を余儀なくされた。

「～～～～～～～～ッ！」

突然バーサーカーに狙われたセイバーは初撃は危なげなく防御した。いきなりの事だが、あらかじめ予測していた事もあり挑みかかられたのは驚くに値しなかった。しかし、バーサーカーが握っている武器を見て驚愕した。ソレは、ただの鉄柱だったからだ。付け加えるなら、バーサーカーによって切り倒されて2メートル余りの長さになった物だ。有り得ない事だ。ただの鉄柱がセイバーの剣によって斬れなかったという事実が。

その鉄柱を槍のように両手で構えて、連続で突きを繰り出す。それは型にはまった槍の基本的な単純な攻撃だ、それならセイバーは幾度と打ち合った事のある手法になる。単純ゆえに、使い手の力が大きく反映される。バーサーカーの圧力は凄まじく、得物が鉄柱だというのを微塵も感じさせない。

それが、一番おかしいのだが。膂力が凄まじいのはアーチャーに射出された宝具を掴み取ったからまだ予想の範囲内。だが、鉄柱が己の宝具の剣とまともに打ち合えるのには、セイバーは納得できなかった。セイバーの剣は並ぶ物の無い程の宝剣の中の宝剣だ。決して、鉄柱ごときを斬れないなまくらではない。やすやすとは斬れな

い物も存在するが、それは宝具くらいのモノだ。

「なん……だと？」

歯をくいしばりながら耐えるセイバーは目を疑った。

バーサーカーが握っている鉄柱が、鎧のように黒く染まっている。葉脈のような黒い筋が幾重にも鉄柱に絡み付き、今もゆっくりと広がりながら侵蝕している。ソレの出所はバーサーカーの両手だった。黒い籠手に掴まれたその場所から広がっていた。

「貴様は……まさか！？」

セイバーは理解する。バーサーカーの宝具の正体を。

見守るランサー、ライダー、キャスターも同じ結論に辿り着く。

「……そういうことか。あの黒いのが？んだものは、なんであれヤツの宝具になるわけか」

「恐ろしい宝具だな。下手をすればアーチャーのように自分の宝具で傷を付けられるか……面白い」

「……」

ライダーは感心すように言い。キャスターは品定めするかのように観察し。ランサーはただ黙ってセイバーとバーサーカーの戦いを見ている。その目線の先でセイバーはバーサーカーに圧されている。豪快な槍捌きでもって圧されている。最良と言われるセイバーが防戦一方となっているのには、ランサーには心当たりがあり過ぎる。奇策を持ってして『必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇』によって負わせた治癒不可能な左手の傷。それのせいで、セイバーは全力を出させずに圧されてい

る。本来なら、自身が得るべきアドバンテージでもってバーサーカーはセイバーを下そうとしている。

（俺は……）

セイバーのマスターである衛宮切嗣は静かに思考する。このままだとセイバーはバーサーカーに負けてしまう。だが、サーヴァント同士の戦いに割って入ろうとも無駄だ。実力においてサーヴァントと人間の間にはまず越えられない壁が存在する。だからマスターが戦うのなら、同じ人間であるマスターに限定される。しかし……

「……舞弥、そっちからバーサーカーのマスターは視認できるか？」

『いいえ。見当たりません』

そのマスターが見つからない。ランサーのマスターなら、切嗣の位置からなら見える場所に居るのを熱感知スコープで確認している。おそらくは直接に指示が出せる場所には居ないのだろう。優秀な魔術師なら、ランサーのマスターのように幻術などで惑わすだけで十分と考える。だが、姿の見えないバーサーカーのマスターは身を隠す事を優先しているようだ。尤も、自分のサーヴァントがバーサーカーであるのなら、細かい指示を聞き入れる理性など望めないのだから当然の選択だとも取れる。

「まずいな……」

状況は最悪だ。例えセイバーがバーサーカーに勝っても、まだ無傷のサーヴァントが3体も居るのだ。このままではセイバーは討ち

取られる。解っていても、できる事が無い。
スコープをセイバーからずらし、デリッククレーンの上を見る。そこには髑髏の仮面を付けたアサシンが居座っている。下手な行動は未だに気付かれていない自分の存在を露呈させる事になる。

「……くそっ」

考える事しかできず、切嗣は静観するしかなかった。

荒々しくもその技の冴えて正確。獣でありながら達人の域の槍捌き。セイバーには解る。元は名立たる使い手だったのだろうと、同時にこれ程の腕を持ちながらなぜバーサーカーのクラスで召喚されたのかは解らないが……

「貴様は……一体！？」

答えが返ってこず、代わりにバーサーカーは鉄柱の槍を大きく振りかぶる。次は大技になると予備動作を見ての判断と、直感で解る。だが、それに先んじて攻撃は繰り出せない。ガードをするが、それすら突破して潰されるだろう。
ゴウッ！と勢いよく風を切る音と共に振り下ろされる。

「悪ふざけはその程度にしておいてもらおうか。バーサーカー」

しかし、セイバーに見えたのは振り下ろされる槍ではなくランサーの背中だった。見れば、バーサーカーの槍は半場で切り落とされている。アーチャーの宝具がバーサーカーの宝具と相性が悪かったように、バーサーカーの宝具はランサーの宝具である魔力を断ち切

る『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』との相性が悪かった結果だ。バーサーカーの魔力を帯びることで宝具化していた鉄柱が、魔力を断ち切られたから元の鉄柱に戻っただけだ。

「そこのセイバーには、この俺と先約があってな。……これ以上つまらん茶々を入れるつもりなら、俺とて黙ってはおらんぞ？」

「ランサー……」

死闘の最中でも、セイバーには感極まるモノがそこにはあった。騎士道。彼女が生涯を通して貫き通し、己の誇りとしているモノだ。ランサーはソレに忠実であったのだ。

『何をしているランサー？セイバーを倒すなら、今こそが好機であろう』

しかし、騎士道に理解を示さないマスターにとっては、自身のサーヴァントの行動は不可解なモノでしかない。

「セイバーは！必ずやこのディルムッド・オディナが誇りに懸けて討ち果たします！」

隠れているマスターに向かって声高に宣言する。

「お望みなら、そこな狂犬めも先に仕留め御覧に入れましょう。故にどうか、我が主（あるじ）よ！この私とセイバーとの決着だけは尋常に……」

既に出揃っているサーヴァントの顔ぶれを見て、ランサーは己が騎士道の誇りに賭けて戦える好敵手はセイバーしか居ないと見定めた。だから、セイバーとはサーヴァントとしてではなく、騎士とし

て尋常に戦って討ち果たしたいのだ。

『ならぬ』

そんなランサーの嘆願を切り捨て、マスターは命令を下す。

『ランサー、バーサーカーを掩護してセイバーを殺せ。令呪をもって命ずる』

ランサーの心中を知ってか知らずか、非情にもサーヴァントとして戦いを強制された。

ランサーはすぐさま槍を反転させ、二槍をセイバーに向かって振るう。セイバーは直感で咄嗟に跳び退いてソレを回避する。

「ランサー……っ！」

呼び掛けようとして、セイバーは言葉に詰まる。令呪によって己が持つ誇りをねじ曲げられたのだ。そんなランサーの表情が通常のものであるはずが無い。戦いに必要の無い顔だけはランサーの心中を表して、怒りと屈辱でその魔貌を歪めている。そんなランサーに言葉を掛けられる訳が無い。

もし、セイバーがランサーにできる事があるとするならば、それは此処では決着を付けさせない事だ。だが、それは絶望的だ。バーサーカーの猛攻を凌ぐだけでも今のセイバーは限界だったのだ。そこにランサーが加われば勝ち目は万が一にも、無い。

「……セイバー……済まッ！」

ランサーの苦しげな呟きは途中で遮られた。

「流石は最速のクラスだ。今ので首を刈るつもりだったんだがな」

何を思ったのか、ここにきてキャスターがランサーへと2本の刀で斬り掛かったのだ。

戦争開始５（後書き）

やっと変えていける。

戦争開始６（前書き）

感想　コクイ様

ありがとうございます！

戦争開始6

「キャスター……なぜ？」

解らなかった。なぜキャスターが対魔力持ちのランサーに挑み掛かったのか。

「セイバー。お前の敵はバーサーカーだ」

そう言うと、キャスターはランサーをセイバーから引き離すように立ち回り始める。なぜ助太刀してくれるのかは解らないが、セイバーはキャスターに感謝し、バーサーカーと向きあう。

短長2つの槍と、脇差しと平均的な長さの日本刀がぶつかって火花を散らす。初撃はキャスターからだったが、すぐにランサーが攻勢に出る。しかし、襲うほんのコンマ一秒前で『必滅の黄薔薇』に日本刀を、『破魔の紅薔薇』には脇差しを槍と自分の間に挟み込んで逸らす。

「どうした？俺は最弱のクラスのキャスターだぞ？」

令呪で命令されたサーヴァントに自由意思など存在せず、ただ命令通りに動くしかない。だが、条件によっては命令に無い動きをさせる事も可能である。キャスターはそこを突いてランサーの動きを誘導する。

『ランサー、キャスターなど手早く処分してすぐにセイバーを殺せ

！』

令呪による命令でセイバーを殺す行動はランサーのサーヴァントは既に決定している。だが、キャスターがその障害になる為にやむなくキャスターを排除しようとするが、このごとく攻撃を潰されて攻め切れない。セイバーを殺す為にキャスターを無視して動こうとすれば、すぐさまキャスターは攻勢に出てランサーのその首を刈ろうとする。いたちごっこになっているが、令呪によって強制されているランサーはともかくキャスターは退こうとはしない。隙あらば、本気でランサーの首を刈ろうとする。

だというのに、ランサーの表情は苦悶のモノではなくなっている。口にこそ出さないが、安堵している。少なくともキャスターが自分を抑えている間はセイバーに不本意な槍を向ける事は出来ないから。

「坊主、キャスターとランサーのステータス差はどうなっておるんだ？」

「筋力と俊敏はキャスターが劣ってる。なのに……なんでランサーが白兵戦ですぐに倒せないんだ……？」

キャスターの俊敏はＣ＋なのに対してランサーはＡ＋。速さはどうやっても覆らない差があるというのに、キャスターはランサーの繰り出す攻撃全てを逸らして凌いでいる。

「よく見てみろ。そうすればおのずと解る」

ライダーにそう言われてウェイバーは目を凝らしてキャスターとランサーの戦いを見るが、人間の動体視力ではおいそれと追える速さではないので結局なにが起きているかは解らない。

「ライダー。僕の目では追い切れないんだが……」

「ん？あぁ、すまんな。状況の説明をするとだな、速さはランサーの方が上なんだが、キャスターのヤツはランサーがより先に動いてランサーの攻撃を逸らしておる。おそらくキャスターのヤツはランサーの動きを予測して動いておるのだろう。それを、キャスターがやっているのは意外だがな」

キャスターがやっているのはランサーの足止め。少なくともライダーにはそう見えた。

「あぁ、欲しいなぁ。セイバーもランサーもキャスターも」

「ライダー？」

ウェイバーはライダーの突然の言葉に不穏なモノを感じ取った。思い返せば、ライダーは欲望のままに行動してきた。そのライダーがいきなり欲しいと言いだしたのだから、何かしらやらかす前兆ではないのだろうか？そう考えた時には———長い目で見れば、征服王イスカンダルをサーヴァントにした時点でだが———遅かった。

「坊主、しっかりと掴まっておれよ！」

ライダーはウェイバーが何をするか問う前に、戦車の手綱を握り直して神牛に駆けろと命令を下してしまう。

「ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ！！」

雄牛が駆け出すと共に稲妻は轟音と目が眩む閃光を撒き散らす。その閃光は、昼夜が逆転したのではないかと思える程に破壊し尽く

された倉庫街をほんの数秒だけ照らし出す。それが目指すのはセイバーだけに気を取られているバーサーカーの背中。
ライダーの戦車を引く2頭の神牛は、まず4本の前肢でバーサーカーを大地に踏み倒し、続く4本の後肢で容赦なく蹂躙する。牛と侮る事なかれ、例え牛だとしても稲妻を踏み締めて空を駆けることのできる神牛であり、紛れも無いライダーの対軍宝具である『神威（ゴルディアス）の車輪（・ホイール）』の一部である。その一蹴りでも、宝具による一撃には変わらず、それを合計8回も受けたバーサーカーのダメージは致命的だっただろう。ライダーの戦車が駆け抜けた後には、立ち上がる事も出来ずに倒れ伏したままのバーサーカーが転がっている。

「――――ほう？なかなかどうして、根性のあるヤツ」

ゆっくりと、弱々しく痙攣しながらであるが立ち上がらろうと上半身をまず起こそうとしているバーサーカーを見てライダーは笑う。トドメとなる車輪による蹂躙だけは、なんとか体を捻って戦車の軌道上から転がり出て回避していたのにはライダーは気付いていた。だが、敢えてライダーは追撃をしない。ライダーはどの様な相手だろうと、真正面から蹂躙して征服するつもりなのだ。バーサーカーを攻撃したのは、今はセイバーへの攻撃を中断させるためにすぎない。今、此処で倒すつもりは毛頭無い。尤も、もしも本気で無い疾走でバーサーカーがやられようとも気にしない。所詮はその程度であったという話になるだけだ。
流石に戦闘続行は不可能と悟ったのか、動きを止めて実体化を解いて霞となって消える。消えるその瞬間まで、バーサーカーは憎悪と狂気に染まった双眸でセイバーだけを見つめていた。

「と、まぁこんな具合に、黒いのにはご退場願ったわけだが――――」

ライダーはまだ戦っているキャスターとランサーを見ながら言う。

「ランサーのマスターよ。どこから覗き見しておるのか知らんが、下衆な手口で騎士の戦いを穢すでない……などと説教くれても通じんか。キャスターのようでない魔術師なんぞが相手では」

少なくとも、キャスターは騎士の戦いは何たるかは解っているようには見えた。でなければ、あんなタイミングでランサーに挑み掛からないだろう。

「ランサーを退かせよ。なおこれ以上そいつに恥をかかすというのなら、余はセイバーに加勢する。3人がかりで貴様のサーヴァントを潰しにかかる。もしも、セイバーかキャスターが退くと決めたお主等になおも挑む掛かるようなら、余が責任もって足止めもするが、どうする？」

『撤退しろランサー。今宵は、ここまでだ』

あまり間をおかずに撤退をランサーのマスターは命令する。それによって自由になった体でランサーは槍の刃先を下げる。

「感謝する。キャスターに征服王」

「フン……」

「なぁに、戦場（いくさば）の華が愛（め）でるタチでな」

礼を言われたキャスターは、もう此処には用は無いと言わんばかりすぐに実体化を解いて姿を消す。

「なんだ、せわしないヤツだな」

キャスターが消えた辺りを見ながらライダーが呟く。ランサーは苦笑しながらキャスターが消えた辺りとライダーに視線だけで謝意を伝え、続けてセイバーにも頷く。
言葉を交わさずとも互いに解る。決着は、尋常な勝負を――――
それを確認したランサーは実体化を解いて去る。

「……結局、お前とキャスターは何しに出てきたのだ？征服王」

「さてな。そういうことはあまり深く考えんのだ。キャスターについては、機会があったら本人に聞くしかないなぁ。まあ、あやつは簡単に退場するような玉ではないようだから、機会はきっとあるであろう」

セイバーもキャスターへの評価は同じだ。ランサーを一時的でも抑え込んだ手腕は、キャスターとしては破格な能力だろう。白兵戦もある程度できるなら、早々に退場するような事はないだろう。

「ではな。次に会った時にランサーとの因縁を清算した後なら、存分に戦おうぞ！」

そう言い、ライダーはマスターが気絶しているのに気付かずに戦車を走らせて空へと駆け上がる。
サーヴァント同士の戦いはひとまずは幕を下ろした。その幕の裏で、暗躍を始める者達が居ようとも、気付ける者は極少数だった。

幕裏の行動（前書き）

感想　結愛羅様

ありがとうございます！

幕裏の行動

キャスターことアーロニーロは最初から、あるモノを手に入れる為に動いていた。しかし、セイバーとランサーの戦いを見て戦いたくなってしまい、自分に戦力調査と言い聞かせて、ランサーと白兵戦をした。その結果は上々。令呪によって制限されたランサーは後は宝具を使えば打ち取れると確信した。真名解放をして討ち取り、ランサーを喰らおうと思った矢先に、ライダーによって戦いは中断されたが微塵も諦めていなかった。

ランサーとそのマスターはキャスターにとても都合が良かった。ライダーのマスターであるウェイバー・ベルベットを教え子と呼んだ。つまり、誰かに教えるくらいにはキャスターが持ちえない魔術の知識は持っているのだろう。しかも、マスターであるから令呪もその身に宿している。魔術の知識と令呪、さらに自分以上のステータスを持っているが倒せるサーヴァントを持っている。全てを喰えば、一気に自分に有利になる上に全力のセイバーと戦えるようになる。この上なく魅力的に思えた。だから、先に戦場を離れてランサーのマスターを尾行した。

そうして着いた場所は、冬木ハイアットホテル。

冬木ハイアットホテル。冬木市における最高級の設備とサーヴィスを誇るホテルであり、魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが最上階である地上３２階を貸し切りにして拠点兼工房にした場所である。ホテル側は贅を凝らした正に最高級なモノを提供していると思って疑わないが、生まれもっての正真正銘の貴族であるケイネスにとっては、張りぼてかメッキとしか感じ取れなかった。ただ金にモノを言わせて買い揃えられた調度品の数々は醜悪にすら思え

た。そんなモノより、今はもっと気にくわないモノが目の前に存在するのだが……

「何たる失態だ、ランサー！貴様の槍はキャスターにすら届かなかったではないか！」

令呪によって下されたのとは別の行動故に、ランサーは全力を出せてなかったのだが、キャスターに槍を届かせられなかったのは明白な事実としてランサーは己がマスターの叱責を甘んじて受けている。

「そもそも貴様は戦いを愉しんでいたな。セイバーの時も、キャスターの時も！」

セイバーの時は純粋な競い合いを愉しんでいた。しかし、キャスターの時は違う。令呪によって動かさせられていたのだ。そこにランサーの意思は存在できずに、命令をこなす機械としてなっていたのだ。それでも、ランサー個人としてはそのような自分を足止めしたキャスターの手腕に驚愕し、称賛の言葉を送りたいほどだ。しかし、それは言い訳にしかすぎないとも解っている。ケイネスをマスターとしての聖杯戦争に勝利すると誓ったのだ。

「……申し訳ありません。主よ」

ならば、これはして当然の主への謝罪であり、達成できなかった事を改めて誓って主に報いるのだ。

「いずれ必ずや、あのセイバーとキャスターの首級（しるし）はお約束いたします。どうか、いましばらくのご猶予を」

「改めて誓われるまでもない！それは当然の成果であろう！」

しかし、ケイネスは当然と言う。

「貴様は私と契約した！このケイネス・エルメロイに聖杯をもたらすと！それは即ち、残る6人のサーヴァント全てを斬り伏せることと同義だ。この戦いの大前提だ！

それを今更……たかだかキャスターごときにも必勝を誓うだと？それが価値ある約定だとでも抜かすか？いったい何を履き違えている？」

騎士と魔術師の価値観の違いが、大きく2人の間に横たわっていた。

「――――履き違えているのは貴方ではなくて？ロード・エルメロイ」

ランサーでもケイネスでもない声、女性の声が割って入る。

「ランサーは良くやったわ。間違いは貴方の状況判断でなくて？」

「ソラウ、何を言うんだ……」

声の主はソラウ・ヌァザレ・ソフィアリ。時計塔の科の1つである降霊科（ユリフィス）の長でありケイネスの恩師でもあるソフィアリ学部長の息女。そしてケイネスの栄光を完成させる運命の女神――――即ち、ケイネスの許嫁だ。しかし、それだけでケイネスがランサーへの対応とうって変ってへりくだっている訳ではない。無論、頭でも許嫁としても恩師の息女としても無碍な扱いができないと解っているが、根本的なモノはもっと単純かつ複雑なモノだ。ケイネスはソラウに1人の男として恋い焦がれた身の上だ。

「ねぇケイネス。私に言わせてもらえればね、あの場ではランサーの提言通り、バーサーカーを標的にするべきだったのよ。いったんセイバーと共闘させてでも」

ソラウはケイネスと違って家ごとに受け継がれる魔術刻印を持っていないが、名門たるアーチボルト家に引けを取らないソフィアリ家の一員として魔術の教育を受けた身だ。倉庫街の一戦も使い魔を通じて逐一把握していた。

「もちろん、そうした場合でもあのアーロニーロと名乗ったキャスターが手を出してきたかもしれないわ。でも、例え手を出してきたとして令呪に縛られていないランサーだったら、足止めされずにすぐにキャスターを討ち取れたでしょう？」

ソラウが微笑みながら聞き、ランサーはそれに対して黙って頷く。何気ない事のはずだが、それはケイネスを苛立たせる。彼女は自分にあんな風に微笑んだ事はあっただろうか？無かった。

「……君はセイバーの脅威を知らない」

やり場のない苛立ちや憤りを噛み殺してケイネスは言う。ソラウの言う事にも一理あるのは解っている。だが、ソラウは司令塔ではない。ケイネスは聖杯戦争を自分の判断で戦い抜き、聖杯をこの手に納めようと考えている。

「私はマスターの透視力で、あのセイバーの能力を把握できた。あれはとりわけ強力なサーヴァントだ。総合力ではディルムッドを凌いで余りある。あの場で、倒せる好機を逃すわけにはいかなかった！」

ランサーの宝具の『破魔の紅薔薇』と『必滅の黄薔薇』２つあるが、２つとも戦闘を有利に進める能力が宝具に宿っているタイプだ。真名解放で、一発逆転を狙えないが故に総合力で劣る相手には苦戦を強いられる。だからケイネスは、見れたステータスが一番高いセイバーをなるべく早い段階で脱落させたかった。それに、セイバーは騎士王と名高いアーサー王と言うではないか。それならばセイバーが使っていた剣は、最も有名な聖剣であるエクスカリバーに他ならないはず。宝具はあちらの方が格上であり、エクスカリバーがどのような力を持っていようとも、それが並みの宝具以上とは簡単に想像ができる。

「セイバーの方が能力が上……それなら危険視するのは解るわ。それなら、どうして貴方はセイバーのマスターを放っておいたの？貴方にはあの女に無いアドバンテージがあったのに……」

「それは……そうだが……」

「マキリが完成させた本来の契約システムに、さらに独自のアレンジを加えてのけた貴方は、たしかに天才だわ。さすが降霊科随一の神童と謳われただけのことはあるわよ」

天才とは誇張ではなく、事実である。これまでケイネスは常に周りの魔術師より一歩も二歩も前を歩いて来た。周りがそんな彼に期待し、その期待に難なく応えてきた。そんなケイネスが用意した秘策はサーヴァントとマスターの、本来なら単一しかない因果線を２つに分割して配分する変則契約。これによって、ケイネスは自分が背負うはずだったサーヴァントを現界させる魔力の負担をソラウに支払わせている。サーヴァントのマスターでありながら魔力を存分に使えるのはケイネスただ１人であり、魔力と秘術がモノをいう魔

術師同士の戦いで全力を出せるのも、ケイネス1人という事になる。

「――でもねケイネス。貴方は魔術師として一流でも、戦士としては二流よ。せっかくの下準備を、戦略的にまったく活かしていないじゃない」

「いや、私は……」

反論しようとしたケイネスの言葉を遮るように突如、防災ベルがけたたましく鳴り響く。

「……なに？何事？」

ソラウは当惑を隠さず呟きを漏らす。すぐに部屋に備え付け電話がベルを鳴らしはじめる。ランプの点灯はフロントからの着信を表示している。

ケイネスは受話器を取り上げて係員からの連絡に耳を傾ける。話を聞き終える頃には、魔術師としてのケイネスの顔が出てきていた。

「下の階で火事だそうだ。すぐに避難しろと言ってきた。小火（ぼや）程度のものだそうだが、どうやら火元は何カ所かに分散しているらしい。まぁ間違いなく放火だな」

「放火ですって？よりにもよって今夜？」

倉庫街でサーヴァントが一堂に会したそのすぐ後でのこの騒ぎ。ケイネスは苦も無く答えに行き着く。

「フン、偶然なわけがあるまいさ。人払いの計らいだよ。敵とて魔術師。有象無象どもがひしめく建物で勝負を仕掛ける気にはならん

だろうからな」

「じゃあ――――襲撃？」

「おそらくは。先の倉庫街でまだ暴れ足りないという輩が、押し掛けてきたのだろう。面白い。不本意だったのはこちらも同じだ。そうだろう？ランサー」

「はい。確かに」

ランサーは迷いなく頷く。

こうも事を急いで行動する相手の心当たりはただ一組、セイバーとそのマスター以外にはいないだろう。こうも早く来るのは予想外であったが、正々堂々と戦える舞台ならランサーには何も不満は無い。

「ランサー、下の階に降りて迎え撃て。ただし無下に追い払ったりするなよ」

「承知しました。襲撃者の退路を断ち、この階に追い込めば宜しいのですね？」

「そうだ。お客人にはケイネス・エルメロイの魔術工房をじっくりと堪能してもらおうではないか」

自分の主の返事を確認するとランサーは霊体化して下の階に直接降りる。

（人の気配がない？）

人の泊まっていない部屋は複数存在するだろう。しかし、まったく居ない訳ではない。どの階にも泊まっている人間が居るべきなのだが、３１階には誰もおらず、既に避難が完了しているようであった。

（早すぎる）

防災ベルが鳴って避難勧告がされたのはついさっきなのだ。幾ら何でもこの早さはありえないモノだ。そのまま３０階にランサーは降り、人影を発見する。だが、それはランサーが求める人物ではなかった。それでも、実体化して臨戦態勢に入る。

「お前が客人とはな。てっきりセイバーだとばかり思っていたぞ、キャスター」

「当てが外れて残念か？まあ、それでも戦ってもらうがな」

幕裏の行動２（前書き）

感想　かにかま様、イースト様、教授様
ありがとうございます！

幕裏の行動２

「安心して戦える準備はしてある。２９階と２８階に泊まっていた客にも先に避難してもらったからな」

廊下にどこかの部屋の椅子を持ち出して座っていたキャスターが立ちあがりながら言い、一振りの刀を鞘から抜く。

「随分と用意が良いな。罠も用意してあったりするのか？」

「まさか、対魔力持ちに生半可な魔力を使った罠を用意しても魔力の無駄だ。なら、その分を戦闘に回した方がずっといい」

「本当にらしくないキャスターだ。その奇妙な剣もそうだが、倉庫街で見せた手腕は魔術師のモノではあるまい」

キャスターのクラスは魔術師、もしくは魔術に縁のある品を持っていたという伝承なり逸話がなければ得られないクラス。純粋な魔術師なら、白兵戦は苦手な傾向がある。だがキャスターは速さでは及ばずとも、ランサーの動きを読んで足止めをした。

「まあ、魔術師では無いな」

真名は明かすのに、顔は明かさない実に不思議なキャスターはあっけからんと言う。隠す必要も意味も無いと平然と言う。

「それでは始めようか。水天逆巻け、『捩花』」

「なに……？」

刀を指で回すようにしながらの真名解放。刀が棒状に伸びたかと思えば、すぐに刀は別の形になっていた。3叉に別れた穂先に、柄と槍頭の接続部には青い毛による装飾がなされ、石突きは巻貝を鋭くしたような形状になっていて刺突が可能とみられる2メートル程の槍。槍兵（ランサー）の英霊に対して槍で挑む魔術師（キャスター）の英霊。そんな可笑しな戦いが始まる。

「俺の槍は邪道に近いぞ……心しろ」

まずはキャスターが捩花を振るう。弧を描いてランサーを襲うが、ランサーはそれを下がって苦も無く避ける。捩花はただランサーの眼前を通りすぎただけに留まる。

（奇妙な剣から形を変えただけなのか？）

目の前の槍は奇妙な剣から形を変えた槍。宝具であるなら、それだけで留まらないのではなかとランサーは疑う。形を変えるのは十分凄いが、それだけが宝具の能力だと少々微妙過ぎる。自身の宝具と比べても、明らかにランクの劣るように感じられる。それに、形を変えれるのなら戦いの途中で変えて意表を突くのが最も良い使い方ではないのだろうか？

疑問に思いつつも、連続で繰り出される攻撃を避ける。石突きによる突き、続けて槍を回転させて槍頭での打ち上げ攻撃。ランサーは一連の動きを見てキャスターが邪道に近いと言った訳に納得する。槍の基本動作は突きであり、槍自体を回転させての連続攻撃は槍術よりも棒術に近い使い方になる。無論、それが邪道かと問われれば違うと言わざるおえない。あくまで基本動作が突きであって、薙ぐような動作や、片手首を主軸として槍を回転させる見た事の無いキャスターの我流の扱い方も1つの使い方に過ぎない。邪道と言うな

ら、ランサーの方も邪道に分類されてもおかしくはない。二刀流ならぬ二槍流は類を見ない扱い方になる。

（見た事の無い型だが、対応できない訳ではない）

『必滅の黄薔薇』で『捩花』を受け止め、『破魔の紅薔薇』で一撃を防がれて無防備になっているキャスターを穿つつもりで突き出そうとしたが、途中で自分に迫るナニカに気付いて横に振るう。斬ったモノは水、否、勢いのついた波濤であった。波濤はそのままランサーに襲い掛かる。

ランサーは波濤の一撃を咄嗟に『破魔の紅薔薇』でさらに斬りつけるが、それで削れた波濤はほんの一部消し去るに止まり、そのまま一撃をくらって壁に叩き付けられる。

魔力の流れを断ち切れる『破魔の紅薔薇』だが、弱点が存在する。魔力が絶えず流れて続けているモノなら触れた場所より先は魔力が供給されずに消えるが、魔力が1つの形を成している場合は触れた部分は消せるが、それ以外には影響は無い。『捩花』の波濤はまさにそれに類するタイプだった。

「ッチ、流石に波濤だけでは行動不能にまでは追い込めんか」

キャスターは舌打ちし、己の武器を回転させながら構える。ランサーの耐久はCで低い部類だが、波濤がそのままでギリギリ行動不能にできる威力だったので、2度も斬られて威力を削られた波濤では倒すには至らなかった。それでも、ダメージはダメージだ。動きを鈍らせ、攻撃を届かせられるようにする礎にするだけだ。

「クッ……」

不意打ち同然の攻撃を受け、無視できないダメージを受けたラン

サーだが負ける気はまったくない。ただ、次をどう動くかすぐに考える。マスターであるケイネスは３２階に追い込めと言っていたが、ケイネスが用意した魔術がサーヴァント相手にどれ程の効果を発揮できるか不明であり、ランサーとしては自分の力だけでキャスターを討ち取りたい。しかし、３２階に行けばケイネスの治療魔術で受けたダメージを帳消しするくらいの掩護は簡単に受けれるだろう。仮に３２階に追い込もうしても、キャスターが素直に３２階に移動するかも疑問である。それに、キャスターは魔術師ではないと明言しているが、それでも魔術に関する事がどれ程できるかは依然として不明なのだ。下手に招き入れれば瞬く間に破壊される危険性もある。そう理由付けして、ランサーは追い込まずにこの階で倒すと決める。

ランサーが動き、それに合わせてキャスターも動く。『破魔の紅薔薇』を突き出し、『捩花』を打ち据えるが波濤は健在で追従している。それを確認すると、ランサーはすぐに下がる。

「厄介だな。『破魔の紅薔薇』で槍に触れても、波濤に影響は無しとは……」

苦笑するしかない。『破魔の紅薔薇』は波濤の触れた部分は消せるが、それだけでは普通に斬ったのと大差無い結果だ。『必滅の黄薔薇』は相手を傷付けて効果を発揮するのだから今は意味が無い。

「仕方あるまい。最も速い方法でやらせてもらう」

ランサーは『必滅の黄薔薇』を邪魔にならないように廊下の隅に投げ、『破魔の紅薔薇』を両手でしっかりと握る。それの意図を汲み取ったキャスターも『捩花』を回転させるのをやめて、両手でしっかりと握る。

「速さで圧倒させてもらう」

宣言し、ランサーは自身の放てる最速の突きを繰り出す。それも、連続で。キャスターもそれに対抗するが、徐々に押され始める。最速はランサーのサーヴァントと決まっている。それが繰り出す突きも最速であり、最も次の攻撃への時間が短い攻撃が突きでもある。最短時間で連続で繰り出される突きは心眼（真）：Ａを持っているキャスターは読めてはいるが、体が反応しきれていない状態であった。しかし、無計画で突きの競い合いに乗った訳ではない。

ランサーはこのままいけば取れると確信し、キャスターも後一枚手札を切れば取れると確信した。同時に勝ちを確信した瞬間に、同時に異常な揺れによって台無しされた。

「「！？ッ」」

幸運：Ｅは――――ランサーとキャスターの両名――――伊達ではないようだ。

爆破解体（デモリッション）――――主に大規模な高層建築の解体に使われる高等発破技術である。ランサーとキャスターが同時に感じた異常な揺れの正体は、それによる崩落させる為の小さい爆発とそれによって起きる連鎖的な落下によるものだった。勿論、ケイネスが仕掛けた自爆用の用意でも、キャスターの仕掛けたモノでもない。

衛宮切嗣。古今東西の破壊工作に精通している彼が仕掛けたモノだ。冬木ハイアットホテルは彼が事前に調べ上げられており、残っている爆破の為の作業は爆発物を仕掛けて安全な場所から電話をかけて爆破させるだけだった。本当だったら、爆破させる前や仕掛けている途中で標的であるケイネス以外はホテルの外に出す為に騒ぎ

を起こす予定であったが、それはキャスターによって行われていた。それによって予定よりやや早く全ての作業を終えれたのだ。

「舞弥、そっちは？」

『最後まで32階に動きはありませんでした。標的はビルの外には脱出していません』

携帯電話から聞こえる報告に満足そうに切嗣は頷く。舞弥は冬木ハイアットホテルの斜向かいの建造中の高層ビルの上階に陣取ってケイネス達を監視していた。もしも、ケイネス達が屋上などに避難した場合は撃ち抜く為の用意をして。

準備は万全であり、たった1人を殺す為だけにビル1つを使う手段は悪辣とすら思えるが、これが「魔術師殺し」の殺(や)り方である。尤も、犠牲者が2人だけなのは少ない方である。時として切嗣は生き残れない、もしくは生き残ってはいけない人物の為に周りにいた人達もろとも殺した事さえある。今回はケイネス達以外が脱出してから決行し、人間としては良い選択をした。だが、「魔術師殺し」としての切嗣はそれは“甘さ”だと断じて即刻捨てるべきモノだと訴える。事実、9年前の衛宮切嗣より劣っている。そのままで聖杯戦争を勝ち残れないと思い、どうにかして冷酷さと判断力を取り戻さねばならない。

撤退の指示を出すべく携帯電話に耳をつけると、聞こえたのは刃を鳴らす金属質の音だった。それが意味するのはただ一つ、舞弥が誰かと戦っているという事だ。

すぐに切嗣は警戒度を引き上げる。敵が1人とは限らず、見えない敵は切嗣の天敵に当たり、後ろから忍び寄られるのは誰であっても致命的だ。だが、すぐに舞弥の心配をする。アレは今の切嗣に必要不可欠な補助装置であり、少なくとも昔と同じに成るまでは失う訳にはいかないからだ。戦っている場所はおそらく監視の為の位置、

もしくはその付近とすぐに目星を付けて自分に何ができるか思考する。だが、出来る事は少ない。銃での掩護は出来ず、切嗣の使える魔術に今居る場所から掩護できるような魔術は存在しない。掩護すべき対象は地上から１５０メートルも上に居るから、おのずと選択肢は限られる。逃げる為の掩護さえ出来れば良いのだ、唯一使えると判断した発煙筒を掴んで狙いを付ける。

「Ｔｉｍｅ（固有時）　ａｌｔｅｒ（制御）――ｄｏｕｂｌｅ（二倍）　ａｃｃｅｌ（速）！」

流石に素の状態で手投げ式の発煙筒を届かせようとは考えずに魔術を行使する。しかし、使うのは身体強化とは違う。切嗣が衛宮に伝わる時間制御の魔術を戦闘用に改造したモノで、今回は自分の中の時間を2倍に早めた。素の状態での2倍のスピードで投げられた発煙筒は弧を描きながら舞弥が居るであろう近くに落ちたはずだ。確認のしようが無いが、切嗣は次の行動に移る。移動用の車が置いてある場所まで移動し、すぐにでも発車できるようにしておくだけなのですぐに済んだが、舞弥が来るまでがもどかしかった。

掩護は意味を成さずに、舞弥は敵に殺されたのではないのか？もしくは、まだ戦っているのではないか？そんな考えが頭の中をグルグルと渦巻いていたが、後部座席のドアを開ける音とすぐに閉まる音を聞き、バックミラーで舞弥と確認してからすぐに車を出す。

切嗣が安堵の息を漏らすのは、拠点であるアインツベルンの城に戻ってからだった。

幕裏の行動２（後書き）

宝具解説

『捩花』　ランク：Ｂ　対人宝具　レンジ２～４

波濤を生み出し、それを操ることができる槍。波濤は対魔力の影響を受けない。

役者の手廻し（前書き）

感想　教授様、かにかま様
ありがとうございます！

質問で答え忘れがあったので此処に書きます。
前作で出たアーロニーロが作ったモノは一部を除いて出さない予定です。だから崩玉や斬魄刀の贋作は出ません。

役者の手廻し

神秘の宿らない攻撃はどれ程の破壊力を持っていても、サーヴァントを傷付ける事は不可能である。瓦礫の雨だろうと、ミサイルの雨だろうとサーヴァントにとっては普通の雨と変わりない。キャスターとランサーはまったくの無傷で冬木ハイアットホテルの崩落を過ごせた。ランサーは崩落の開始と同時に目の前のキャスターを捨て置いてすぐにケイネスの元に移動し、キャスターはもう神秘の秘匿をしながらの戦闘は不可能と判断して拠点に戻った。

「旦那ぁ！すげぇ、すげぇｃｏｏｌだったぜ！サーヴァント同士の戦い、それにビルの倒壊シーンを中からなんて、映画なんて目じゃなかった！！」

隠蔽された拠点である柳桐寺の一室でマスターである龍之介は熱烈にキャスターを歓迎した。彼はキャスターの用意した使い魔で水晶玉を通してキャスターを見ていた。だが、キャスターは掩護など期待していない。魔術師として申し訳ない程度の素質しか持っていないマスターに、自分の技を教えて使わせようとせず、望むのは安全な拠点で待機し続けて現界の為の楔としての役割と魔力供給さえしてもらえればそれで十分と思っていた。使い魔とそれを操作する水晶玉を渡したのは、なるべく外に出さない為である。少なくとも玩具を渡しておけば、勝手に拠点から出ないだろうと予想したからの選択だ。

「でもよぉ、やっぱり直に見てみたいんだけど……ダメ？」

「ダメだ。自分の身すら守れないお前を戦場に立たせる訳にはいかない」

龍之介はキャスターからすれば弱く、戦場では真っ先に殺される存在と捉えた。一方的な殺ししか経験のない龍之介は危機感に乏しく、使えない。囮に使おうと思えば使えるが、ホテルでの戦いでビルを平気で崩落させるような敵がいるのなら、裏をかかれて殺される可能性の方が大きいために出来ない。

「それより、晩(おそ)いからもう寝たらどうだ？」

キャスターは吸い上げる魔力量を多くし、マスターへの負担を大きくする。

「あぁ……なんか急に疲れたみたいだし、今日はもう寝るか。旦那、明日も面白いモノは見れるか？」

「明日次第だな」

魔力に関する知識をまったく持たない龍之介はいきなり襲ってきた虚脱感を疲労によるものと判断してすぐに眠りにつく。完全に寝入ったのを確認してからキャスターは霊体化して消費を抑えながら静かに佇む。今現在できるのは魔力を蓄えるだけだ。

ほぼ同時刻。冬木ハイアットホテルで舞弥を襲撃した綺礼は時臣に報告していた。報告の内容はホテル内で行われたランサーＶＳキャスターの戦いについてであり、自分の行動は全て伏せた報告なのだが。

「真名解放まではアサシンは聞けませんでしたが、キャスターの宝

具の形状と能力は手に入れました。キャスターが倉庫街で使った刀を三叉槍に変化させるに留まらず、波濤を生み出して操っていました」

『三叉槍（トライデント）に波濤？もしやキャスターは海神ポセイドンに縁のある英霊か？しかし……アーロニーロ・アルルエリと言う名の魔術師に心当たりはないのだが……綺礼、君は心当たりはあるかね？』

「いえ、私もありません」

綺礼は通信装置のむこうの時臣の顔を子細に想像できた。なにしろキャスターはまるで取って付けたような英霊に思えたからだ。武器として使う刀は日本の者と連想させるが、キャスターの服と仮面はどう贔屓目で見ても日本の物には見えない。そこに追加の情報で、海神ポセイドンを連想させる宝具を使ったのだ。しかも、刀を変化させてその宝具にしたのだ。元々が槍で、キャスターによる隠蔽として刀にしていたとも考えられるが、どの様な魔術か宝具を使えば槍を刀に出来るかが想像ができない。

「……導師、アサシンから追加の残念な報告です。キャスターを見失ったそうです」

『見失った？気配遮断を持つアサシンに気付いて、撒くような行動をしたのかね？』

「いえ、おそらくキャスターは使い魔で監視をしてなかった5組目だったので、アサシンの退場（茶番）を知らなかったのでしょう。それと、キャスターは忽然と消えたそうです。さながら転移したかのようだと」

『転移？それは魔術ではなく、魔法の域になるが……』

魔術によって引き起こされる現象は科学技術などの他の方法を用いても再現できるものを差すのに対して、魔法とは時代の技術レベルにおいて、どれほどの費用や労力を注ぎ込んでも達成不可能なものを実現する神秘を差す。

「魔法使いの可能性もある、ということでしょう」

『キャスターのクラスに相応しい英霊になるわけだが……ますます解らない。まぁ、宝具による現象や、アサシンの気配遮断に類する力を持っている可能性もゼロではないが』

時臣は最初はキャスターをたまたま空いていた席に入り込んだ英霊か、キャスターのクラスを偽称しているイレギュラークラスと考えていた。しかし、魔法とおぼしい事を行ったのなら本当にキャスターである可能性が高くなった。

『綺礼、とりあえずはキャスターが拠点に選びそうな円蔵山（えんぞうざん）にある柳桐寺に続く階段にアサシンを一体配置し、他のサーヴァントよりキャスターのアサシンの配分を多くして拠点と魔法使いかを探らせてくれ。もしも、魔法使いなら、真っ先にギルガメッシュで潰す必要があるかもしれない』

同じ魔術師だから、より警戒する。魔法使いであり、転移を扱えるのなら正確に居場所を知られたら、その時点で負けが確定するのを時臣は恐れた。同じ魔術師だから、もしかしたら一時的には拮抗しえるかもしれないが、そんな事はほんの一瞬になると解っている。しかも、キャスターはランサーと白兵戦で一時的とはいえ、拮抗できる程の使い手でもある。自由奔放な自分のサーヴァントを常に侍

らすことが不可能故に、後手に周るのは非常に危険だ。一回だけなら、令呪によって襲われてもすぐにアーチャーを呼び出す事ができるが、キャスターが素直にそのまま挑むとは考えにくい為に、無駄使いに成り得ると考える。

『あと、アサシン2体を私に回してくれ。最悪の場合は、この遠坂邸を放棄して適当な場所に身を隠す』

「わかりました。キャスターの調査を最優先事項として対処します」

ただ当然のように厳格に綺礼は答え、実行の為にアサシン達に命令を出す。使命には誠実かつ厳格にこなすのが綺礼であり、生真面目な性格と聖職に就いている意識からだ。

『――――時に綺礼、聞けば君は冬木教会の敷地を出て行動を起こしたそうだが？』

己の行動について問われるのは必須と解っていた綺礼はすぐに返答する。

「申し訳ありません。危険は承知の上でしたが、小うるさい間諜に目をつけられたため、処置するためにやむを得ず……」

『間諜？教会にいる君に対してか？』

責める時臣の声音が厳しさを増す。当初の計画では、アサシンの1体を消費して敗退者と対外的になった綺礼は聖杯戦争が終わるまでは冬木教会から出ないはずだったのだ。しかし、綺礼が衛宮切嗣の存在を知ってからは、時臣の計画は二の次になっている事を綺礼以外は知りもしない。綺礼の最優先の目標は衛宮切嗣という人間を

識(し)ることである。

「ご心配なく。曲者の口は封じました。抜かりはありません」

先の言葉はアサシンに任せられないから、「やむを得ず」は嘘ではなかったが、今度の言葉は完全な嘘が混じった。時臣が心配する必要は無いだろうが、曲者の口は封じれておらず、綺礼の目的としても襲撃は失敗に終わったのだ。

『なぜサーヴァントを使わなかった？』

「それには及ばない瑣事と判断しまして」

『……たしかに君ほどの手練(てだ)れの代行者ともなれば、己の手練を頼みとするのも解るがね。今のこの局面においては、いささか軽率すぎたのではないか？』

「はい。今後は慎みます」

今度は完全なる嘘。切嗣と巡り会うためならば、綺礼は幾度となく戦場にであろうとキャスターが設えた工房だろうと躊躇い無く出向く腹積もりであった。しかし、時臣はそのような事を綺礼がするなどと疑わずに注意だけで済ます。

綺礼の内面を知る人間は近くにはいない。自分の内面を知れる人物は切嗣に他ならないと綺礼は確信していた。

英雄王と神父（前書き）

感想　ヴラド＝ツェペシュ様、かにかま様、コクイ様
ありがとうございます！

今回はいつもよりちょっと短い

英雄王と神父

「――――アーチャー？」

冬木教会の１階に存在する綺礼の私室にはどうゆう経緯かアーチャーが居座っている。しかもキャビネットのワインを無断でグラスに注いで飲んでいる始末だ。

「数こそ少ないが、時臣の酒蔵よりも逸品が揃っている。けしからん弟子もいたものだ」

「……」

おそらく、世辞でもなんでもない本心からの感想だろう。感想を聞く限りでは、遠坂邸の酒蔵も同じ被害を被ったのだろうが、そんな事は綺礼からすればどうでもいい。気になるのは、なぜアーチャーが自分の部屋に居るかだ。単独行動のスキルによって好き勝手に出歩いているのは時臣から聞き及んでいたが、それが冬木教会に足を運ぶなど予想だにしなかった。

「一体、何の用だ？」

「退屈を持て余している者が、我の他にもいる様子だったのでな」

「退屈？」

ソレは、綺礼のこれまでで最も無縁な自身の状態であった。何時でも求道や任務などで自分を動かし続けてきた綺礼は退屈とは何かをよく解っていないのだった。するべきことがない状態。それが綺

礼の思う退屈だ。それならアーチャーが言う退屈に半分は当て嵌まる。

「どうなのだ綺礼とやら？お前も、あの時臣めに奉仕するばかりで心満たされているわけではないのだろう？」

「……今さら契約が不服になったのか？ギルガメッシュ」

心満たされたことなど、綺礼には無かった。だが、そんな心の内を目の前のアーチャーの吐露するようなまねはせずに問いに問いで返す。

「我を招いたのは時臣だし、この身の現界を保っているのも時臣の供物によるものだ。そして何よりも奴は臣下の礼を取っている。まぁ、応えてやらんわけにもいくまい」

唯我独尊を地でいくアーチャーといえど、恩には恩で報いる。ただ、あくまで王として臣下の頼みを聞いてやっているだけに近い。彼の中では招くのも供物も時臣だけが出来るわけではないので、時臣が臣下であるが割合が半分以上なのだが。

「だが正直、あそこまで退屈な男とは思わなんだ。まったくもって面白味の欠片もない」

「……とてもサーヴァントのものとは思えん言い種だな、まったく。そんなにも退屈か？時臣師の差配は」

「ああまったく退屈だ。万能の願望機を以てして『根源の渦』に至る、だと？つくづくつまらん企てがあったものだな」

他人の悲願だろうと、それがナニカをもたらさなければ意味すら無い。そういう面で言えば、綺礼も理解はある。

「『根源』への渇望は魔術師だけの固有のものだ。あれは、部外者がとやかく言えるものではない」

「そういうお前も部外者だそうだな、綺礼。――しかも聞くところによれば、本来は魔術師どもと対立する立場にあるそうではないか」

本来なら、代行者として綺礼は聖杯戦争に参加していただろうが、綺礼の父である璃正が時臣と親交によって時臣に弟子入りして魔術師もどきのように参加しているが、彼が聖堂教会・第八秘蹟会の代行者であるのには変わりない。

「……『根源』へと至る道程とは、いわば世界の“外側”への逸脱だ。それによって“内側”であるこの世界に何がもたらされるわけでもない。だから、“内側”の視野しか持たない教会（われわれ）にとって、魔術師たちの探究はまったく意味のない、つまらない企てとしか理解できない」

奇しくも、『根源』への探究については聖堂教会もアーチャーと同じ意見である。

「もし冬木の聖杯が『根源』を求めるためだけに特化した装置であったなら、いくら魔術師どもが血眼になろうとも聖堂教会は放任していただろう。ところが不幸にも聖杯は“万能”であった。世界の“内側”をも変革しうる可能性を無限に秘めている。まさに極めつけの異端であり、我らの信仰を脅かすものだ。

だからこそ聖堂教会は遠坂を選んだ。放置できないほど危険な異

端であればこそ、それを“無意味でつまらない”用途に使い潰してくれるなら、我々にとっては望ましい結末だからな。———もっとも私の父には、それとは別な私情もある様子だが」

「では時臣以外のマスターどもは、時臣とはまた違った動機で聖杯を求めているわけか？」

「時臣師は魔術師の典型であると同時に最右翼だ。今日日（きょうび）、あれほど純粋に魔術師の本道を貫いている人間はそうはいるまい。他の連中が求めているのは総じて浮き世の名利であろうよ。威信、欲望、権力……すべて世界の“内側”だけに完結する願望だ」

「結構ではないか。どれも我が愛でるものばかりだぞ」

「おまえこそは俗物の頂点に君臨する王だな。ギルガメッシュ」

アーチャーはその評価に不敵に笑うだけであった。

「そういうお前はどうなのだ？綺礼、聖杯に何を望む？」

「私は———私には……べつだん望むところなど、ない」

時臣は遠坂に2人分の令呪を与える為に聖杯が綺礼を選んだと言ったが、聖杯は望みを持つ者にしか令呪を授けてこなかった。しかし、どちらにしても綺礼は疑問に思っていた。聖杯が御三家の遠坂だけに肩入れするのであろうか？仮に肩入れしているとしても、自分以外の適任な者に授けられたではないのか？では、自分は望みを持っているのか？

「それはあるまい。聖杯は、それを手にするに足る者のみを招き寄

せるのではなかったか？」

「そのはずだ。が……私にも解らない。成就すべき理想も、遂げるべき悲願もない私が、なぜこの戦いに選ばれたのか」

「それが迷うほどの難題か？理想もなく、悲願もない。ならば愉悦を望めばいいだけではないか」

なぜそれすらも解らん？そう失笑しながらアーチャーは言う。

「馬鹿な！」

だが、

「神に仕えるこの私に、よりにもよって愉悦など――――そんな罪深い堕落に手を染めろというのか？」

それが触れてはならない禁忌として否定する。

「罪深い？堕落だと？なぜ愉悦と罪とが結びつく？」

「それは……」

返答に困る綺礼をよそに、アーチャーは意地の悪そうな笑みを深めていた。

「……なるほど悪行で得た愉悦は罪かもしれん。綺礼、我の娯楽に付き合え」

「娯楽……だと……？」

綺礼はアーチャーを睨みつけたが、アーチャーはそれを受け流して続ける。

「ああ、そうだ。なに、片手間でできることだ。敵の調査がお前の役目であったであろう？その調査の内容に、聖杯戦争に参加した動機を加えるだけだ。そして我に語り聞かせろ」

「なぜ私がそんなことを……」

アーチャーは突然指を綺礼に突き付け、綺礼の言葉を途切れさせてから言葉を続ける。

「これを機会に、自分の外側に目を向けるがいい。我の庭が、貴様1人を満足させられぬわけがないからな」

ハッキリと断言したアーチャーはグラスに残っていたワインを飲み干すと、悠然とドアの前に立ち。

「では、気長に待っているぞ」

最後にそう言って出て行った。

「自分の、外側……」

ただ、そう一言溢し、綺礼は飲み散らかされた酒瓶を心此処にあらずといった様子で片付け始めた。

仮面（前書き）

感想　かにかま様

ありがとうございます！

仮面

アインツベルンの拠点は、人里離れた山中を東西に縫う国道沿いにある鬱蒼と生い茂る森林地帯のど真ん中の城である。広大な原生林を丸ごと結界として外界から隔離されはその場所は、今回の戦争のアインツベルンの者たちに――攻め込まれない限りは――安心して寝食のできる場所を提供していた。例え攻め込まれようとも、結界によって探知と魔術的攻撃は可能であるので、迎撃か逃走の準備を整えるくらいの余裕を作り出せるモノだ。

だが、安心、安全であろうとも、それで重苦しい空気ができない理由にはならない。重苦しい空気に慣れていないアイリスフィールにとっては、十分に気疲れする理由になった。

「――疲れてきたかい？アイリ」

「いいの、何でもないわ。先を続けて」

あくまで疲れは精神的なモノだけであり、夫を心配させないために微笑を浮かべて先を促す。

「――地脈の中心となるのは2ヵ所。ひとつはセカンドマスターである遠坂の邸宅。もうひとつは言わずと知れた円蔵山だ。この辺り一体の霊脈はすべてこの山に集まることになる。詳細はアハト翁から聞いての通りなわけだが――」

先に城に着いていて休んでいたアイリスフィールに合わせて、朝食後に行われている戦略を練るための会議であるが、非常に重い空気が場を支配している。アイリスフィール、セイバー、切嗣、舞弥の全員がは誰が原因でこうなっているのかは解っているが、誰もそ

の事には触れない。
　別に切嗣がケイネスを仕留め損なったから、セイバーの左腕の傷が治らずに劣勢に立っているから場の空気が重いわけではない。切嗣によるケイネス襲撃が場の空気を重くしている要因の一つだが、もっと根本的な“相性”と“思想”によるモノだろう。

「――円蔵山には頂上の柳洞寺を基点として強力な結界が張られている。そのせいでサーヴァントのような自然霊以外の存在は参道からしか進入できない。……ここが一番キャスターが拠点にしている可能性が非常に高い。セイバーを使う上では留意しておいてくれ」

　セイバーは切嗣のサーヴァントなのにセイバーに注意するように言わず、代行マスターであるアイリスフィールに言う。切嗣は、セイバーに一瞥すらしないのだ。その行為事態はアインツベルンの本拠地の城兆しでもあったが、今は明確な悪意や敵意のようにハッキリとしたモノになっていた。
　これも、場の空気を重くしている要因だ。

「さらに、この2ヵ所には劣るが、やはり地脈の集中する要地があと2つ新都にある。南の丘にある冬木教会と、都市区域の東にある新興住宅地がそれだ。よって、聖杯の降霊を行えるだけの霊格を備えたポイントは、冬木市内に都合4ヶ所あることになる」

「戦いの後半、サーヴァントの数が絞り込まれてきたら、このいずれかを拠点として制圧しておかなくてはいけないわけね？」

「そういうことだ。地勢についてはこんなところだが、何か質問は？」

「――セイバー、何か不明な点はある？」

「これっといって特には。十分な説明でした」

微笑みながらのその言葉には皮肉の意図は無かっただろうが、切嗣に態度を考えるとアイリスフィールには皮肉に思えてしかたがなかった。

「で、今後の方針だけど……切嗣、ランサー狙いで良いのよね？」

「ああ、それで構わない。だけど、今日は様子見に徹して城から出ないでくれ。アイリ、この森の結界の術式はもう把握できたかい？」

「ええ、大丈夫。結界の綻びも見当たらないし、警鐘も走査もちゃんと機能するわ」

「それじゃあ解散としよう。舞弥は街に戻って情報収集に当たってくれ。異変があったら逐一報告を」

「わかりました」

会議はつつがなく終了し、舞弥はすぐに席を立って街に、切嗣は地理の説明に使った地図などを纏めてから会議の場として使っていたサロンから出ていく。

「はぁ……」

切嗣が出ていって少ししてからアイリスフィールはため息をつく。誇り高き小さな騎士王と、手段を選ばぬ魔術師殺しの相性は最悪をも通り越して災厄に近かった。どちらにも一定の理解があるから板挟みになって心労を積み重なってしまう。

「アイリスフィール、私はそんなにも頼りないでしょうか？」

おそらく、セイバーは切嗣のやったビルごと敵マスターを葬るやり方に不満があったのであろう。戦いにおいては、騎士として相互に信頼してたランサーと横やりを入れられる形で付けられた決着に納得できないのであろう。

しかし、戦略上は早期にランサーを退場させる必要があったのもセイバーは解っている。それでも、セイバーは騎士として決着を付けたかったのだ。

「いいえ、私はあなたより頼りになる英霊はいないと思うわ」

「……マスターも、そう思っていたらいいのですが」

「セイバー、頼りにならなければ私をあなたに任せるなんてまねは切嗣はしないわ。切嗣はあなたを頼りにしているわよ」

ただし、囮として。その言葉は完全に飲み込まなければならなかった。

切嗣はセイバーによってサーヴァントを倒されるのをそこまで期待はしておらず、セイバーを獲物を惹き付ける餌としての役割さえしてくれれば、マスターを自分もしくは舞弥の手で殺せれば良いのだ。まだ、犠牲になったマスターは1人だが、これから増えていくはずなのだ。

「ありがとうございます、アイリスフィール。貴方の御蔭で、私は剣を振るえる。私の剣の重さは誇りの重さですから」

何時か、裏切らなければならない自分に信を置いてくれるサーヴ

アントに微笑みを向けてから、アイリスフィールは席を立って夫の元に向かう。何処に居るかは判らないが、行く場所は限られているから見つけるのは容易だった。

声を掛けようとしたが、戸惑ってしまう。会議で見せた「魔術師殺し」の冷たく仮面のように無表情で無慈悲な眼差しに相対してしまうことに。アイリスフィールが初めて切嗣とあった時もそうであったが、一緒に過ごす9年の間に削げ落ちていた感情が嘘のように人間らしく、夫として接してくれた。だが、今はそれが嘘だったかのように9年前と同じになって、いや、戻っている。それは聖杯の守り手としてのホムンクルスとして心強いとして喜ぶべきなのだろうが、アイリスフィール個人としては嫌だった。

「……切嗣」

意を決して呼び掛け、振り返った切嗣を見てアイリスフィールは絶句した。

「魔術師殺し」であった姿が仮面だとしたら、今の、泣きだしそうな程に怯えている顔が今の心境なのだろう。そんな顔を見てしまい、聞こうと思っていた事――予定では使わないはずだった城をなぜ使うのかなど――を聞くに聞けなかった。

「もし僕が……もし僕が今ここで、なにもかもほうり投げて逃げ出すと決めたら――アイリ、君は一緒にきてくれるかい？」

「イリヤは……城にいるあの子は、どうするの？」

「戻って、連れ戻す。邪魔する奴は殺す」

弱々しく掠れた声であったが、断固として言い放つ。だが、その言葉に自信など微塵も感じられなかった。それでも、本気であった。

「それから先は――――僕は、僕の全てを僕らのためだけに費やす。君と、イリヤを護るためだけに、この命のすべてを」

「……」

アイリスフィールは、切嗣がそのような叶えられないような事をいう程に追い詰められているのを初めて知った。

9年前の衛宮切嗣、否、「魔術師殺し」は自分の命以外の全てを失っていたような存在だった。喪う恐怖が無く、痛みを感じる心も無いから冷徹な機械のように殺してこれた。だが、今はその強みが無くなり、ただ臆病な男にまでなってしまった。その原因は、妻であるアイリスフィールと、娘であるイリヤスフィールだ。元々、「魔術師殺し」は敵を葬る事に特化していた。護るべき存在がいなければ、それでも良かったであろうが、切嗣は得てしまった。護りたい存在を。

「怖いんだ……奴が――――言峰綺礼が、僕を狙っている。舞弥から聞いた。奴は僕を釣る餌としてケイネスを張っていた。行動を読まれていた……

僕は、負けるかもしれない。君を犠牲にして戦うのに、イリヤを残したままなのに、僕は……いちばん危険な奴が、もう僕に狙いを定めている。決して遭いたくなかったアイツが！

……それに、昨夜僕は致命的なミスを犯した。使い魔でも使ってランサーとキャスターの戦いの決着が着くのを見届けて、ランサーが勝ったら爆破すれば良かったのに、途中で爆破してしまった」

もしかしたら、サーヴァント2体を一夜の内に退場させられたかもしれないのに、無意識な焦りで切嗣はタイミングを間違えた。あの時は、完全な不意打ちにする為にと、もしかしたらキャスターの

マスターも居るかもしれないというゼロに近い可能性で爆破した。しかし、思い返せば、勝利した瞬間でも不意打ちとしても十分であり、例えキャスターが勝ったとしてもケイネスを殺すのには勝敗が決した後でも効果はさして変わらないはずだった。

たった一回の失敗だが、それが切嗣に重く圧し掛かっていた。キャスターが普通の魔術師ならある程度は行動を予測できるだろうから、そこまで重くはならなかったかもしれないが、キャスターは普通ではない。

動きの読めない相手に切嗣は弱い。罠を張り巡らせ、効果的に相手を追い詰め、最後に必殺の一撃を叩き込む。狩りの大筋はこんなモノであり、暗殺者である切嗣は真正面からのぶつかり合いを避けて、一方的に狩れる状況を作り出していままでやってきた。

「切嗣、あなた1人を戦わせはしない。私が守る。セイバーが守る。それに……舞弥さんも、いる」

「魔術師殺し」に必要なのは自分では無い。そう解ったとしても、切嗣である今は彼を癒したい一心で、アイリスフィールは優しく切嗣を抱擁し続けた。

ズボン（前書き）

感想　キョウ様、かにかま様
ありがとうございます！

ズボン

「先に断っとくが、ボクはオマエのために街まで出向いて特大ズボンを買ってくるなんてことは絶対にしないからな！」

「なんだとぅ！？」

ウェイバーの言葉によって、ライダーは実体化したまま街を歩くことが出来なくなり、悲痛な声をもらす。

セイバーが現代風の格好をして普通に街を歩けていたので、自分も街を歩くためにライダーが通販で勝手に半袖プリントシャツ――――胸には世界地図をからめたタイトルロゴで『アドミラブル大戦略？』とすってあるゲームの関連商品――――を買ったのだが、ズボンも必要不可欠とウェイバーに指摘されたのでズボンの調達を頼もうとしたが、頼むより先にウェイバーに断れたのだ。

「坊主、きさま余の覇道に異を唱えると申すか？」

ズボン１つで何を言っているんだと思うが、ライダーはいたって真面目である。今のままでは覇道どころか、普通の道すら大手を振って歩けないのだから。

「覇道とオマエのズボンとは、一切合財！金輪際！まったくもって関係ない！外を遊び歩く算段なんぞする前に、敵のサーヴァントの１人なりとも討ち取ってみろ！」

しかし、ウェイバーは声を荒げてズボンと覇道は関係ないと断言する。

「……成る程、あい判った。とりあえず敵の首級を挙げさえすれば、そのときは余にズボンを穿かすと、そう誓うわけだな」

ウェイバーの言葉にライダーは「相違はないな？」としっかり確認する。

「……オマエ、そんなにもそのTシャツで外を歩きたいのか？」

「騎士王の奴めがやっておったのだ。余も王として遅れを取るわけにはいかん。――――なにより、この服の柄は気に入った。覇者の装束に相応しい」

胸を張ってライダーはそう答えるが、ゲーム関連のTシャツだけ身に付けて仁王立ちの見た目オッサンは、ナニカのギャグもしくはドッキリのようにふざけているようにしか見えなかった。その光景を見る事を許された、ただ1人だけのウェイバーは「なんでこんなのが英雄なんだ……」と思っていた。

まったく関係のないことだが、ライダーは他の王2人より完全に出遅れていた。

「ところで、もし敵のサーヴァントを朋友にできても討ち取ったと扱っていいか？」

「は……？」

ウェイバーはその言葉を理解するのに数秒要した。なにせ他のサーヴァントとは全員と巡り会ったが、総スカンだったのだ。それなのに、目の前のライダーは諦めていないのだ。

「ふむ、まずはキャスターが妥当かの？あやつだけは脈ありだった

しの」

「……オマエ、キャスターが何処に拠点を構えているか判っているのか？」

理解して、とりあえず出てきたのがその言葉だった。

「なにを言っておる？あやつはサーヴァントと言えども、坊主と同じ魔術師なんだから魔術師が拠点として好む場所は判るであろう。そういう場所を虱潰しに捜してしていけば、その内出会えるであろう」

「成程。確かにキャスターなら、霊脈のある場所に拠点を構えようするのが自然だから場所は限られ……って、オマエはよりにもよってキャスターの工房崩しをやりやがるつもりかあああ！！」

納得、後にウェイバーは激高した。魔術師の設える工房は入るのは容易なのだが、出るのは困難とされる。サーヴァントなら魔術師の仕掛けた罠などを突破するのは簡単だろう。だがしかし、相手が魔術師でも同じサーヴァントなら話は違ってくる。キャスターは英霊まで上り詰めた魔術師なのだから、現存する魔術師のトップクラスはあると考えた方が良いし、敵を拠点に誘い込んで倒すのは魔術師の定石の１つである。それを狙って突撃をかまそうとするのは馬鹿だけである。悲しい事に、ウェイバーからすればライダーは馬鹿であった。

尤も、キャスターは拠点であることの隠蔽に力を注いでいるから、キャスターが居ない限りはそこを拠点と判断するのは難しく、特に恐ろしい仕掛けは無かったりする。

「なんでキャスターなんだよ！工房を襲うのに、なんで１番危険な

キャスターの拠点に狙いを定めるんだよぉ」

「あやつが脈ありという理由もあるが、セイバーとランサーは決着をつけるまで手を出さんと決めておる。アーチャーの奴は戦う気が無いようだから無駄。バーサーカーの奴は昨夜の戦闘で余が大打撃を与えたから、今日は休んでいて出てこないであろう。ほれ、キャスターしか残っておらんではないか」

ライダーの消去法では、キャスターしか残らなかったのだ。ちなみに、ウェイバーがどのような抗議を上げようとも、ライダーは今日はキャスター以外を狙う気はない。彼の中では、それ以外は都合がつかない。

「却下だ！却下！オマエの対魔力じゃキャスター相手じゃ無いも同然なんだぞ、判ってるのか！？」

「余の『神威の車輪』なら、問題無く駆け抜けてどの様な場所であろうと走破できる！その威力は昨夜坊主も見たであろう？まあ、それで駄目なら奥の手を使わざるおえんだろうがのぉ」

自身の宝具への絶対の信頼が感じ取れた。その言葉を聞き、少しだけ考えを変えてやってみようかと思った。そもそも、キャスターの常識に照らし合わせると、あのキャスターは普通とは違うというのもあるが。

「……昼間から仕掛けるなんてしないぞ。仕掛けるなら夜だからな」

ぶっきらぼうに言ってから、自分の荷物の中から冬木の地図と持ってきた霊脈に関する本を取り出す。

「何をするつもりだ？」

「何って、キャスターが拠点に選びそうな場所の選定だよ。ボクみたいな外来のマスターなら場所選びに制限がかかるし、家とかが無い場所は候補から外したりするから時間が掛かるから話し掛けるなよ」

そう釘をさしてから、ウェイバーは作業に取り掛かる。

「むぅ……」

開始数分でライダーは困ってしまった。やることが無いのだ。まさか、ウェイバーが頑張っている横でせんべいをかじりながらＤＶＤや雑誌を見るのは気が引けてできない。かと言って、なにもしないのはライダーの性に合わない。部屋から出ることはウェイバーに固く禁じられているから外に出れない。荷物（Ｔシャツ）の受け取りの為にそれを破ったのは特に気にしていないが……。そもそも、外を実体化して出歩きたいからズボンが欲しいのだ。

「むむむむむ……」

ここはどうすべきか、「おい」　マスターが頑張っている横で静かに雑誌を　「…おい」　読んだほうが有意義ではないか？　「……おい」　まだ途中のＤＶＤがあるが、音が出るから邪魔になってしまう。ライダーはそんな事を考えていた。

「聞！こ！え！な！い！の！か！、ライダー！」

「むおぉう！」

突然の耳に直接怒鳴られたライダーは跳び上がるように驚く。
「なんだ、突然……邪魔をするなと言っていたではないか」
「邪魔してる。オマエ思いっきり邪魔してるから。後ろからずっと「むむむむ」とか聞こえたら気が散る！今日はせんべいをかじらないで、雑誌でも読んで静かにしてろ！」
「むぅ……」
言いたい事を言ったウェイバーは自分の作業に戻る。もう少しで、令呪を使いそうになったのはウェイバーだけの秘密だ。
こうして、ライダーは1日の大半を静かに雑誌を読んで過ごすことになった。

夜になり、ウェイバーは無駄に長く感じる階段を登っていた。
「なんで、こんなに長いんだよ……」
柳桐寺に続く階段はウェイバーは辟易していた。頂上が見えない位に長く、しかもあまり変わり映えしない風景も相まって、嫌な気分にさせられている。山の中にある寺では、さして珍しくも無い事なのだが。
「坊主、聖杯に背を伸ばすついでに、体も丈夫にしてもらったらどうだ？そうすれば、余のマスターに相応しい相貌になれるやもしれん」

「……オマエ、マスターにナニを期待してるんだよ……」

いつもであれば、「その願いはオマエが勝手に決めた願いだろ！」とか言い返すのだが、今のウェイバーにはそこまで余力は無かったりする。身体強化の魔術で、やろうと思えば体力の消耗を抑えられたが、魔力をなるべくライダーに回す為に今は温存しているのだ。

「ふむ、着いたようだな」

「やっとか……」

皆が寝静まった建物とは、総じて不気味な雰囲気をかもし出す。柳桐寺も例に漏れずに不気味な雰囲気をかもし出していた。

「どうした？行かんのか？」

山門から平然と入ろうとしたライダーは掴まれて足を止める。

「まて、ここが1番可能性が高いんだ。サーヴァントみたいなのは山門以外から入れないように結界があるし、霊脈もある。不用意に入るなんてしない方が良い」

「と、言われてもなぁ。『神威の車輪』を出すにはここではちと手狭だしなぁ。『神威の車輪』に乗って入ろうとすると山門を傷付けてしまうかもしれんぞ？」

「オマエはサーヴァントの気配がないか探ってればいいよ。ボクはここから何か判らないか調べてみるから」

しかし、結果は芳しくなかった。ウェイバーは何も感知できず、

ライダーも山門付近からサーヴァントの気配を察知できなかった。意を決して、山門より内側に入ったが何も起きず、サーヴァントとマスターを思わせるような仕掛けは何もなかった。一応柳桐寺の周りをグルッと回ったが、結果は同じであった。

「ハズレ、か。ここが1番可能性が高かったんだけど……」

「そう上手く行くモンでは無いだろう。で、次はどこだ？」

ため息をつくとウェイバーは次の場所を示す。次からは『神威の車輪』での移動になったのでウェイバーは楽ができたが、1つだけ朝方から気になっていた。ライダーの言っていた奥の手がなんのかを……

ズボン（後書き）

ライダー陣営以外さ、ギャグを挟み込めないよね。
原作様でもギャグシーン＝ライダー陣営が関わるみたいな感じだったし。
次はキャスター陣営の話。

行方不明（前書き）

感想　麻布十番様、ＥＶＩＬＭＩＳＴ様
ありがとうございます！

行方不明

龍之介が起きて、食事など済ましてやりたい事があると言った。望みを叶えてやるのは簡単なものなら別に手間も問題もない。ただ、龍之介のやりたい事は自身の快楽を満たすだけの殺人であった。快楽殺人者であるならなんら不思議でない嫌悪する思考だが、キャスターの利になることでもある。魂を喰らわせてサーヴァントの魔力を補充する手段は褒められた手段ではないが、効果的ではあった。

神秘の秘匿さえしていれば、監督役はそこまで厳しくは言わない。しかし、冬木の地を預かるセカンドオーナーであり、聖杯戦争の参加者である遠坂時臣はあまり良い顔をしない。人が犠牲になるのもそうだが、例え確実に人を消しても、行方不明として騒がれて世間の目が注目してしまって聖杯戦争がやりにくくなってしまう。そんなことは龍之介の知った事ではないのだが。

路地裏、そこで龍之介は殺人を行っていた。不良などが好んで溜まり場や、誰かを痛めつけるのに使われるその場所で、1人の女性が男によって首を絞められて呼吸困難にされている。キャスターを召喚する前なら、発見される危険を考えてまずやらなかった方法だが、今はキャスターが居るので例え見つかろうと逃げ切れたりするので躊躇無く犯行に及んでいる。

女の顔は苦悶で醜く歪んでいるのに対し、龍之介はうっとりとその表情を眺めている。時折、きまぐれに手に込める力を緩める。その瞬間は女の表情は緩むが、恐怖に引き攣っている。繰り返し行われているので、恐怖はもう染みついているようである。最後は、動かなくなるまで首絞めて終わらせる。普通であれば、力を緩めた時に叫び声を上げる。しかし、それはキャスターによって裏路地に連れ込まれたらすぐに喉を潰されて声を出せ無くされている。獲物の確保及びに連れ込むのはキャスターがしており、少しでも魔力の多いのを標的にしていた。

「たまんねぇ。旦那見たか？こいつ死ぬ瞬間に最高の逝き顔になったのを」

興奮した面持ちですぐ傍に待機しているキャスターに聞くが、その姿いつもの姿とは違う。仮面を付けておらず、服は白いがフリフリの付いた変わった格好ではない。金髪を短めに切り揃えて優しげな感じのする顔つきの３０代位の姿である。しかし、顔に関して素顔ではなく幻影魔法で変えている。

「苦しみから解放された瞬間だ。楽になれたからそう見えたのだろう」

気の無い返事である。敵でもないのを殺すのはあまり好かないというのもあるが、見えない敵であるアサシン相手に常に気を張っているから龍之介への対応がずさんになっている。そんな事は全然気にせず、龍之介は死体となったそれを傷を付けないように地面に横たえる。

「旦那、よろしく頼むぜ」

「……」

無言でキャスターは左手の手袋を取る。手袋の下にあったのは手ではなく、１０本の触手と口のような器官であった。横たえられた死体に近付き、左手の口のような器官で頭から蛇が獲物を食べるように丸飲みしてして、全てを飲み込む。それだけで、最早犠牲になった女性が死んだとする証拠は消えた。血の流れない殺しであれば、同じ方法で簡単に処分できる。

「旦那、次は俺が選んでいいか？」

「好きにしろ。もう遅いからそいつで最後だからな」

昼間ごろから始めた龍之介の娯楽であったが、既に日は落ちているので何時戦いが始まってもおかしくは無い状況である。本当なら夕方には安全なはずの拠点に押し込めたかったが、そんなことをすれば下手すれば戦場に出てきて殺されかねないので、我慢だけをさせるわけにもいかずに好きにさせていたのだ。

その言葉に気を良くした龍之介は、鼻歌交じりで獲物を捜し始めるのだった。

遠坂凛は遠坂時臣の娘であり、魔術師である。聖杯戦争という単語は知らなくとも、夜の冬木が今は危険地帯となっているのは知っていた。同時に、学校の友達がソレ関係で怪異に巻き込まれたとも確信じみたモノを感じた。学校で友達が休むのは日常でもある普通の事だ。しかし、心配してお見舞いの電話を掛けても、一切相手にされないのは異常であった。風邪なら寝込んでいる、くらいの返答はあってしかるべきだが、その友達に関してまったく話をしてもらえないのだ。

故に、凛は責任感に苛まれた。警察などでは、今冬木市を騒がせている連続行方不明事件は解決できるモノではないと凛は解っていた。そして、見習いであるが魔術師である自分なら友達を助け出せるかもしれないと。可能性だけなら、普通はあってしかるべきだが現実はそれは有り得ない事であった。彼女の友達は既に餌食となっているからだ。それを知るよしの無い彼女は、あまりにも貧弱な装備で聖杯戦争中の仮宿から飛び出し、夜の冬木に出てきてしまった。その行為は、彼女からすれば勇気のある選択だったが、聖杯戦争を

しっかりと知っている者からすれば自殺行為以外のなにものでもなかった。

「……なにこれ？」

凛が頼りしていた装備の１つの魔力針――――常により強い魔力を発している方向を示す物――――が壊れてしまったかのようにグルグルと回転している。今迄その様な反応を見たのは初めてであり、それが何を示しているのかは凛にはハッキリとは判らなかった。不意に、魔力針が特定の方向を指したの凛はその方向を見てみるが、特に変わった物はなく、その方向には凛が知っている限りでは特に何も無いはずである。一瞬空で何かが光ったような気がしなくもないが、凛はそれを勘違いと決定付けて歩き始めた。

冬木市の人通りは極端に少なくなっている。理由として上げられるのは「冬木の悪魔」と週刊誌などで言われている猟奇的殺人事件に、それに続く連続行方不明事件、倉庫街と冬木ハイアットホテルのテロ事件。そんな物騒な事件が立て続けに起こったのだから住民の不安は非常に高いモノとなっており、全ての事件に警察は特別対策室を作っていた。当然夜間の外出の自粛の呼び掛けなども行われ、厳戒態勢でパトカーが見回りなどもしているが、余程の命知らずでなければ不穏な空気の流れる夜の冬木を歩く一般人はいなかった。

そんな理由もあって、凛はあまり人に見られずに夜の冬木を歩けるのだが、それは彼女にとっては良くなかった。パトカーを避けるように移動するとどうしても暗い場所を通る必要があり、路地裏は通らないがパトカーから隠れる為に仕方なく入り込んだ時だった。

「おじょ～ちゃん。こんな夜に１人でどうしたんだい？」

２人組の男に話掛けられたのは。片方は笑っており、もう片方は可哀想なモノを見るような目つきで凛を見据えていた。

「ヒッ！！」

よく解らないが、凛は思わず後ずさってしまった。状況を考えれば、子供が１人で歩いているのを見咎めて注意でもしにきたように思えるが、２人は凛が避けていた闇が特に濃い裏路地から出てきたので後ずさったのだ。その拍子に、魔力針を落としてしまい、それの反応を見てしまった。さっきまでグルグルと回るばかりだった先端が可哀想なモノを見る目で見ている白い服の男をしっかり指しているのに……

「その子に！手を出すなあああ！！」

突然の怒声、それに続くかのように黒いナニカが凛を飛び越えて笑っている男に向かって飛び掛かるが、白い服の男が一瞬で服装を変えてそれを横から殴り付けて逸らさせ、手をこちらに向けた。凛が憶えているのそこまでであった。

雁夜とキャスター（前書き）

感想　教授様、かにかま様
ありがとうございます！

雁夜とキャスター

バーサーカーのマスターである間桐雁夜が居合わせたのは、偶然と想いによるモノだった。自分のサーヴァントのバーサーカーは昨夜のライダーの攻撃でひどい状態であったが、もう戦闘ができるまでは回復しており、たとえ戦わなくても敵の情報を得る為に夜の冬木を徘徊していたのだ。使い魔である視蟲をも動員してコソコソと戦いを盗み見るつもりであった。そうしていた時であった。遠坂凛を見つけたのは。

はじめは疑問が絶えなかったが、愛する人の娘を危険な夜の冬木で放置できるわけもなく、雁夜は見つけた視蟲に後を追い掛けさせつつ、凛を保護する為に現場に向かったのだ。

そこで、凛は襲われていた。初めは子供が夜出歩いているのを見咎めた大人だと思ったが、凛の怯えが声を掛けたのに向けられていたのと、バーサーカーの反応でどちらかがサーヴァントだと解ったから、迷わず雁夜はバーサーカーに笑っている男を襲わせたのだ。

「キャスター？そっちはマスターか？」

いきなり意識を失った凛を抱き止め、雁夜は2人を睨みつける。バーサーカーは対魔力を持っていない為に全ての魔術を受けてしまうので、最弱のキャスターと言えども脅威になり得る。

「バーサーカー！キャスターを殺せ！」

自身の脆さと、凛をこのまま放置できないのと合わせて考えれば選択肢は初めからない。バーサーカーに殺すように命じてから虫に内側から喰われる痛みで覚束ない足取りで凛を抱えて逃げようとしたが、その足に喰われるのと違う痛みが奔る。

「がぁっ！？」

バランスを崩して雁夜は転ぶが、凛と体の位置を入れ替えて凛は怪我をしなように自分をクッション代わりにする。

「案外、中るもんなんだな」

ヘラヘラと笑いながら龍之介は呟く。痛みの正体は龍之介の投げた折り畳み式のナイフであった。およそ素人が投げて中るような物ではないが、運悪く雁夜は足に中ってしまった。

まともに動けないと龍之介は解ると、ゆっくりと近付く。

「どちらも殺すなよ」

「え～、どうしてだよ旦那。いいじゃんか……よ」

雁夜にも判った、マスターがサーヴァントに威圧されているのが。威圧された龍之介は顔を青くして黙って頷いた。だが、雁夜にはそれを見続ける余裕は次第に無くなっていった。バーサーカーが要求する魔力量を供給する為に、刻印虫どもが活動を活発化させて全身に生きたまま喰われる痛みが酷くなったからだ。

「さてはて、バーサーカーと当たるのは運が良いんだか、悪いんだか……」

キャスターのサーヴァントとしての本分を発揮できる相手だが、自分の陣地でなければキャスターは全力を出せない。特別な攻撃用

の魔法を仕掛けてあるわけではないが、いざとなれば魔力を霊脈から無理矢理吸い上げて自分を強化できるぐらいである。

「■■■■■■■■■！！！」

バーサーカーは排水用のホースを引き抜いて宝具化し、さながら鞭のように使っている。鞭であれば相手に致命傷を与えにくいのが普通だが、バーサーカーの手に掛かればサーヴァントすら叩き殺すような凶器と化す。振るえば周りの建物や地面に無数の傷跡を深く深く刻みつけている。いくらランサーとでも一時的に拮抗できるキャスターでも、宝具の鞭による台風さながらの暴風に突っ込んでは無事では済まない。かと言って、マスターから離れ過ぎると第三者によって殺されかねない為に下手に距離は取れない。

「百の影槍（ケントゥ ゼンウ ゾンゴラエ）」

キャスターの影が槍のように突き出てバーサーカーへと襲い掛かる。狭い路地裏では避けるのは不可能な密度で放たれたソレに対してバーサーカーは鞭を振るって迎撃する。余程高位のモノでなければ宝具化している物とバーサーカーの膂力を持ってすれば打ち払うのは簡単な事である。だが、キャスターが同時に放った全てを打ち払うには至らなかった。

始めから打ち漏らし狙いで影槍をキャスターは放ったのだ。それでも、実際に届いたのがたった5本だけなのには内心では肝を冷やしていたが。両足に1本ずつ、腹に2本、胸に1本突き刺さったが、バーサーカーはそれを刺さっている部分以外を空いている左手で砕いて猛然とキャスターに跳びかかる。

だが、完全に空を切った。

「今の俺では真っ向勝負では勝てん。だから、動きを封じさせても

らう。縛道の六十一　六杖光牢（りくじょうこうろう）。まだ必要か…縛道の六十三　鎖条鎖縛（さじょうさばく）」

影と影を繋ぐ影のゲートを使ってバーサーカーの後ろに回り込んだキャスターはバーサーカーの動きを六つの帯と鎖で封じる。

「効果は上々か……ん？」

六杖光牢に罅が入り始め、鎖条鎖縛も徐々にであるが綻び始めている。バーサーカーは膂力だけでキャスターの放った縛道を破りつつあった。

「まったくもって恐ろしいな……」

もう少しすれば力ずくでバーサーカーは縛道を破れたであろう。しかし、敵が自分の掛けた縛道を破りかけているのを黙って見ているようは間抜けな真似はキャスターせず、惜しみなく宝具を解放する。

「『虚閃（セロ）』」

至近距離から撃たれた魔力の激流とも言える虚閃はすべてバーサーカーに中るように注意して撃たれた。自分の縛道諸共撃ったので若干威力が落ち、縛道を吹き飛ばしてしまったが大した問題では無い。虚閃を受けたバーサーカーは倒れ、数回痙攣したかと思えば傷を癒す為に霊体化してしまう。

「つまらんな。まあ、真っ向から挑んでいれば負けは確実だったがな」

わざわざサーヴァントを殺しも喰いもしなかったのには理由がある。喰うよりも使った方が良いからだ。バーサーカーは理性が無いから魔力供給してくれるマスターが消えさいすれば、自然と契約してくれる可能性が非常に高い。令呪が必要ならマスターから全てを奪えばそれで済む話であり、倒れているバーサーカーのマスターに近付く。

「旦那。こいつ、死にかけているぜ」

「なに？」

観察してた龍之介は可笑しそうケラケラと笑っているが、キャスターは慌てて雁夜が守るように抱えていた凛を放させて、服の下を見て絶句した。目に見えるのは真新しい傷が体の到る所にあるだけだったが、キャスターは皮膚の下にナニカが巣食っているのを感じ取った。

「こいつ……何を飼って…いや、何に喰われている？調べるのにしても此処では危険だな……。急いで帰るぞ」

「この子供はどうするんだ？殺してもいい？」

「殺すな。そいつも連れて行く」

キャスターは雁夜を担ぎ、龍之介が凛を抱えて影の中に沈んで消えていった。

一部始終を見ていた者達が消えた場所に集まる。

「どう、思う？」

「消えた、それだけだ」

「綺礼様にはもう伝えたか？」

「伝えた。キャスターの拠点を探りつつ、遠坂時臣氏のご息女を捜せと……」

「ああも移動されては追い掛けて見つけるは不可能……地道に捜すしかないな……」

複数のアサシンの一時的な集会は必要な会話だけをして終了した。

雁夜とキャスター（後書き）

宝具説明

『虚閃』　ランク：Ａ－　対軍宝具　レンジ２～５０

宝具と分別されているが、正確には宝具クラスの攻撃。威力、範囲共にある程度は使用者の融通が効く。魔力の塊ようなモノなので、対魔力によって軽減されてしまう。

雁夜とキャスター2（前書き）

感想　コクイ様、ニコラス様
ありがとうございます！

雁夜とキャスター2

女性が笑っている。完璧な夫と、2人の子供に恵まれて幸せな家庭を持っていた。自分にとってはその女性の笑顔はどんなものより輝いており、自分で守りたい程だ。だけど、自分には笑顔にできないと諦めて、完璧な男に勝負すらせずに負けた。それでいいと思えた。自分にできないと解っていたから選択で、自分は遠くからその女性の笑顔を見れるだけでも幸せだった。

しかし、その女性の幸せは長くは続かなかった。笑顔にすべき夫と、自分が嫌う妖怪の所為で子供の片方を取り上げられた。原因の一端は自分にもあった。もしも、自分が心底嫌う魔術の道を歩んでいたのなら、起きなかった悲劇だった。

この戦いは贖罪の為の戦いだ。負けは赦されず、自分が取るべきなのは勝利と聖杯。憎悪と憤怒を胸に懐き、体には蟲を巣食わせ、戦う度に血で彩られてボロボロになろうとも勝利以外には価値は無し。ただ1人の女性のために1つしかないこの命すらも差し出したのだ。

「ハッ！！」

雁夜はそこで夢から意識を引き上げて現実へと戻ってきた。

（たしか、俺は路地裏でキャスターと戦って……）

そこまで思い出し、体が正常なのに気付き、酷く狼狽した。

「な……なんで……？」

1年前に入れた異物である刻印虫が綺麗サッパリと体の中から消

え去り、体が意識を失う前よりは動かしやすくなっていた。それとなぜか、バーサーカーとのパスは繋がったままなのに吸い上げられる魔力が極端に少なくなっている。慌てて令呪を確認するが、しっかりと1画も欠ける事無く残っている。

（刻印虫が居ないのは不味い！アレが居なければ魔力が足りなくてバーサーカーを現界させる魔力量を生成できないのに！）

この状況の手掛かりは無いかと辺りを見渡せば、部屋の隅に人影を確認した。

「バーサーカー？」

這い蹲る様に畳の床に縛り付けられていた。しかも、今は普段纏っている黒い霧を纏っておらず、鎧は大きな穴が開いている。その這い蹲っている場所には何やら記号などが書き込まれているが、雁夜にはそれがどの様な効果をしているのかは解らなかった。ただ、自分のサーヴァントが何者かによってそうなっているとだけは解った。

他に何かないかと見渡せば、隣の布団に彼が守ろうとした凛が静かに寝息を立てて眠っていた。

「凛ちゃん……良かった…」

安堵の息を漏らしたが、事態は一向に好転していない。

「目が覚めたようだな、間桐雁夜。それとも、バーサーカーのマスターと呼んだ方がいいか？」

「！」

フリフリの付いた白い服に仮面を付けているキャスターが雁夜の背後に立っていた。白い布で包まれたモノを担いでいたが、それはすぐに降ろした。

「お前が、原因か？」

「概ねそうだな。そっちの子供を殺しかけたは今の俺のマスターの意思だ。俺自体は殺そうとは今は思っていない。さて、とりあえずお前の記憶は見させてもらった。取引をしないか？」

「断れば殺すんだろ。何が欲しい」

キャスターは取引と言ったが、雁夜にとってはただの脅しだ。刻印虫をなくせば間桐雁夜は魔術師やマスター足りえず、例えバーサーカーをほんの数秒使役しただけで魔力の枯渇で死ぬ。隣で眠っている凛すら守れずに無意味に死ぬだけだ。それだけは絶対にできない。最終目標は今は間桐桜を救う事なのだからここで死ねるわけは無いのだ。

「解っているようで嬉しいな。簡単な事だ。お前は引き続きバーサーカーを使役して俺を掩護しろ。バーサーカーが脱落したら俺のマスターになれ。その時には、令呪は奪わせてもらうがな」

「無理だ。刻印虫が居ない俺ではサーヴァントを現界させられない」

キャスターの自分のマスターになれと言うのには驚いたが、雁夜は冷静に不可能と言う。

「刻印虫？ああ、あの出来損ないの虫か。あれよりもっと良いモノ

がある」

キャスターは自分のすぐ傍に置かれた物の白い布を取り払う。布の下にあったモノは人であった。そしてそれは、雁夜そのものであった。左半身が元の健康体であった時と一緒であったが、自分とまったく同じそれに雁夜は背筋が寒くなった。ホムンクルスは錬金術の範疇であり、始まりの御三家の一角のアインツベルンのお家芸と知っているが、目の前のモノはきっとその範疇と当たりを付けたが、自分がそこで眠っているのを見るのは気味が悪かった。

（なんだコレは……俺？だとしても、なんでこんなモノを用意できた？）

「詳しい説明は省くが、コレにお前の魂を移してお前の新しい体にする。疑似魔術回路をできるだけ組み込んだから、生成できる魔力量は今と比べモノにならほどに増える。バーサーカーに十分な魔力を供給でき、これはお前に馴染みやすいように出来ているはずだ。もしかしたら、拒絶反応がでるかもしれないが……」

それは現時点でのキャスターの魔術師として体の最高傑作であった。急造での一品ではあるものの、龍之介、雁夜、凛の魔術回路を解析し、刻印虫の疑似魔術回路を参考として作り上げたモノだ。身体能力も設計上は高めに作られており、頑丈である。ただ、キャスターの懸念は雁夜の魂がこの体に馴染むかであった。似た様な事は生前にもやったが、その時は時間をかけて適合させられたが今回はそうもいかないのだ。一応は作った体の一部に雁夜の元の体も使ったりして馴染みやすくしたが、それでも万全ではない。最悪の場合は拒絶反応で雁夜は死ぬ可能性もある。

「そんな事ができるのか？」

「できるから言っている」

「……さっき、取引と言ったな。俺がなにかを要求してもいいだな」

「勿論構わん。取引に応じるだけで、お前と子供は解放する」

「だったら、桜ちゃんを救うのに協力しろ。それと、時臣と戦える舞台を用意しろ」

「まあ、構わんだろ。それより、こいつはどうしたらいい？」

キャスターが指差したのは凛。雁夜が協力するなら既に用済みであり、置いておく必要性はないのでどうするかが問題なのだ。

「遠坂邸は解るか？そこまで送ってやってくれ」

「わかった。マスター」

「……」

一礼するとキャスターは凛を抱えて影の中へと消えていき、雁夜はそれを目を丸くしてそれを見送った。

「マスター、か……。あのマスターが相当気に入らないようだな。もしくは、願いが相反するものなのかもな」

雁夜はそう呟いてからキャスターが何処まで信用できるかを考え始めた。少なくとも、今すぐには殺されるような事は無い。キャスターはバーサーカーの力を欲しているから、わざわざ俺と取引をし

てまで獲得したのだろう。バーサーカーでないと倒せない相手として真っ先に上がるのはアーチャーだ。アーチャーを倒した後は、自分にバーサーカーと言う強力な力を持たせるのを嫌って令呪でバーサーカーを自害させる腹なのだろう。それに、キャスターの用意した体を使うのだから、キャスターの傀儡になるのだろう。既に間桐臓硯の傀儡同然になっていたのだからそれ自体はどうでも良い。問題は、キャスターが取引を守るかだ。真っ当な魔術師なら、契約を尊守させるべく制約（ギアス）でも掛けるのだろうが、自分にはそんな芸当は出来ない。キャスターならできるだろうが、体を変えた時点で手の平の上だ。守る気が無い、もしくはそんな事はするまでも無いと考えていればわざわざしないであろう。

（それでも、あの妖怪よりは信用できる。コレと同じようなのを用意させて、魂を移させれば桜ちゃんは綺麗な体に戻れる。……心の方はどうしようもないけど）

雁夜とキャスター２（後書き）

おまけ

キャスターは困っていた。雁夜の記憶を覗いて遠坂邸の場所はなんとなく把握したのですぐに着いた。しかし、ここで問題が発生した。凛をどうやって渡すかである。まさか普通に入る訳にも、門前に子供をこんな１１月の夜空に放置などできるはずもない。

「ダンボールに入れるか……？」

思い付いた瞬間は妙案に思えたが、すぐに却下した。可哀想である。それに、もしも自分の娘がそんな事をされたら怒り狂う。やった奴には苦しみながら死んでもらおうとするであろう。

「仕方が無い……」

キャスターはありったけの毛布で凛を包み、門前に置いた。そして呼び鈴を鳴らし、遠坂邸に虚弾を放ってから逃げた。ピンポンダッシュ＋攻撃。すぐに気付いてもらえ、なお且つすぐに保護されるようにしてもらうのにはこれしかないと、その時は思っていた。

後日、警察に届ければ良かったとキャスターは思った。

困惑する魔術師（前書き）

感想　コージー様、かにかま様
ありがとうございます！

困惑する魔術師

キャスターによる遠坂凛の誘拐。それはすぐに時臣の耳に入る事になった。しかし、時臣に出来たのは綺礼に指示を出すのと、複数の使い魔を飛ばして捜す事しか出来なかった。

『導師、目下キャスターを拠点共々捜索中でありますが、どういたしましょうか？』

「綺礼、そのまま続けてくれ。私の方でも使い魔を使って捜査の足しにしている」

時臣の声はひどく焦っているように感じられる。魔術は基本は一子相伝の秘術であり、遠坂家の秘術そのものである遠坂の魔術刻印は凛に受け継がせる予定なのだ。次代の当主になるべき凛がよりにもよって、快楽殺人者と死体を喰らうキャスターの手中にあるのだ。焦るなと言う方がおかしいであろう。

「綺礼、その、キャスターとそのマスターは間違いないのかね？死体を喰らう英霊と快楽殺人者と言うのは……」

『はい、間違いありません。街を探索していたアサシンがサーヴァントを発見し、それと一緒に行動している男がマスターで間違いありません。アサシン達はその男の右手の甲に令呪を確認しています。キャスターが獲物を選別し、マスターが快楽の為に殺し、その後の遺体と魂はキャスターが喰らう。それがキャスターとそのマスターが街でしていた事です。このところの連続行方不明事件の犯人はこの2人によるものでしょう。魔術は一切使っていませんので、神秘の秘匿に関しては問題はありません』

「……綺礼、君は今現在での凛が生きている可能性はどのくらいだと判断する……」

『…限りなくゼロに近いかと……』

綺礼と時臣の見解は同じだ。魔術師としての冷徹な思考もそう判断して、最悪死んでいるものとして遺体も手に入らないから諦めるべきと訴えるが、人として、父親としてはそう簡単には諦められない。妻である葵も、娘である凛も、娘であった桜も時臣は愛していた。桜を間桐に養子に出したのは古き盟約と、魔術師としての道を歩けるようにする為であった。自分より魔術の才能のある桜はその才能で同類を引き寄せてしまう。一般人と育てたとしても、それによって命を落としかねない程に危険であり、桜が必要としているのは魔術による加護。自分に授けられなければ他人に授けて貰うしかなく、間桐臓硯の申し出は時臣にとって天啓にも等しかった。桜がどの様な扱いをされるかをまったく知らずに……

「ハァ……」

漏らしたため息と共に思い出すのは妻の声であった。魔術師でなくとも、今の冬木の夜がどれ程危険かは知っていた。だから、３０分捜して見つからなかった凛を捜すべく夫に助けを求めたのだ。電話口でも判る程に嗚咽を我慢しながら、状況を仔細に伝えたのだ。その時には既にキャスターに誘拐されたと知っていたが、なぜ凛が危険に跳び込んだか知った時には誇らしくさえ思った。同時に、もっと危険である事を徹底して教えておくべきであったと後悔した。

「綺礼、アーチャーが何処に居るかは判っているな」

『はい、問題ありません。アサシンを1体憑けてあります』

最悪の場合だったら、キャスターをアーチャーで潰すべきであろう。転移が出来るなら工房の防衛能力も大して役には立たない。それに、キャスターを断じて赦すわけにはいかない。冬木の地を預かるセカンドオーナーとしても父親としても。

アサシンと使い魔の捜査も虚しく時間だけが過ぎていった。途中でライダーとマスターが霊脈巡りなどしていたりする情報しか得られなかった。アサシン達の目とサーヴァントの感知能力を潜り抜けてキャスターの尻尾を掴むどころか、尻尾の先すら見つけられない始末であった。

もしやキャスターは工房を冬木の外に置いているのでは？そんな突拍子もない考えが浮かんだ時であった。遠坂邸付近を巡回させていた使い魔が門前に人影を発見した。金髪を短めに切り揃えて、優しそうな感じのする顔つきのおよそ３０代の男が毛布に包まった何かを抱えて立ち尽くしいる。時間からして一般人ではない。

「キャスターか！？」

使い魔越しに見た男は綺礼からの報告にあったキャスターの街に居た時の格好と一致するものである。しかし、なぜそれが門前に居るかが解らなかった。攻めに来た？だったら発見される前に突入してくるであろう。下見に来た？その場合でもこうも堂々と門前に立つだろうか疑問だ。キャスターの行動は疑問しか出てこないもだった。

そんな疑問などお構い無しに、キャスターは毛布を影から取り出してさらに抱えているのを包んでから呼び鈴を鳴らし、時臣にはガントの様に思えるモノを一発撃ってから走って闇の中に消えていった。

「……なんだったんだ……？」

凛を誘拐したのや、バーサーカーのマスターも誘拐した行動は不可解でしかなった。それに続く門前での行動。とりあえず使い魔を使って毛布の中を見た。

「凛！！」

中に居たのは娘であった。今すぐにでも家の中に抱えて入れたいが、キャスターがわざわざ届けに来た意味を考えると迂闊に近寄れない。暗示をかけられていて、下手に近付けば殺されるかもしれない。また、凛自体にはなにもされていなくても、毛布になにかしら仕掛けがあるかもしれないのだ。謀殺はいかにもキャスターのクラスがやりそうな事だ。娘が手の届く場所に居るのに、下手な手出しが出来ないは親として辛いモノがあった。

「くっ……！」

せめて家の中に入れられれば良いのだが、自分が近付かずに入れる方法はサーヴァントを使うしかないが、アーチャーは今は居らず、アサシン2体なら居るが、アサシンがまだ存命だと遠坂邸を監視している全マスターに教えてしまう。アサシンは戦略を組み立てる為の情報収集をさせている為に、まだ露呈させる訳にもいかない。朝方になれば人が通るかもしれないが、それに頼るのには非常によろしくない。

「アサシン」

「何用で？」

「門の付近に何も居ないか調べて来てくれ。調べ終わったら玄関に来てくれ」

「はっ」

護衛として侍らしているアサシンの片方に何も居ないかを調べに行かせ、地下室を出て玄関へと歩く。時臣は見え透いた罠があると解っているのに、敢えてその罠に入り込むような真似をするつもりなのだ。

「何も居ませんでした」

「護衛を引き続き頼む」

「はっ」

どんな時でも余裕を持って優雅たれ。余裕などないこの行動はその家訓に反する行動であったが、家訓を守って後継者を危険に晒し続けるなど時臣は出来なかった。もしもキャスターがまともな魔術師なら、自分を殺すだけで終わらせるだろう。最悪の場合は親子揃って死ぬかもしれないが、その時はその時だ。むしろ、その時の為の桜である。例え2人が死のうが間桐に桜が居るのなら、遠坂の血が流れる者が次の聖杯戦争で聖杯を勝ち取るであろう。

門を開き、毛布に包まれて愛娘を抱き上げて片手で門を閉じる。その後はゆっくりと歩いて家に入る。

「……」

何も、起きなかった……。時臣は凛を調べたが、何もされた形跡は発見できなかった。間違いではないかと何度も調べたが、結果は

最初と変わらなかった。喜ぶべき事なのだろうが、時臣は納得できなかった。いくらなんでも、キャスターの行動は時臣には不可解すぎた。まさか一緒に誘拐された雁夜がキャスターと取引したなどとは夢にも思わなかっただろう。

「綺礼、凛の捜索はもういい。キャスターが送ってくれた」

とりあえず、時臣は弟子に凛の捜索の終了を教えた。ただ、やはりどこか声音は困惑したモノだったのは仕方が無いだろう。

困惑する魔術師（後書き）

衛宮切嗣　妻子持ち

言峰綺礼　子持ち。妻は他界している。

遠坂時臣　妻子持ち

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト　許嫁持ち。ただし恋仲ではない

雨生龍之介　女性を惹き付ける魅力がある

ウェイバー・ベルベット　１９歳。成長の余地あり

間桐雁夜　独身。気になる相手は既に人妻……

なんかマスター達を思い返したら、３人は子持ちだと思いだした……

どうでも良いか

幸運値（前書き）

感想　コージー様、ミナライ様
ありがとうございます！

サブタイ、あまり気にしないでください

幸運値

（なぜこうなった……）

キャスターはそう思わざるを得なかった。

雁夜と新しい体は良く馴染んでおり、バーサーカーは無理矢理現界状態して魔力を霊脈から流し込まれるようした御蔭で傷はほとんど治っていて、鎧は先に完全な状態に戻った。しかし、雁夜の方は日常的な行動は問題無いが、急に高くなった身体能力に感覚が追い付いていないので荒事に付いて行かせられないから計画は前に進められない。しかも、キャスターは雁夜に使える魔術を聞いたが、虫を使役する魔術しか使えないと聞いて頭を抱えた。今や魔力量の凄い人間だが、宝の持ち腐れに近い。サーヴァントを使役している間は魔力はそっちに使われるからまだ良いのかもしれないが。それでも、キャスターはアーチャーへの切り札を手にしたから経過は順調だ。だが、上手くいくことばかりでない。龍之介のご機嫌取りとしてまた昼間から街に出掛ける事になったからだ。

それ自体はまだよかった。そう、街中でアーチャーと鉢合わせになるまでは……

「なんだ、雑種？」

「いや……なんでもない」

「Ｇｏｏｄ！！またスリーセブンだ！」

キャスターの疑問はなぜ３人でパチンコをやっているかだ。最初はアーチャーと顔を合わせた瞬間は戦闘になると思っていたが、流石に昼間から戦っては一部の場所を除いて神秘の秘匿は難しいので

サーヴァントとしての戦闘にはならなかった。適当にスルーしようとしたが、アーチャーに呼び止められたのだ。

「雑種、我の暇つぶしに付き合え」

逃げるという選択肢はキャスターにあったが、龍之介がアーチャーを生で見られた興奮でなぜか乗り気になってしまったので、仕方なく付き合っている。もしや夜まで引き留めるアーチャーの策略かと思ったが、その様なセコイ真似はしないだろうと考えた。そもそもアーチャーは、現界しているサーヴァントがある程度は間引かれるなるまでは戦わないような発言をした。それを今すぐ覆すような事はしないだろうと。基本サーヴァントは嘘を言わないが、それは純粋で善か中庸の英霊がサーヴァントになった場合であり、キャスターは必要があれば嘘を言う。どうでもいいが、アーチャーは幸運：Aでキャスターは幸運：Eである。さらに賭けごとになるとアーチャーは自前のスキルの黄金律（バランスではなく、どれ程お金に恵まれるかである）：Aで負け無しになる。結果

「運は貴様にまったく味方せんようだな！」

「……近いうちに潰してやる」

「旦那、元気だせって」

アーチャーに惨敗するキャスターが出来上がった。

運勝負ではキャスターは絶対にアーチャーに勝てない。ましてや、スロットやポーカーの掛け勝負では勝ちようが無かった。

現在は適当なカフェに入って紅茶などを飲んで一息ついている。

「フン、魔術師風情が随分とでかい口を叩くな。貴様の場合は、ど

の雑種とも違うようだがな……」

品定めするようにアーチャーはキャスターをじっくりと爪先から頭まで見る。

「雑種、我の家臣にならんか？さすれば、聖杯の１つや２つは賜わしてやってもいいぞ？」

「断る。聖杯なんて必要ない。それに、従属は性に合わん」

しばし沈黙が流れたと思えば、どちらからともなく笑いだす。その奇妙な光景に龍之介は呆然とした。なぜ笑いだしたのか？と……

「イスカンダルの真似か？英雄王よ」

「なに、新しい家臣を得るのもまた一興と思っただけだ。それに、貴様は転移が出来るのであろう？我が庭を見回るに使えるやもしれんしな。そういえば、そいつの問いにもその様な返答をしていたな。ならなぜ、この聖杯戦争に参加している？キャスターよ」

「別に望みが無い訳ではないが……楽しみたいと言う漠然とした望みしかない。とりあえず今は、戦いを楽しんでいるだけだ」

「その結果、聖杯を手に入れたらどうするつもりだ？」

「特に考えてはいない。何せ自分より強い奴が何人も居るのでな。まあ、勝てる方法はあるがな」

「では、もしも貴様が我の前に立ちはだかった時には、我に勝てる状態という訳か？」

「ああ、そうだ。敵と対峙する時は、必殺を確信した時だ。しかし、この前は邪魔が入ったせいでランサーを仕留められなかったがな」

「貴様はその程度ということだ。雑種」

一区切りついた所でまた、両者は沈黙する。共に相手を威圧しているが、向けられているのは当人達だけなので周りの人たちは2人の雰囲気が悪い程度にしか認識せず、少しだけ距離を置く。

「嘗めるなよ、英雄王。お前は確かに並ぶ者の居ない王だ。しかし、それだけで勝てると思っているのなら、とんだ道化だ。雑種であろうとなかろうと、サーヴァントとして召喚された者は等しく死んだ者だ。格の差はあろうと、同類なら殺せる」

「格の差を認識してなお、貴様は我に挑むというか？勝てん戦いであろうと挑む方が道化ではないか？キャスターよ。解っているのだろう、我と貴様の間にある大きく隔たる壁が」

「解っている。が、その壁を突き抜ける手札はある」

一触即発の空気に龍之介はむしろ可笑しそうに笑っている。生でサーヴァント同士の戦いがまた見えるかと期待しているのだ。周りの人たちはただならぬ雰囲気に離れ始めているのにも関わらず……

だが、そんな空気はすぐに飛散した。

「出来るものなら、やってみるがいい。我は逃げも隠れもせずに受けて立とう。貴様が、その時まで勝ち残れればの話だがな」

「俺は手段を選ばんぞ？後悔するなよ、英雄王」

「それでは、気長に待つとしよう。時臣の采配ではいったい何時になることやら……」

「明日だ」

「なに？」

「明日の午後１０時に遠坂邸に襲撃をかける」

キャスターの発言に意表を突かれたアーチャーはしばしキャスターの顔を凝視する。対するキャスターは悠然とその視線を受け止めている。虚勢やハッタリではなく、本気であるのがアーチャーには判った。

本気と判った途端にアーチャーは声を上げて笑い、ひとしきり笑うと堂々と宣言する。

「許す。全力を賭してこの我に挑むがいい。そして、知るがよい我と貴様の差を」

「知るのはお前だ。どれほど解っていないかを」

さながらドラマのワンシーンの収録かと思う程の２人の言動に人だかりが出来ていたが、その人だかりをかき分けて前に進み出る大男と青年がいた。

「何をやっておるんだ？金ぴかにキャスターよ、こんな注目されるような事をしておって」

「ライダー！なに人混みかき分けて進んでいるんだよ！少しは……

…」

呆れ顔のライダーに、口をパクパクと動かしてアーチャーを唖然と見つめているウェイバーは滑稽な組み合わせに見えた。ちなみに、ライダーは普通の格好である。通販で買ったTシャツにズボンを穿いている。ズボンはウェイバーが川の水に魔術の名残が残っていないか調べる為に水を汲ませに行かせる為に買い与えたのだ。本当は昨夜キャスターを捜したが総スカンだったために、どうにもライダーと一緒に居るのが気まずかったので少しでも離れるようにと買い与えのだが。しかし、ライダーが街に行くと言ったので、1人にするとなにを仕出かすか判らないので仕方なく一緒に街に繰り出したのだ。よもや、そこでアーチャーと――今は気付いていないが昨夜捜しまわった――キャスターと出くわすとは思っていなかった。

「なんだ、サーヴァント同士で気軽に茶飲み話でもやっておったのか？」

「少し、違うな」

「なに、我の暇つぶし付き合って貰ったから些細な礼だ」

ちなみに、アーチャー達が飲んでいた紅茶は最高級の物であったりし、支払いは全てアーチャー持ちだったりする。

飲んで話をしていた。ライダーはその光景である事を思い付いた。

「ものは相談なんだが、これからセイバーも交えて酒盛りでもせんか？」

この発言に、全員が呆気に取られたのは言うまでも無い。

アインツベルンの城への来客（前書き）

感想　横目非英様、教授様、かにかま様、コージー様、ニコラス様
ありがとうございます。

アインツベルンの城への来客

アインツベルンの森の城では、平穏な時間が流れていた。切嗣と舞弥が全力でランサーを捜索しているが、今はまだ発見できないでいる。マスターが生き残ったか、それともランサーが新しいマスターを得たのかは解らないが、それでも未だ脱落していないのはセイバーの傷が治らない事で証明している。

だが、幸いな事にランサーと戦う上で障害となるものは少なかった。アーチャーは戦う気が今は無いようで、ライダーは決着がつくまで手を出さないと明言している。キャスターとバーサーカーは不明であるが、真っ当な戦略を考えればセイバーとランサーの一騎討ちに横槍を入れるような真似はしないであろう。尤も、両者共に行動原理が不明であるので油断はできなのだが。問題が一番あるのは、アサシンであった。アサシンが存命であるのは切嗣と舞弥の目撃で既に判っているが、気配遮断で忍び寄られるとどのサーヴァントでも発見はできない。結界があれば、余程アサシンの気配遮断のスキルが高く無い限りはある程度は侵入を防げる。

が、その結界が突然の轟音と共に破られた。いや、どちらかと言うと術式ごと破壊されたようであった。その結界と繋がっていたアイリスフィールの魔術回路に強烈な負荷がかかった事による眩暈で倒れそうになったが、すぐ後を付いて歩いていたセイバーがすぐに手を貸して態勢を持ち直した。

「なんてこと……正面突破ってわけ？」

苦しげに呟く。こんな事が出来そうなサーヴァントは2体だけ、キャスターかライダーだ。だが、轟音として聞こえたのは雷鳴であったからライダーだろうと思われる。

「大丈夫ですか？アイリスフィール」

「ええ。ちょっと不意を討たれただけ。まさか、ここまで無茶なお客様をもてなすとは思ってなかったから」

「出迎えます。貴女は私の傍を離れないように」

セイバーの言葉に頷き、アイリスフィールはセイバーと共に玄関ホールを取り囲むテラスへと足早に向かう。セイバーと共に居るのは敵と相対する事を意味するが、結界が十全に機能しなくなった今はアサシンが侵入してくる可能性が非常に高くなったのだ。アサシンを警戒する意味も合わせてセイバーのすぐ傍にいるのが最も安全なのだ。

「おぉい、騎士王！わざわざ出向いてやったぞぉ。さっさと顔を出さぬか、あん？」

玄関ホールから聞こえてくるのは間違いなくライダーのモノであったが、戦いに来たにしては間延びして聞こえるので緊張感に欠けている。

それでも、襲撃してきたのだからセイバーはスーツの上から白銀の鎧を実体化させて迎え撃つ準備をする。

「……」

「いよぉ、セイバー。城を構えていると聞いて来てみたが、なかなか洒落た城ではないか。まぁ、この国風ではないのが些か残念だがなぁ」

セイバーは戦う気でいた。その気であったが故に、言葉に詰まっ

た。

「それと、徒歩では着難いとキャスター言われたのでな、庭木を余がちょいと伐採しておいたから有り難く思うがいい。かな～り見晴らしがよくなってるぞ」

キャスターのセイバー陣営に対する悪意ある入れ知恵にアイリスフィールは頭痛がした。ライダーが庭木と言った木々は、招かざる客を迷わしたりする以外に結界を張るのにも利用していたりする。キャスターならそれに気付いていたのだろう。それを伐採する様に直接言ったかは判らないが、少なくともそうなる様に誘導したのだろう。自分が攻め入る時に少しでも障害が少なくなるようにと考えて……。そんな思惑があったとライダーは知らずに善意でやったのだろう。

「ライダー、貴様は……」

なんと言うべきだろうか？そうした思いでセイバーは呼び掛けはしたものの言葉が続かない。

「おいこら騎士王、今夜は当世風の格好（ファッション）はしとらんのか。何だ、のっけからその無粋な戦支度は？」

ライダーは『神威の車輪』に乗ってはいるものの、その格好はセイバーと違って本人の言う当世風であった。尤も、１１月と考えるとTシャツとズボンだけでは些か季節感の外れた格好ではあるのだが。

セイバーが言葉に詰まっている理由はそれだけでは無い。ライダーが小脇に抱えているモノの所為であった。

樽。オーク製のワイン樽であった。ライダーが市場で見つけて買

ってきた一品である。
そして、ライダーの背中に隠れているのはウェイバーである。その表情は申し訳なさそうであり、彼の意向ではないと窺える。この後に続くであろう事にウェイバーはライダーに当世風の格好をすれば街を歩けると教えた事になるセイバー陣営を恨んでいたのは忘れて、同情していた。

「ライダー、貴様、何をしに来た？」

「見て解らんか？一献交わしに来たに決まっておろうが」

「……」

よもや、聖杯戦争中に敵陣に乗り込む暴挙に打って出てしに来たのが一献交わしに来たと普通なら思い付かない。ワイン樽を見た時はもしかして…と考えても、状況を考えれば真っ先に排除する可能性である。ライダーの破天荒ぶりは今に始まった事でないとしてもだ。

「アイリスフィール、どうしましょう？」

戦闘ならいざ知らず、酒盛りの誘いにどうすべきかセイバーはとりあえずアイリスフィールに指示を仰ぐ。酒盛りの為に場所を提供するのか、それとも力ずくで追い返すにしてもセイバー1人の判断ではダメである。

「罠、とか……そういうタイプじゃないものね、彼。まさか本当に酒盛りがしたいだけ？
あの男、やっぱりセイバーを懐柔したくて仕方ないのかしら？」

「いいえ、これは歴(れつき)とした挑戦です」

「挑戦？」

一瞬、ライダーに毒されたのでは？と考えてしまったアイリスフィールは悪くないであろう。

「はい。……我も王、彼も王。それを弁えた上で酒を酌み交わすというのなら、それは剣に依らぬ“戦い”です」

「フフン、解っておるでないか。……しかし、今宵はちと違うな。王で無い者も呼んであるからな」

「なんだと？」

呼んでいる。他人の城なのにあたかも自分の城かのように気軽に他人、しかもサーヴァントと予測できる人物を呼ばれたのに更にアイリスフィールは頭痛がした気がした。呼ぶ方もどうかしていると思うが、呼ばれて来る方はもっとどうかしているのだろう。

「なんだ、我より先に行ってまだ準備も終わってないではないか」

「ライダー、御蔭で迷わずに来れた」

「へ～、こんな所にこんな城があったのか……ｃｏｏｌだ！」

我が物顔の新たな来客にアイリスフィールは眉間に皺をよせてしまう。

「セイバー、付き合ってあげなさい。アレ等は梃子でも動きそうに

ないから……」

「……なるべく早くお帰り願えるようにします」

アイリスフィールの心中を察して、セイバー静かに誓ったのだった。

宴

宴の場所として選ばれたのは玄関ホールであった。まさか敵であるライダーを筆頭に押し掛けてきた連中をこれ以上は城の中に踏み込ませないためと、暗に帰れという意思表示で選ばれたのだ。しかし、誰もそれを気にしている様子がない。それどころか、アーチャー主導で「王が参加する宴に相応しい場所に作り変える」と言って、玄関ホールに調度品を置いてパーティー会場に作り変え始めた。実行したのはキャスターであったが、調度品は全てアーチャーが攻撃する時のように何処からともなく取り出した物だ。それによって玄関ホールは立派なパーティー会場に早変わりしてしまった。

（切嗣が帰って来たら、なんて説明しようかしら。納得、してくれるかしら……？）

ため息をついて、アイリスフィールは心の中だけで呟く。

突然のアクシデントなら、切嗣の予測の範疇であろうが、この様なアクシデントは切嗣の予測には無い事は解る。いや、切嗣だけでなく、誰にも予測できない出来事であっただろうが。

見れば準備は終わったのか、サーヴァント達は中央に置かれた樽と料理を取り囲んでいる。ちなみに、料理はキャスターが影から取り出した怪しげな品であるが、セイバーはその料理のおいしそうな香りと見た目で目線をチラチラと気にしている素振りをしている。

「いささか珍妙な形だが、これがこの国の由緒正しい酒器だそうだ」

そう言ってライダーは自慢げに柄杓を取り上げるが、酒器と言ったあたりでずかずかとキャスターが近寄り、自然な動作でライダーを小突く。

「てきとうな事を言うな。これは日本の酒器では無く、水などを汲み取る道具だ」

キャスターの指摘でライダーに白けた視線が集中する。

「ん？そうなのか？しかし……汲んでも入れる酒器がないのではなぁ。キャスター、持っておらんか？」

指摘に笑って頭を掻き毟りながら誤魔化して聞くが、キャスターは持っていないと返答する。そこで進み出たのがアーチャーであった。

「まったく、自分から酒を酌み交わそうと嘯いておきながら、満足に酒器の１つも用意できんとは、格が知れるぞ？コレを使うがいい」

アーチャーが空間から取り出しのは宝石が散りばめられた黄金の杯であった。それを人数分用意してライダーにまとめて渡して、酒を汲めと促す。この際、キャスターが指摘しなければ汲むだけの道具で酒を飲んでいたことは指摘しないでおこう。

ライダーが全部の杯に汲んですぐに集まったサーヴァントの手に行きわたる。

「聖杯は、相応しき者の手に渡る定めにあるという。それを見定めるための儀式が、この冬木における闘争だというが――なにも見極めをつけるだけならば、血を流すには及ばない。英霊同士、お互いの“格”に納得がいったなら、それで自と答えは出る。では、まずは一杯といこうか」

ライダーの音頭に合わせて、全員が一息で飲み干す。体格差があ

ったにも関わらず全員が剛胆に呷って、杯を降ろしたのはほぼ同時であった。飲みっぷりでは互角と見て取ったライダーが次の言葉を紡ごうとしたが、アーチャーが先んじて発言した。

「――何だこの安酒は？こんなもので本当に英雄の格が量れるとでも思ったか？」

嫌悪感を露わにしてアーチャーはライダーを睨みつける。

「そうかぁ？この土地の市場で仕入れたうちじゃあ、こいつはなかなかの逸品だぞ」

「そう思うのは、お前が本当の酒というものを知らぬからだ。雑種めが」

再びアーチャーは空間から物を取り出す。今度は先程出した杯と同様に宝石が散りばめられた黄金の瓶であった。どうやら、杯と瓶で一揃いの酒器であったようで同じような宝石の散りばめられた方である。

「見るがいい。そして思い知れ。これが『王の酒』というものだ」

「おお、これは重畳」

ライダーはアーチャーが出した瓶を受け取ると４つの杯に酌み分ける。

セイバーはアーチャーを警戒してか、すぐさまに『王の酒』を呷らないが、ライダーとキャスターは無警戒で口をつける。毒殺などは――そもそもサーヴァントに毒が効くかは不明であるが――警戒していない。その様な方法を使ってでも勝ち残ろうとすような

者この場にはいない。それに、王の中の王と豪語するアーチャーがそんな姑息な手段を使うとは2人とも思っていない。

「むほォ、美味いっ！！」

「何……だと……？」

ライダーはその味に目を丸くして喝采し、キャスターも目を丸くしているが表情はありえないモノを見たかのような驚愕に染まっており、一口だけ飲んだ酒を凝視している。この2人をそこまで反応させる酒はいったいどの様な味なのか気になったセイバーは喉に流し込む。その瞬間、言いようのない幸福感がセイバーの味覚を支配した。こんなに幸福感を感じてしまって良いのだろうか？と後ろめたくなる程であった。その酒は正に極上の美酒と言うのに値する逸品だったのだ。ライダーが持ってきた酒を安酒と言い捨てたのも無理は無いと理解する。そもそも、比べる事すらおこがましいと思える位に格が違う。

「凄ぇなオイ！こりゃあ人間（ひと）の手になる醸造じゃあるまい。神代の代物じゃないのか？」

「調度品といい、酒といい、これ程の物をよく惜しげも無く提供できるものだな……」

2人の賛辞に気をよくしたのかアーチャーは微笑しながら、愉悦そうに杯を手に揺らしていた。

「当然であろう。酒も剣も、我が宝物庫には至高の財しか有り得ない。――――これで、格付けは決まったようなものだろう」

「ふざけるな、アーチャー。酒蔵自慢で英霊の格が決まるなど聞いて呆れる。戯れ言は道化の役儀だ」

「まてまて、セイバーよ。言いたい事は余も解らんでもないが、持ち物に関して言えばアーチャーが優勢だ。ここは次に移ろうではないか」

苦笑しながらもライダーはセイバーに落ち着くように言い、アーチャーに向けて先を続ける。

「アーチャーよ、貴様の極上の酒はまさしく至宝の杯に注ぐに相応しい。――が、あいにくと聖杯は酒器とは違う。

これは聖杯を掴む正当さを問うべき、言うなれば聖杯問答。まずは貴様がどれほどの大望を聖杯に託すのか、それを聞かせてもらわなければ始まらん。さてアーチャー、貴様は、ここにいる我ら3人をもろともに魅せるほどの大言が吐けるか？」

「仕切るな雑種。第一、聖杯を“奪い合う”という前提からして理を外しているのだぞ」

「ん？」

アーチャーの言葉に怪訝そうにライダーとセイバーが眉をひそめるの見てアーチャーは呆れきったかのように嘆息する。

「そもそもにおいて、アレは我の所有物だ。世界の宝物はひとつ残らず、その起源を我が蔵に遡る。いささか時が経ちすぎて散逸したきらいはあるが、それら全ての所有権は今もなお我にあるのだ」

「じゃあ貴様、むかし聖杯を持ってたことがあるのか？どんなもん

か正体もしっていると？」

「知らぬ。雑種の尺度で測るでない。我の財の総量は、とうに我の認識を超えている。だがそれが『宝』であるという時点で、我が財であるのは明白だ。それを勝手に持ち去ろうなど。盗人猛々しいにも程がある」

アーチャーの言い分に、今度はセイバーが呆れ果てる番だった。

「おまえの言（げん）は世迷い事とまったく変わらない。この聖杯戦争に、錯乱した英霊（サーヴァント）がいたとわな」

確かに――――アーチャーが錯乱してると決定付けるには少し強引かもしれないが――――普通ではありえない事を口走ったかのように思えて、セイバーの方に理があると考えられる。が、ライダーもキャスターもセイバーではなく、アーチャーの言葉の方が理があると判断した。

「セイバー、お前のほうが錯乱しているかのようだぞ？
俺達サーヴァントは奇跡の体現だ。なら、この世の全ての財を持つ奇跡に等しい宝具を持っていてもおかしくはない」

キャスターの言葉に、アーチャーが反応した。

「やはり、貴様は他の雑種と違うようだな。キャスター」

「お褒めに与り光栄だ。英雄王」

「だが、聡明さを隠さねば、我の家臣がよからぬ手段で貴様を消しかねんぞ？」

「では、俺は護衛に戻るとしようか」

キャスターはアーチャーに目礼をすると、そそくさと像に見惚れている龍之介のすぐ傍に控えた。龍之介の元に行く前にアイリスフィールとウェイバーに料理を勧めていたのは余談だろう。

宴2（前書き）

感想　竜華零様、コクイ様、白野　蒼衣様
ありがとうございます！

宴2

遠坂邸の地下室で今日も時臣は通信機の向こうの綺礼と会話していた。会話の内容は現在開かれている宴についてだ。ライダーが結界を壊してくれた御蔭で、アサシン達がアインツベルンの森と城にまで気配遮断を維持したままでの侵入に成功しており、宴の内容はこれまでと同じように全てが筒抜けであった。

サーヴァントによって宴が開かれているについては、最早驚愕には値しない瑣事と半ば疲れた頭で時臣は考えていた。サーヴァントの奇行はすでにアーチャー、ライダー、キャスターによって少しは慣れてしまった。アーチャーは平気で出歩く、ライダーは聖杯戦争のルールを無視した言動、キャスターに至っては娘を誘拐したかと思えば、家に帰しにきた。更には、襲撃予告をアーチャーにするしまつであったが、コレに関してはむしろ僥倖と捉えるべきだ。おそらくはその場の勢いではなく、前々――――予想では倉庫街での戦いの時――――から計画していた事であろうから、予告なしでも襲撃をしてきたであろう。ただ、キャスターが何を考えているのかがますます解らなくなったのだが。

「ところで、綺礼。ライダーとアーチャーの戦力差……君はどう考える？」

『ライダーに『神威の車輪』を上回る切り札があるのか否か。そこに尽きると思われますが』

「うむ……」

現状で英雄王ギルガメッシュに単騎で勝てる可能性を持っているのはライダーのみである。時臣個人としては、謎すぎるキャスター

も警戒しているが、それは明日までになる。それと、ギルガメッシュが襲撃を許したからには時臣がキャスターになんらかのアクションを取ると不興を買ってしまいかねない。バーサーカーのマスターも誘拐していたから、キャスターがバーサーカーを連れてくる事も予想しているが、それでもギルガメッシュには届かないと目している。なにもギルガメッシュの宝具は『王の財宝』だけではないのだから。尤も、できれば使ってはほしくないと思っているが……

「……この辺りでひとつ、仕掛けてみる手もあるかもな。綺礼」

『成る程。異存はありません』

既にアサシンはほぼ役割を終えている。キャスターに関しては街で一般人を襲っているくらいしか調べられなかったが、その他のサーヴァントはほとんど調べられた。キャスターの切り札がまだあるかも調べたいが、それはもうほとんど意味をなさないであろうから捨て置けばいい。だが、必要な情報はまだ完璧ではない。最後に欲しいピースはライダーの更なる宝具の情報だ。その為なら、アサシンなど使い潰すのも有りだ。

『すべてのアサシンを現地に集結させるのに、少々時間がかかりますが……』

「構わない。号令を発したまえ。大博打であるが、幸いにも我々が失うものはない」

サーヴァントは結局のところ道具でしかない。それにこの師弟の共通認識であった。

時臣は報告を待つ間に明日の戦いの準備を始めた。戦うのが解っているのなら、それによる周りへの被害を最小限にするのがマスタ

ーの勤めの1つであり、神秘の秘匿に繋がる重要な事だ。

「アーチボルト家9代当主、ケイネス・エルメロイがここに推参仕(つかまつ)る！」

威風堂々と胸を張ってのケイネスのアインツベルン城への入城は、本人が堂々としていた分だけ滑稽さを演出することになった。

実はケイネスはライダー達より先にアインツベルンの森のすぐ傍まで来ていて、アインツベルンの城を攻め落とす為の下調べをしていたのだ。その時にライダーが結界を破壊したので、これは好都合とあわよくばセイバーとライダーを倒す為に乗り込んだのだが……タイミングが悪すぎた。

ケイネスは教え子であるウェイバーと、セイバーのマスターと思っているアイリスフィールを倒すつもりで、ランサーはもしもライダーがセイバーと戦っているのなら、セイバーと協力してライダーを倒してからセイバーと戦うつもりであった。しかし、城で行われていたのは宴であり、2人が望むモノではなかった。

「ほれ、駆けつけ一杯」

ライダーは唖然としている2人に、とりあえず自分が使ってたのとキャスターがさっきまで使っていた黄金の杯に普通の酒を酌んで渡す。その杯を受け取ったものの、酒を飲むかは明らかに迷っている。敵にいきなり酒を勧められたのなら、当然の反応である。ランサーはセイバーに目線だけで助けを求めたが、セイバーは飲めという意味で何度も自分の空の杯を傾ける。意味を汲みとったランサーは杯を傾けて一息で飲み干す。

「うむ！英雄の名に相応しい飲みっぷりだ！。さて、ランサーにそのマスターよ、今は余達は聖杯問答なるものをやっておるわけだ。まぁ、平たく言うとだな、誰が聖杯を掴むに相応しい格を持つかを話しておったところだ」

笑いながら「ほれ、もう一杯」と言いながらライダーは先程からずっと離さず持っている王の酒をランサーの杯に酌む。

「それで今は聖杯に託す願いを言っているとこだ。1人は、参加する気が無いようだがな」

1人とはキャスターの事だ。アーチャーに忠告されてからは樽と料理を囲むのをやめて龍之介の後ろに付いて歩いている。龍之介は像を見飽きてアイリスフィールやウェイバーに話掛けたが、無言であしらわれてしまったので暇そうにしている。

「あの雑種は託す願いなど無いらしいからな」

「なんだぁ？キャスターとはその様な話をする間柄だったのか？」

「まさか。我が問い、キャスターが答えた。それだけだ。それより、次は誰が託す願いを述べるのだ？」

「では、余が言おうか。余の聖杯に託す願いは受肉だ」

「はあ！？」

ライダーの願いを聞いて一番意外そうな反応をしたのはマスターであるウェイバーであった。彼はライダーが爆撃機を欲しがったり、国の首相を強敵そうだと評価するなどして、世界征服を画策してる

節を何度も目にしており、それゆえにライダーが託す願いは世界征服とおもっていたのだ。

「おおお、オマエ！望みは世界征服だったんじゃ――――ぎゃわぶっ！！」

ライダーはデコピンでウェイバーを黙らせてから、続ける。

「馬鹿者。たかが杯なんぞに世界を獲らせてどうする？征服は己自身に託す夢。聖杯に託すのは、あくまでもそのための第一歩だ」

「雑種……よもやそのような瑣事のために、挑むのか？」

「あのな、いくら魔力で現界しているとはいえ、所詮我らはサーヴァント。先程キャスターが言った様に奇跡の体現だ。普通なら起こり得ない存在だ。もしかしたら次の瞬間にでも消えてしまいかねないほどに、な……そこに更に奇跡を重ね掛けてでも、余は確立した生命（からだ）が欲しいのだ」

「なんで……肉体に拘るんだよ？」

「それこそが『征服』の基点だからだ。身体ひとつの我（が）を張って、天と地に向かい合う。それが征服という“行い”の総て……そのように開始し、推し進め、成し遂げてこその我の覇道なのだ。

だが今の余は、その“身体ひとつ”にすら事欠いておる。これでは、いかん。始めるべきモノも始められん。誰に憚ることのない、このイスカンダルただ独りだけの肉体がなければならん」

ライダーにとっては、聖杯戦争すらも踏み台にすぎないのだ。それこそ、人生での初戦かのような扱いだ。どのサーヴァントも今生

での最初で最後の大舞台として参加しているのに、ライダー1人だけはその先を見ているのだ。生前できなかった世界征服という大望を胸に抱えて。

「フッ、成る程な、自分で成さねば意味がないのだな。俺にも解るぞ、ライダー。だが、お前、いや、誰にも聖杯は渡せん。聖杯を手にするは、我が主であるケイネス殿ただ1人だ。

俺の願いはただ1つ、生前果たせなかった主への忠義を果たす事だ。ゆえに、聖杯に託す願いなどない」

澄んだ声で凛と言い放ったのはランサーであった。主君に忠義を尽くした人生を歩めなかったからの望みだ。人生は騎士道に殉じた道であり、後悔も遺恨もない。だが、もしも次があったのなら……

……そう考えた道を今歩んでいるのだった。

4人のサーヴァントが――――正確には3人で1人は直接言って無いのだが――――願いを言い、最後に残ったのはセイバーであった。そのセイバーは、自分の願いは誰よりも清廉であり、尊い願いであると確信していた。

「最後は私の番だな」

だから、セイバーは胸を張って堂々とその願いを言った。

「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望機をもってして、ブリテンの滅びの運命を変える」

その言葉と同時に、空気が変わった。

宴3（前書き）

感想　ｓｅｒｉ様
ありがとうございます！

宴3

……全サーヴァントが周りの異様な気配に気付いた。セイバーの願いを聞いてライダーが何か言いたそうな顔をしたものの、そんな事より周りの気配に対処するのを優先した。

遅まきながら、マスター達もそれに気付いた。丁度、自分達が樽と料理を囲んでいるように、自分達に殺意を向けるモノが取り囲んでいるのに……。ソレの姿は暗闇であれば見れないような黒であり、一点だけ反対色の白であるが、そこは髑髏の仮面であった。つまり、最初に退場したとほとんどの者が思っていたいたアサシンであった。しかも、その数が尋常ではなかった。玄関ホールの壁に沿っているのと、テラスにいるアサシンの数は５０は間違いなくおり、その姿は子供のように小さな者もいれば、女のような丸みを帯びた輪郭の者もいて、全てが別の個人のように見えた。

「チッ！雑種が……」

それを見たアーチャーが舌打ちをして呟く。このタイミングでのここまで思い切ったアサシンの使い方は、時臣の指示とアーチャーには容易に想像できた。自分のマスターの指示でなければ、如何にも雑種が考えそうな事だと言って、一蹴するのだが、何か考えがあってのことであろうと思い留まる。しかし、怒りは鎮めない。時臣は解っていない。アサシンに宴を壊されればそれは沽券に関わる行為だといのに。

席を設けたのライダー、場所を提供したのはセイバー、酒と席を相応しい物にする為を提供したのはアーチャー、料理を用意して雑務をこなしたのはキャスター。そんな英雄が各々が出せるモノで作られた宴を壊すのは、顔に泥を塗るに等しい行為となる。

「む……無茶苦茶だッ！」

１つのクラスにつきサーヴァントは１体と決まっている。その考えなら、１体以外はアサシンに扮した偽物になるが、同じサーヴァントは全員がサーヴァントであると感じ取った。アサシンが増殖しているのは怪異や異常でしかない。

「どういうことだよ！？何でアサシンばっかり、次から次へと……だいたい、どんなサーヴァントでも１つのクラスに１体ぶんしか枠はないはずだろ！？」

狼狽するウェイバーを見て、アサシン達は笑う。

「――――左様。我らは群にして個のサーヴァント。されど個にして群の影」

正にアサシン達を言い表す言葉であったが、その言葉の意味を真に理解した者はいなかった。

アサシンが誇る宝具『妄想幻像（サバーニーヤ）』は、生前に１つの肉体でありながら複数の人格（たましい）を持っていた事に由来する宝具であった。能力は己の霊体を細分化して、それぞれの人格にそれぞれ霊体を与えて複数のサーヴァントとして現界するものだ。しかも、人格ごとに特技を持っている。しかし、元々が１人である霊体を細分化するせいで、サーヴァントとしての身体能力は分裂した分だけ１人あたりの身体能力は低下する。それでも、アサシンとしてのクラスの恩恵は全員が隔てなく受けられるのを考えれば諜報に関して言えば、間違い無く最高のサーヴァントである。

しかし、いまアサシンがしている集団戦法は捨て身の特攻であった。聖杯戦争にアサシンが勝つのなら、この戦法は最終手段であり、本来なら大多数がサーヴァントの足止めをしている間に少数がマス

ターを暗殺するのだ。マスターの暗殺がアサシンの本領発揮ができる手段なのだから。しかし、綺礼の令呪による命令の所為でこの手段を取らざるおえないのだ。

「……ラ、ライダー、なぁ、おい……」

アサシン達がこぞって自分に視線を合わせているのを感じ取ったのか、ウェイバーはライダーに縋り付くように話掛けるが、そのライダーは未だに酒を飲んでいる。臨戦態勢を取っていないのは彼だけであった。

「こらこら坊主。そう狼狽(うろた)えるでない。宴の客を遇する度量でも、格は問われるのだぞ」

「あれが客に見えるってのか！？」

少なくとも、ランサーとそのマスターのようにたまたま宴に乱入してしまった類にはウェイバーには見えなかった。例え客だとしても、イチャモンつけにきた客か、どこかの極道などの関わり合いになりたくない類いの客である。

「なぁ皆の衆、いい加減、その剣呑な鬼気を放ちまくるのは控えてくれんか？見ての通り、連れが落ち着かなくて困る」

だが、ライダーはその様な客であれ、歓迎するかのような口振りである。

「器が広いな。征服王」

「当然だ。王の言葉は万民に向けて発するもの。わざわざ傾聴しに

来た者ならば、敵も味方もありはせぬ。それとキャスターよ、余はどの様な者であれ、同じ夢を懐いて付き従う者なら、いつでも家臣に加えるが？」

「お断りだ」

２度目の勧誘に失敗したライダーは、アサシンを見据えながら手元に残っていた唯一酒を酌める柄杓で酒を汲み取って、アサシン達に差し出すようにして掲げる。

「さあ、遠慮はいらぬ。共に語ろうという者はここに来て杯を取れ。この酒は貴様らの血と共にある」

それへの返答は言葉ではなく、行動によって示された。風を切る音が聞こえたかと思えば、柄杓は頭を落とされてワインをぶち撒ける。

「……――――余の言葉、聞き違えたとは言わさんぞ？」

始終静かであったライダーの声が、変質した。しかし、アサシン達はそんな事に気付きもせずにライダーをあざ笑うかのようにクスクスと笑っている。

「『この酒』は『貴様らの血』と言った筈――――そうか。敢えて地べたにブチ撒けたいというならば、是非もない……」

風が吹き込んだ。ただ風が吹き込んだだけなら、別に珍しくも無い日常的に起きる現象だ。しかし、窓も扉も閉じられている玄関ホールでは、起きえない現象であった。それに、風は１１月の冷風ではなくて夏に吹くような熱風であり、カラッと乾いた風であり、砂

塵を伴った風であった。その風は、ライダーを中心として吹いていた。

「では、余以外の王に聞こうか。――――そも、王とは孤高なるや否や？」

渦巻く熱風の中心に立っているライダーは、いつの間にか英霊の本来の姿である戦支度に身を包んで。アーチャーとセイバーに問う。

その問いにアーチャーはただ失笑するだけで無言の返事をし、セイバーは答えた。自分が歩んだ道を王道とするならば、間違えようのない解答であった。

「王たらば……孤高であるしかない」

「ダメだな！まったくもって解っておらん！そんな貴様らには、やはり余が今ここで、真の王たる者の姿を見せつけてやらねばなるまいて！」

ライダーが、風が、とうとう現実を浸食し、あるべき場所へと塗り替えた。

「そ、そんな……ッ！」

ソレを理解し、驚愕の声を漏らしたのは3人の魔術師。

「固有結界――――ですって！？」

照りつける灼熱の太陽。晴れ渡る蒼穹の彼方、吹き荒れる砂塵に霞む地平線まで、視野を遮るものは何もない。

固有結界とは、最も魔法に近いと言われる魔術。自分の心象風景

での結界で現実を塗り潰し、自分の世界を作り上げる大禁呪。その力は精霊と一部の高位な魔術師のみが行使可能とされている。世界の延長である精霊以外が行使すれば、世界からの修正力で長時間の行使は不可能だが。

「そんな馬鹿な……心象風景の具現化だと……魔術師でもないのにか！？」

「もちろん違う。余1人で出来ることではないさ」

誇らしげにライダーは言う。

「これはかつて、我が軍勢が駈け抜けた大地。余と苦楽を共にした勇者たちが、等しく心に焼き付けた景色だ」

世界の変転に際して、位置関係すらも変転させられていた。取り囲んでいた筈のアサシン達は遥か遠方にかためて配置され、ライダー以外のサーヴァント3人とマスター4人はその反対側に位置する場所に配置された。ライダーはその2つの集団のちょうど中間におり、たった1人でアサシン達に向き合っていた。

否、本当に1人だろうか？目を凝らせば、徐々にだが砂塵による影と思っていた物が実体と色を持ち始めたではないか。

「この世界、この景観をカタチにできるのは、これが我ら全員の心象であるからさ」

一騎、また一騎と姿を現したのは騎兵であった。人種も装備もまちまちではあったが、共通することもあった。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

そう、その全てが、聖杯という冬木の奇跡を持って7体までしか呼ばれるはずのサーヴァントである存在であった。

「見よ、我が無双の軍勢を！肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友（ほうゆう）たち。

彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！イスカンダルたる余が誇る最強宝具――――『王の軍勢（アイオニオ・タイロイ）』なり！！」

ランクＥＸ対軍宝具。独立サーヴァントの連続召喚。まさに戦争に相応しい宝具であった。

なんと壮大で、なんと強大な力を持つ宝具であろうか。同じ夢を見て、同じ場所を目指し、同じ王を掲げて世界を征服しかけた最強の軍勢が、ここに蘇ったのである。中には、志半ばで倒れた者も居たであろうが、夢と王に捧げた人生に悔いなどあろうはずがなく。王が遠征をすると宣言すれば、英霊の座から自らの意思で駆けつける忠臣だけで編成された軍勢の士気は常に最高潮であった。

その軍勢の中から、乗り手の居ない馬がライダーに駆け寄る。

「久しいな、相棒」

ライダーは満面の笑みを浮かべながら、愛馬の首を抱きしめる。『彼女』は、後に神格まで与えられ崇拝された伝説の名馬ブケファラス。彼女もまた、王であり乗り手であるイスカンダルの招集に駆けつけた英霊の格を持つ存在である。

「王とはッ――――誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉！」

ブケファラスの背に跨ったライダーが声高らかに謳い上げ、居並ぶ彼の英霊達は一斉に盾を打ち鳴らして応える。

「すべての勇者の羨望を束ね、その道標として立つ者こそが、王。故に――――！」

圧倒的な自信と誇りを胸にライダーは宣言する。

「王は孤高にあらず。その偉志は、すべての臣民の総算たるが故に！」

『然り！然り！然り！』

一糸乱れずに英霊達は王の言葉に是と返す。過去、現在、未来、どの時間でも、ここまで王と同じ夢に生き、忠義する軍勢は存在しないであろう。

英霊達は斉唱を終えると、皆一様に王の次の言葉を待つ。

「さて、では始めるかアサシンよ」

獰猛な笑みをしたライダーは、王の言葉を阻み、王の酒を拒んだ狼藉者に対して、後は行動するしかないと考えていた。

「蹂躙せよ！」

起こすべく行動はその一言で十分であり、雄叫びを挙げる。

『ＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ！！』

戦い。そう言える程のモノではなかった。能力で言えば、一対多

であったが故に、アサシンはあっさりと鏃型陣形にのまれて消えてしまった。

『――――ウォオオオオオオオオオオッ！！』

勝ち鬨の声が湧き起こる。王に捧げし勝利を誇り、王の威名を讃えながら英霊達は役目を終えて元居た場所へと還っていく。

それに伴って、固有結界も解除され、宴の会場であったアインツベルンの城の玄関ホールにアサシンを除いた全員が元の位置に戻った。

「――――幕切れは興醒めだったな」

ライダーをそう言うと虚空を切り裂いて『神威の車輪』を取り出し、自身のマスターを乗せて去っていった。

「主催者が先に帰るな……。まあいいか」

キャスターが呟き、突然下を指差す。

「では、次に会う時は剣を交えようとするか」

キャスター、セイバー、アイリスフィール以外は、いつの間にか広がっていたキャスターの影に飲み込まれて消えた。

「……どういうつもりだ。キャスター」

「なに、今戦われてしまうと都合が悪い。だから、全員に強制的に帰ってもらった。まあ、ランサーとそのマスターが消えなければそれで良いんだがな」

笑いながらそう言い、キャスターは徐々に影に沈んで行きながら続ける。

「救うのは褒めた讃えられる事だろう。だが、人間は醜悪な面もある。俺は救った相手に殺されそうになった王女を見た事がある。騎士王、お前もそうなるかもな」

最後だけは、真剣な顔をして忠告とも脅しともいえない言葉を言ってキャスターは完全に影の中へと消えた。

宴3（後書き）

おまけ　注意：シリアスぽかったのに、それが跡形もありません。

「ねえ、セイバー」

「（もぐもぐ）なんですか、アイリスフィール？（むしゃむしゃ）」

「いくらもったないからって、キャスターが置いてった料理を食べるのは止めた方が良いと思うのだけれど……」

そう、セイバーはキャスターが置いて行った料理の残り物を凄い勢いで食べているのだ。

「アイリスフィール！確かに、キャスターが用意した時点で怪しさ満点の品々です。しかし、こんなに美味しい料理を私は捨てるなんてできません！

もし、捨てろと命じるつもりなら、切嗣に言って令呪でも使って下さい！私の時代では、戦争中にこんなに良い物を戦地では食べられなかった！！」

魂の叫びであった。

「……（勧められて一口食べたのだけど、私にはあまり合わなかったのよね）」

間桐邸（前書き）

感想　教授様、ニコラス様
ありがとうございます！

間桐邸

「マスター、準備はいいか？」

「ああ、問題無い」

宴から一夜明け、キャスターと雁夜は間桐邸の門前に居た。時間にして午前5時ちょっと過ぎで、まだ出歩いている人はいない。

「間違っても、バーサーカーから離れるなよ」

「解っている。取引を忘れるなよ、キャスター」

「勿論。個人的にも、気に入らんからな。ただの自己満足だがな……」

そう言うと、キャスターは間桐邸に張ってある結界に触れ、破壊した。

「脆いな。まあ、楽な方がいいか」

「急ぐぞ、臓硯が何をしでかすか判らないからな」

雁夜はバーサーカーを実体化させるとズカズカと間桐邸の敷居に踏み込んで行く。バーサーカーとキャスターもそれに続くのだが、キャスターはバーサーカーに何の変哲もないナイフを渡す。狭い室内で使いやすい武器としての選択である。

間桐邸に踏み入ったが、誰も応戦するべく出てくる気配がまったくない。間桐邸に居る人物は3人だけでおり、その内の1人は雁夜

が救おうとしている桜であるので間桐の戦力外である。残る二人は臓硯と雁夜の兄である鶴野だけである。尤も、間桐邸の地下にはおびただしい数の蟲がひしめき合っており、それを使役すれば雁夜だけなら、雁夜よりも魔術師の才能のない鶴野でも簡単に殺せるのだが。

だが、雁夜はサーヴァント2人を従え、しかも身体能力も魔力量も増大させている。負ける要素はゼロではないが、勝ち目は十分すぎる程にある。恐れずに雁夜は桜が居るであろう地下室を目指す。

「カッカッカッ。どんな乱暴な客かと思ったら、雁夜ではないか？」

皺の深い小柄な老人が、その行く手を阻むべく立ち塞がる。間桐臓硯だ。桜を現在苦しめている元凶であり、雁夜が最も憎む相手である。時臣とは違って、魔術を識ったその時から憎しみ通している長い長い間の憎しみの対象。

「お前を殺して桜ちゃんを助ける！バーサーカー！」

その貧弱な体躯にバーサーカーはナイフで斬り掛かり、臓硯を両断する。しかし、臓硯の体は斬られると同時に体の輪郭を崩して蟲となった。

「いきなり斬りかかるとは、教育がまだ手優しいモノじゃったようじゃな」

カラカラと笑いながら、先程とは別の場所に姿を現す。

「妖怪が……！」

ソレを見て雁夜は憎々しげに吐き捨てる。いくら強力なサーヴァ

ントを2体従えていても、届かなければ意味は無い。おそらく臓硯の本体は安全な場所で見ているのだろう。

「しかし……いったいどの様な魔術を使って、雁夜をここまでの魔術師に仕立てたのだ？少し前まで死に損ないのような状態であったというのに」

臓硯は興味深そうに言うと、雁夜をじっくりとそれこそ嘗め回すかのように見る。雁夜の状態はそれこそ奇跡でも起きない限りは、今の状態はありえないのだ。改造を施した臓硯だからこそ解る。まず、雁夜が苦痛無しでバーサーカーに魔力供給し続けるのが不可能なのだ。元々の魔術回路が生成する魔力では足りず、刻印虫の疑似魔術回路の補助を得て初めて十分な供給が可能になるのだ。他にも、頭は白髪のままではあるが、急激な改造の悪影響で悪くしていた左半身は完全に健康な状態になっている。

「体を丸ごと変えた」

キャスターのその一言で、臓硯は目を限界まで開けて雁夜を見る。

「ほうほうほう。ダメになったら、新しいのに代える。人は似たような事を考えるモノじゃな」

ニタァと張りつけたような笑みを浮かべて、今度はキャスターを見る。

「お前と一緒にするな。あくまで治療の手段にすぎない」

そう吐き捨てると、今度はキャスターが臓硯に斬りかかる。

「カカカ！無駄じゃ無駄」

嘲笑い、斬られると同時にまた形を崩そうとしたが、振り下ろされる槍に対してはそれこそ無駄であった。振り下ろされた『捩花』の真価の発揮は、追従する波濤による一撃にある。波濤は対象を圧砕、両断する。槍の一撃だけであったのなら、蟲はバラけるだけで難を逃れたであろう。しかし、波濤の追撃によって蟲は潰された。

「おお、怖い怖い。相性が悪いのう。目的は桜であろう？しかし、アレは大事な間桐の血を繋げるモノ。そう易々とは渡せんのう。こんな事をしている暇があったら、敵のサーヴァントを倒したらどうじゃ？雁夜よ。桜は今も苦しんでおるぞ……カカカ！」

更に姿を現して蟲を潰されのを避けるためか、臓硯は今度は声だけ響かせる。

「他にも目的はある。失せろ、蟲が」

「わしは雁夜に話掛けておるんじゃが？部外者は黙っててほしいのう」

「今は欲しいモノを手に入れたら、特に何もせずに帰ってやる。気が変わらないうちに、その不快な声を出すのはやめろ。一匹残らず潰すぞ！」

「まったく、話しの解らん英霊じゃな。まあよい。雁夜、必ずや聖杯を掴むのだぞ、キャスターの裏を掻いてでもな」

最後に一際不快な笑い声を上げると、臓硯の声はそれっきり聞こえなくなった。だが、ねっとりと纏わり付くような視線はまだ続い

ており、監視されているのは明白であった。

「……地下室、いや、蟲蔵はこっちにある」

そう言うと雁夜は隠されている扉を開いて、蟲がひしめき合っている場所に足を踏み入れた。

蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲、蟲。階段の下の床一面は、一カ所以外はすべて蟲に埋め尽くされ、1人の女の子――――つまり桜が――――蟲に犯されている。目から光は消え、まるで死んでいるかのように桜は蟲に身を委ね、ずっと天井を見ている。その視線は、体が動くのに合わせて動いているので、意識せず、漠然と前を見ているだけだった。

「桜ちゃん！」

「おじ……さん……？」

真っ暗であった桜の目に僅かに理性の光が灯るが、依然として深い絶望しか瞳は写していない。

「おじさんが、今日教育して下さるのですか？」

「違う！助けに来たんだ！」

反射的に雁夜は叫び、蟲を踏んだりするのを厭わず桜を助ける為に進もうとするが、キャスターに腕を掴まれて止まる。

「何をする、キャスター！助けるのは取引の内容だ！」

「よく見ろ、首に虫が一匹陣取っている」

キャスターが指差した先の、細くて白い桜の首筋に、一匹だけ他の虫とは見た目からして違う虫が陣取っていた。それは雁夜も知っている虫であった。『翅刃虫（しじんちゅう）』肉食虫であり、猛牛の骨であろうと容易く噛み砕く顎をもつ驚異の虫であった。使う機会が無かったが、雁夜は一時その虫を視蟲と共に虫使いとして臓硯から託された魔術師としての武器であった。

その虫の顎は、桜の頸動脈をしっかりと捉えている。それが意味するのは、警告。「桜を助けたいのなら、聖杯を持って来い」そんな幻聴が、雁夜には聞こえた。

「下手に近付けば、虫に頸動脈を噛み切られて失血死。子供では数分と持たずに死ぬな」

「脅しだけのはずだ……。易々と桜ちゃんを殺さないはず」

「願望だな。本気で、もう要らないと考えているかもしれんぞ？」

「そんなはずはない！臓硯は桜ちゃんに優秀な間桐の子を産ませようと……」

「優秀な間桐なら、俺の目の前に居るが？」

「え……？臓硯が、そんな事を……」

雁夜の体はキャスターが作った物だが、間桐の血は間違いなく流れている代物である。そうでなければ、雁夜の魂は体に馴染まなかったであろう。間桐臓硯は、それを見抜いていた。

本家の血が流れる男で、優秀な魔術師の家系の女に子を産ませるのは間桐がずっとやってきた事だ。本音とすれば、それを続けた方

が間桐の血は色濃く残り易い。わざわざ遠坂の者を改造して産ませるよりもずっと良い。そして、優秀な本家の血を引く男と、改造し掛けの娘では、男の方に天秤が傾く。つまり、桜を目の前で殺し、同時に雁夜の心も殺して、雁夜の体だけを手に入れるのも選択肢にあるのだ。最悪、生殖能力さえ残っていれば良いのだ。

目に見える警告さえあれば、雁夜の方から退くであろうと予想し、実際に雁夜は退こうとしていた。しかし、そんなムカつく結果は、キャスターが意地でもさせなかった。

やるべき事が解ったキャスターは、迷いもせずに行動に移した。まず、雁夜を気絶させ、拠点へと転移させた。次に、桜のすぐそばに降りるように跳び降りた。キャスターが跳ぶと同時に、翅刃虫が桜の頸動脈を噛み切って、血が勢いよく噴き出したがキャスターは動じずに翅刃虫を引き剥がしてから、影からある薬を取り出して注射した。効果はすぐに現れた。勢いよく噴き出てた血はすぐに止まった。

キャスターが使った薬は『補肉剤』。脳以外なら、再生させることのできる薬である。

「中にも、居るな」

体の内側に居る異物を感じ取り、キャスターはそれを直接手で引きずり出した。一匹、また一匹と虫を引きずり出し、合間に補肉剤での治療を挟み、ついには全ての虫をキャスターは取り出した。頸動脈を噛み切られた時の出血で気絶していた桜を転移させてから、次の行動を始める。

「間桐臓硯、取引をしないか？」

魔術師殺しの考察（前書き）

感想　コージー様、コクイ様、カナメ・カノリ様
ありがとうございます！

魔術師殺しの考察

衛宮切嗣は新都駅の安ホテルで1人で情報の整理をしていた。自分、使い魔、舞弥が手に入れた情報を冬木市全域の白地図にまとめて記入していた。

聖杯戦争は、昨晩やっとサーヴァントの1体が脱落し、本格的に動き出したのだ。これまで以上に気を引き締めなければならない。ただ、アサシンが脱落する経緯は切嗣には完全に理解できる事ではなかった。ライダー、アーチャー、キャスター、ランサーがアインツベルンの城に集結して酒盛りしたなど、前例のない出来事であった。その状況であったなら、乱戦になってもう1体ほど脱落してもおかしくはなかったが、キャスターによって最後は強制解散にさせられたと聞き及んでいた。

キャスターによる強制解散。それが一番不可解であった。日本刀を主に使っているのに、名乗っているのは日本名ではない。最弱と言われるクラスに居ながら、ランサーを抑える程の武芸を身に付けている。英霊でありながら、輝きがほとんど見られない。アーロニーロ・アルルエリという名の魔術師は、文献を漁っても見つからなかった。今回も合わせて、3度もセイバーを助けるような行動をした。転移を使える。

キャスターの情報はどれも不可解なモノであり、いったい何処の英霊かさえも予測のできない相手であった。真名が解らない相手はアーチャーとバーサーカーもそうであったが、キャスターはこの2体とも違う感じがした。

まず、切嗣の経験則からいわせれば、魔術師は明確な目的意識を持っており、それが強烈である程に捧げる力は尋常ではなくなり、結果を作り出す。例外もいたが、それは極めて少ない例であった。聖杯戦争に参加している魔術師なら、目先の目的は聖杯であろう。しかし、勝つ為にセイバーを助ける要因がまったくない。サーヴァ

ント同士での相性を考えて、自分に有利な展開に持っていこうとするなら、セイバーが一番邪魔になる。
ライダーを倒させる為にアーチャーを助け、アーチャーを倒させる為にバーサーカーを助け、バーサーカーを倒させる為にランサーを助ける。これならばまだ幾分かは理解できる。少なくとも、上手く行けば倒せるであろうサーヴァントだけと戦えば良いのだ。
セイバーを助ける可能性があるのは、戦略を度外視して、私情を持ち込んだ場合しか考えられない。魔術師として戦いに臨む心構えでは、それは三流のすることだ。しかし、生前にアーサー王に縁のある英霊だったら？王と崇めるセイバーを前にして助けてしまう可能性もある。だが、セイバーはキャスターに心当たりがまったく無いと、アイリフィールはセイバー本人から聞いたらしい。あそこまで特徴的な格好がサーヴァントとしての戦支度なら、本当に該当する者がいないのであろう。尤も、狂信者の可能性は無くもないが……
キャスターはどの英霊よりも難敵になると切嗣は予想していた。謎が多いのもそうだが、本領を発揮されればクラスでは有利なはずのセイバーでも倒される危険がある。それに、聖杯戦争はサーヴァントを倒すだけが勝ち方では無い。
転移ができるのなら、サーヴァントを別の場所に転移させるだけで一緒に行動しているマスターを狩れる。令呪を使えば、回数制限があるもののサーヴァントを転移させる事は可能であるが、キャスターは3回以上転移を使える可能性が非常に高いので、令呪の無駄使いになる可能性が高い。
他にも、マスターが未熟な魔術師というのも大きい。昨晩開かれた宴に出てきたキャスターのマスターと思しき人物は、アイリスフィールの見立てではたまたま聖杯戦争に参加した一般人であった。つまり、魔術師として格の上の者とキャスターが契約すれば、キャスターはステータスの上昇も十分に有り得る。しかも、かつては魔術師として成功を収めた人物が一般人の使い魔としての扱いに不満

を持つ可能性が高く、宴の最後にランサーのマスターを気遣う発言をしていた。ランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは天才と言われる魔術師。ソレを知っているかはどうかは知らないが、マスター候補の可能性が高い。だが、ケイネスと契約されれば魔術師殺しとしては狩り易くなる。前情報と数少ない観察による情報で、ケイネスは典型的な魔術師と解っている。もしも、ケイネスと契約するような事があれば、元々狙う予定であったマスターに引き金を引くだけだ。キャスターの動向は要注意として考えを締めくくる。

人間でも、気に掛かる存在はいる。言峰綺礼、アサシンの元マスター。

聖杯戦争においては、サーヴァントを失ったマスターはほぼ無力と考えてもいいが、綺礼だけは例え令呪を全て失おうと油断できないと切嗣は考えていた。たった一度だけだが、冬木ハイアットホテルの向かいの建築物での襲撃は自分を狙ったものだったのだ。その時点で自分が狙われる要因が無かったはず、なのにである。切嗣の常套手段は“相手の裏を掻く”に終始するのに、その表も裏も解らないのだ。それでは、魔術師殺しとして十全の力を発揮できない。現時点では、殺す必要性はないが、サーヴァントだけが生き残った場合――現状で一番考えられるのは、自分の狩りよっての結果――が出てくると話が変わってくる。サーヴァントを失えば、御三家でなければ一度は令呪を失うが、聖杯による再分配によって再びマスターになれる事もある。極稀に、新しいマスターが生まれる事があるが、サーヴァントだけを失ったマスターが居れば、そちらに優先的に分配されるであろう。

そこまで考え切嗣は、困惑した。なぜその様な事を解っているのに、今はマスターでも無いような人物を警戒している？と……。キャスターに関する思考は有益だと思えたが、綺礼に関する思考は無駄にしか感じられなかった。思った以上に自分は疲労しており、思考にムラが出てきたと思い。切嗣は７０時間もしていない睡眠を取

る事にした。

「ここが……ふぅん。また随分と不思議な建物ねぇ」

それが日本家屋を見てのアイリスフィールの第一の感想であった。しかし、生まれてこのかた城以外の建築物に寝泊まりしたことの無いと思えば、仕方がないだろう。尤も、アイリスフィールが見たのは今どき珍しい純和風で木造平屋の造りの家なのだが。

「お2人には、今日からここを活動の拠点としていただきます」

案内をした舞弥は事務的にいうと、家の広さの分だけ多くなっている鍵束を差し出す。

「あ、それはセイバーが預かっておいて」

「――――解りました。アイリスフィール」

セイバーひっかかるモノを感じたが、特に言及せずに鍵束を受け取る。どれも近代的だが、ひとつだけは妙に古めかしく感じる鍵があった。

「マイヤ、この鍵は何でしょうか。他のものとは随分違いますが」

「庭にある土蔵のものです。古いですが、立て付けに不安がないのは確認済みです」

その土蔵の周り、そして屋敷全体の状況を思い返したのか、舞弥

は表情を曇らせて続ける。

「つい先日、名義を買い取ったばかりなもので、申し訳ないのですが、見ての通り何の準備もありません。生活の場としては相応しくないかもしれませんが……」

「構わないわ。とりあえず雨風さえ凌げるなら文句はいいません」

結界を破壊されて侵入が容易になった森の城に比べれば、隠匿の観点から言えばかなりマシだとアイリスフィールは解っている。それに、結界の術式を確認したら修復には2日はないと万全にできない程の壊滅的状況だったのだ。

「――――それでは、私はこれで」

一礼すると、舞弥は2人を残して車に乗って走り去った。

「さて、それじゃあセイバー、新居の点検といきますか」

「そうですね……」

まるで子供のようにうきうきと嬉しげに、アイリスフィールは半ばお化け屋敷かのような家を見て回った。セイバーはその後に付いて歩いた。その途中で、アイリスフィールは自身に構造的欠陥があるとセイバーに打ち明けた。その発言を含む、全ての行動がその場に居ない人物にまで届いているなどとは思いもしなかったであろう。

遠坂邸（前書き）

感想　かにかま様、コクイ様
ありがとうございます！

遠坂邸

午後１０時。その時間は、キャスターが襲撃の予告をした時刻である。無論、時臣は座して待つだけなどしなかった。出来得るだけの準備――その中には付近住民の避難も含まれる――をして、人払い、防音の結界も遠坂邸を中心にして新たに敷設した。アーチャーの攻撃は爆音を発し、さらには連続での攻撃になるが故に細心の注意が必要であった。

勿論、時臣は必要とあらば自身も戦う覚悟で準備をした。自分が魔術師見習いから、魔術師になったときから魔力を込め続けている宝石や、魔術礼装である柄頭に大粒のルビーが？め込まれたステッキを携帯していた。

アーチャーもやる気十分なのか、午前中は何所かへと行っていたが午後からはずっと遠坂邸に居た。召喚してから最長時間ではないだろうか？一日に遠坂邸に居た時間は。

「王よ、そろそろ時間です」

柱時計の時間を確認し、時臣はアーチャーに告げる。その言葉にアーチャーは頷くと、笑みを深くして立ちあがり、出迎えの為に霊体化して屋根に上がる。愉しみなのだ。どの様な手札を持ってして、格上たる自分に挑むのか。この世のすべてが自分の庭で、その中で英雄として名を馳せた人物が只者で有る筈が無い。英雄王ギルガメッシュにとっては、他者は雑種であると同時に道化なのだ。

「時間通りに来ているな。雑種」

遠坂邸の門前に、白一色のフリフリのついた服に身を包んだキャスターは立っている。その傍には、反対色の黒の鎧と霧に身を包む

バーサーカーも立っている。自身に挑む者と、不敬を働いた者。どちらも蹴散らすべき対象であり、それ以上でもそれ以下でもない。

「よもや、狂犬を引き連れるだけで覆せる戦力差と思っているのか？だとしたら、見当違いも甚だしい」

「いや、勘違いでもなんでもない。宝具の射出さえ凌げる手段があれば、後はお前に届けば勝てる」

その一言は、アーチャーは鼻で笑う。バーサーカーは確かに『王の財宝』を凌ぐのには十分役に立つだろう。しかし、自分の宝具はもうひとつある。

「では、ここまで来てみるがいい」

その言葉と共にアーチャーの背後が揺らめき、剣２３、槍２０、斧９、槌１２、計６４挺のもの宝具が展開され、轟音をたてながらキャスターとバーサーカー目掛けて射出された。どれも必殺の威力を持ち、ひとつでも中れば後続の宝具を避けるのは不可能であろうから、結果的に一撃中ればそこで終わってしまう。例え避けられても、射出する数を増やされれば、避けも捌けもできなくなる。故に、勝つ為にはその数に達する前に近付き、アーチャーを斬り伏せるしか道は無い。

「■■■■■■■■！！！」

「破道の四　白雷」

バーサーカーはキャスターから借りている宝具である刀を振るって、迫り来る宝具の雨を逸らさせる。キャスターはその後ろから先

に軌道が逸れるよう掩護をする。キャスターの射撃の特徴は数の多さと威力にある。相手の隙をついての精密射撃などなく、甘い狙いでの乱射に近い。コンビネーションなどない、暴走となんら変わらない動きのバーサーカーに、キャスターが合わせているだけだが、それでも即席同然のペアの動きでも捌くのには十分であった。

「ほぉ……」

そして、バーサーカーが一歩踏み出した。たった一歩だったが、次にはさらに一歩進み、その次は先程より短い間隔で踏み出した。

「だが、いくら地を進もうがここまでは届かんぞ？」

地の利は完全にアーチャーにある。場所がマスターの拠点というのもあるが、それ以上に高低差が大きかった。キャスター達は距離を詰めるのも重要だが、同じ位に高低差を無くす必要もある。素直に遠坂邸内の階段を使う必要がないとは言え、普通なら近付くだけでも苦労するのに高低差も埋めるのは非常に厳しい。そう、普通なら……

「■■■■■■■■！！！」

「なぁに……？」

前へ前へと愚直にも感じられる程に一直線に進んでいたバーサーカーの足が、突然なにも無い場所を踏み締めて坂を上るかのように進み始めた。コレにはアーチャーも驚いた。『王の財宝』に納めれている宝具の中には空を飛ぶ、もしくは飛べるようにする宝具は数こそは少ないものの確かに存在する。だが、空気を固体であるかのように踏めるようにする宝具は無い。もしかしたら、把握してない

だけで存在はするかもしれないが。それの持ち主はおそらくは、キャスター。バーサーカーが持っていたのなら、倉庫街で使って直接斬り掛かっていたであろう。

「成る程な……高みに立つ者への足掛かりは有るというのか。だが、障害物の無い空中ではいい的だ」

ただ直進していたアーチャーの射出宝具が、軌道を直線から曲線に変えてバーサーカーとキャスターに襲いかかる。しかも、どれも曲がり方が異なっている。これまではただ射出されるタイミングとスピードを見れば完全に全ての動きを読めたのだが、ここにきて曲線に変わったことによって、どれも着弾に“ズレ”が生じるようになった。さらに、空中に上がった事によってアーチャーの攻撃できる範囲が広り、結果として射出宝具の数が増えた。

「『虚閃』」

キャスターは不利なる状況を変える為に、左手を掲げるように突き出してアーチャーに中るように虚閃を撃つ。虚閃は宝具を幾つも巻き込みながら突き進むが、E～Bランク相当の宝具は撃ち落とせたのだが、Aランク以上は虚閃を切り裂いてしまう。切り裂かれたり、幾つもの宝具を撃ち落とした虚閃の威力はアーチャーに届く前に随分と削られ、アーチャーの対魔力と『王の財宝』から取りだした武器で簡単に消滅させられた。だが、役目は果たした。

アーチャーが大雑把な宝具の射出に調整を加えようとキャスターが虚閃を撃った付近を見渡したが、忽然と姿が消えていた。

（消えた？）

「■■■■■■■■！！！」

突然の右側からの咆哮にアーチャーは盾を取り出して来るであろう攻撃を防ぐ。盾は間に合い、バーサーカーの一撃を完全に防いだ。

（取った！）

バーサーカーの攻撃が防がれた瞬間に、キャスターはアーチャーの背後に転移して首を刎ねようと未解放の捩花を横に振る。必殺を確信した。アーチャーはバーサーカーに気を取らており、宝具を取り出すのには若干タイムラグがあるのは解っている。確実な手段でも、楽しめる戦い方ではないが、一番危険なアーチャーを倒せる。アーチャーをここで倒しても、あと４体も楽しめそうな相手がいるし、戦い方自体が自分では一方的に潰されるしかないのだから、つまらなくても納得するしかない。

だが、防がれた。ギリギリで透明な何かでできた盾が出現し、捩花を防いでみせたのだ。

「残念であったな、雑種。我が気付いておらぬかったなら、非常に腹立たしい事に貴様は我の首を刎ねておったであろう」

アーチャーはバーサーカーを防いだ盾を見ながら言う。正確にするなら、鏡の様に磨き上げられた盾の内側に映るキャスターを見ながら言う。アーチャーには見えていたのだ。キャスターが転移してきた瞬間、捩花を振る瞬間が。

「戯れは此処までだ」

アーチャーが右手を上げると、それに合わせて宝具が刃先を下に向けて出現する。

「貴様等が立つべき場所は我よりも下だ。異論はないであろう？」

「逃げろ！バーサーカー！」

キャスターの命令でバーサーカーは動きが若干鈍いものの逃げようと屋根から飛び降りたが、遅かった。その四肢へと宝具が突き刺さって地面に縫い付ける。逃げろと言ったキャスターは、転移を使ってバーサーカーの影へと移動して助けようとしたが、鎖が出て来てバーサーカーを縛り上げる。

「では、これより処刑にうつる。我に挑んだ心意気と首を刎ねかけた事に敬意を評して、コレでトドメを刺してやろう」

アーチャーの手に握られたのは、剣であった。しかし、それは異形の武器であった。柄があり、鍔もある、刀身もある。それだけなら、現存する剣となんら変わらないであろうが、刀身が違った。3段階に連なる円柱と、切っ先に当たる部分には螺旋状に捻じくれた鈍い刃がある。

「なりません、王よ！こんな早期の段階に、王の至高の剣たる乖離剣を使うなど！」

使ったとしても、『王の財宝』だけで済ますと高を括っていた時臣だったのだが、アーチャーが事もあろうに乖離剣を出したので止めるべく2階の窓から身を乗り出して屋根の上のアーチャーへの説得を試みたのだ。宝具を曝すのもそうだが、破壊範囲が確実に結界外に出てしまう。

「黙れ！」

時臣は必死に次の言葉を考えていたが、アーチャーの一言で黙ってしまう。
時臣が乖離剣と呼んだ剣は、円柱の三つの刀身を交互に回転させて既にタメの段階に入っており、本気であると窺わせる。滾り溢れる魔力は膨大でおり、どれ程甘く見積もっても対軍宝具以上であると判る。
だが、魔力を溢れさせているのはもう1つあった。ソレを感じ取った時臣は目を疑った。
発生源はキャスターが造っている灰色の光の球体。見ればソレに自分の血を混ぜ込んでいる。血は魔力を通すのに効率の良い媒体であるのは、魔術師ならまず知っている事。では、血を使って造られているのは何なのか？最も単純な答えは効率を高めた魔術、もしくは魔法。そして、乖離剣に対抗するように造られている。

「抗うか！それも良い！
いざ仰げ――――『天地乖離す開闢の星』！」
「『王虚の閃光』！」

両者が放ったのは魔力の束。奇しくも、似たような攻撃であったが故に拮抗しあう。『天地乖離す開闢の星』と『王虚の閃光』では『天地乖離す開闢の星』の方が格が上である。そもそも元となった伝承からして規格外である。天と地を切り分かち、その判別に確たる姿を与えたモノだ。判別としては対界宝具。
それに相対する『王虚の閃光』は、一瞬で有り得ないくらいの敵を門ごと消し去ったくらいである。判別としては対界宝具より劣る

対城宝具。
だが、アーチャーは全力で使ってはいない。なぜなら、全力を出せば今ある世界ごと壊してしまうからだ。それにより、拮抗したまま不安定になり、2人の丁度中間で爆発した。
爆風に煽られながらもアーチャーは依然として悠然と屋根の上で見下ろしていた。対するキャスターは、急激な魔力の消耗によって息も荒く片膝を付く。

「全力ではなかったとはいえ、我の『天地乖離す開闢の星』を相殺したのは誇りに思うが良い」

余裕な態度で、アーチャーは言う。傍から見ても、キャスターにはもう抗う力など無い。勝者たるアーチャーは笑みを浮かべて敗者であるキャスターを見る。

「光栄だ……」

まだ息も整ってないのに、キャスターは無理をして立ちあがる。

「次があれば、また挑むのを心待ちにしておくぞ。アーロニーロ・アルルエリ」

「それは…良い。次があったらな」

笑い、アーチャーは今度こそトドメを刺すべく乖離剣を振り上げる。

だが、振り下ろす先に別の刀がアーチャーへと振り下ろされた。

「狂犬めがあああああああああああ！！！！！」

遠坂邸（後書き）

霊子の足場
分類上は宝具に当て嵌まらない破面としての基本能力。
霊子を固めて足場にでき、壊れたりしない限りは足場として大抵の場所で使える。
基本的には自分の足元だけに展開させて使うが、自分を基点として多少の範囲に展開可能。
壊したり消したりしない限りは使えるので、誰であろうと乗ることができる。

『王虚の閃光』
空間を歪める程の霊圧の塊を放つ
ランクＡ＋＋　種別　対城宝具　レンジ１～９９　最大補足１０００人

遠坂邸２（前書き）

感想　教授様、ｕｎｌｉｍｉｔｅｒ様
ありがとうございます！

遠坂邸2

キャスターは弱い。しかし、それはアーロニーロが弱いという訳ではない。あくまでキャスターとしての座(クラス)に縛り付けられている為に、弱体化している。速さも力も要らない技術であれば、生前となんら変わらないモノを出せる。しかし、大半の技はどちらかが必要であるので生前となんら変わらないモノはほとんど無い。では、そんな状態をどうにかするべくとる選択は？自身による宝具での強化か、他人の手を借りるしかない。楽しむであれば、他人の手はあまり借りたくないが、勝つ為なら躊躇わない。アーチャーはソレを身を持って知った。

黄金の鎧を切り裂き、バーサーカーの持つ2振りの刀――――詫助と鏡花水月――――はアーチャーに傷を負わせる。なぜ四肢を貫かれ、しかも鎖で縛り上げられていたはずのバーサーカーが傷などまるでなかったかのように動いている。

アーチャーにとって判らないのは、短時間でバーサーカーが全快していたことだ。鎖は斬ったりしたのだろう。移動はキャスターが転移させらのであろう。傷だけは、そう簡単に治るものではなかったはずだ。アーチャーの宝具は、筋肉だけではなく骨も斬られている位置に突き刺さっていた。治療魔術でも一瞬で治せる程度の怪我ではなかった。だから、バーサーカーは戦闘不能として気にも留めなかった。

「図に乗るな！！雑種風情が！！！」

なんとか致命傷を避けたのは、アーチャーの幸運によるものであろう。すぐさま『王の財宝』から宝具を射出するが、バーサーカーには足止めにしかならない。

ひとまずはバーサーカーとの距離を取ろうとしたところで、アーチャーは体が自分の意思に反して動き出したのに顔を歪める。２度目の令呪による強制であった。内容は「私（時臣）を連れて逃げろ」

その命令に従いアーチャーはキャスターに襲われて、顔面蒼白になっていた時臣を助け出して『王の財宝』の中から目立たず、なおかつ速度の出るモノを取り出して逃げ出した。その顔は、終始怒りに染まった歪んだ表情であった。

「追撃をはするなよ。バーサーカー」

令呪による命令「キャスターの命令に従え」のせいで、命令に従わざるおえないバーサーカーは走り出そうしていたバーサーカーは足を止める。

「あの速度には追い付けん。それに、仕込みは出来たから行動は筒抜けだ。……お前に言っても無駄だったな」

初めから時臣は雁夜との取引で殺すつもりはなかった。しかし、消耗した魔力を少しでも回復するために時臣を襲ったのだが、それのせいで逃げられた。尤も、捕まえた後に逃げられると捜すのが面倒なので、キャスターは魔力を奪う時に同時にあるモノを時臣の体に仕込んだ。それは、アイリスフィール、ウェイバー、ケイネスにも仕込んである。これで、キャスターは全ての陣営の情報が得られるようになった。

「さて、バーサーカー。お前は、マスターの所に霊体化して戻っていろ。

……何の用だ？間桐臓硯」

「ッカッカッカ！なんじゃ、バレておったか」

庭の隅の暗がりが突然盛り上がり、蟲が臓硯の形になって出てくる。

「言っておくが、まだ出来て無いぞ。完成は明日になる。それとも何か？取引が不服になったか？」

「いやいや、あんな良い取引そうそう無いからのう。取引相手が消滅しないように見守っておったわけなんだ。それに、今回の戦いを見てお主が聖杯を掴んでもおかしくないと思っての。どうかの？わしが受け取る物は、聖杯にするというのは？」

どうせ要らんのだろう？そう続けて臓硯はキャスターに笑い掛ける。しかし、その笑みは腹黒い人物がそれを隠しきれずにする見ている人を不快な気分にさせる笑みであった。

「断る。手に入れた後なら承諾したかもしれないが、俺は確実にしたいんでな」

そう言ってから、キャスターは遠坂邸の中に入っていった。

「道具が随分と偉そうに……。まあ良いかの。あの2人に執着しておる理由は知らんが、あんなモノより良いモノが手に入る。今回は静観と決めておったしの」

1人で呟き、臓硯は再び蟲に変わって姿を消す。

キャスターは遠坂邸の隠された書籍を漁っていた。隠されていた書籍はどれも魔術に関する物であり、知識を後世へと遺すための役割を担っている。本気で自分の一族にしか遺さないつもりで術式が刻まれている――――おそらく読もうとしたら燃え上がるなどする――――モノは捨て置き、聖杯戦争に関する本を捜している。興味はあるが、最優先は聖杯戦争に関する知識、正確に言うなら、聖杯降臨のための儀式の手順と必要なモノだ。

（頼み綱はここしか残っていなんだぞ……）

始まりの御三家である遠坂邸なら、あるだろうと踏んでキャスターは襲撃したのだ。アインツベルンは聖杯戦争の為だけの城に重要な情報は置いていないであろう。間桐邸にはあるだろうが、間桐臓硯はそう易々と見せないであろうし、偽の情報を掴まされる危険が非常に高い。なにより、キャスターとしてはもう臓硯とは関わりたくないのだ。

だが、半分は予想通りで、そのままで見れる物の中には欲しているモノはなかった。聖杯戦争の略歴みたいな物はあったが、肝心な物はない。処分したのか、誰かに預けるなどしたか、元々なかったかはすぐには知る手段は無い。

「直接取り出すしかないか？」

補完するなら、「遠坂時臣の脳から、直接情報を取り出すしかないか？」である。

そこまでしようと思うほどに、キャスターからすれば聖杯戦争は胡散臭いのだ。まず、なぜ英霊をサーヴァントして使役して戦うのかが理解に苦しむ。それに、なぜ始まりの御三家達だけで完結させ

ないのか。余所者にチャンスがあり、泥棒同然に盗られる危険を冒すのか。なぜ周期が存在するのか。万能の願望機と謳いながら、たった14人の願望を叶えられないのか。

そもそも、聖杯戦争に参加する大前提になる勝者は聖杯が手に入る。これ自体が怪しく感じている。なにをもって聖杯と定義しているかは知らないが、最大数で12人倒しただけでなんでも望みが叶うのなら、誰も世の中で苦労なんてしない。こういう旨い話は、どこかで考案者が得をするのが常である。

しかし、それを判断する為の情報が非常に少ない。聖杯によりもたらされた情報は役に立たない。そういう聖杯(モノ)があるのと、必要最低限の常識が与えられるだけで、根本は完全に隠されている。

「まあいい。明日はランサーを襲うとするか」

4時間捜しても見つからなかったので、キャスターは諦めて遠坂邸を後にした。

遠坂邸2（後書き）

怪しさ満点ですよね、聖杯戦争って。奇跡の代価が何かしらないと。

動き（前書き）

感想　かにかま様
ありがとうございます！

動き

遠坂邸陥落。それはすぐに全マスターが知る事となった。元々遠坂は始まりの御三家の一角であるのと、数多の宝具を射出するサーヴァントを使役していたので、使い魔で見張られていた。その使い魔が、突然消えたので全マスターは誰かが襲撃したと思った。しかし、それが判っても誰も直接行こうとは思わなかった。なにせアーチャーは強力すぎる。襲撃者がどのサーヴァントであろうとも、長くは持たないでであろう。勝てる見込みがあるのは、現状ではライダーかバーサーカーくらいでしかない。

だが、マスター狙いでいけば案外いけるかもしれない。サーヴァントを捨て駒し、マスターだけを殺せば優秀な方のマスターとアーチャーが残る。尤も、それは自殺行為なのだが。戦う場所が相手の工房では、圧倒的に相手が有利になる。相手がにわか魔術師でもない限りは、工房崩しなんてモノは正気の沙汰ではない。しかも相手は、冬木の地を代々治めているセカンドオーナーの遠坂家だ。工房の敷設においては、衰退してなければ間桐がようやく右に出るくらいあったであろう。

故に、マスター達は遠坂邸へは新しい使い魔を出すだけに留まった。遠坂が負けるなんてまずないと考えて……しかし、使い魔達の目に映ったのは見覚えのある戦闘痕と、人の気配がまったく無い遠坂邸であった。結果として遠坂邸は陥落していた。新しい使い魔達が現場に付いた時には全てが終わった後であり、結果だけを知ったマスター達は愕然とした。遠坂邸陥落は、アーチャーの敗退を想像させた。

「アーチャーが敗退した？」

今日もキャスター捜しの一環として『神威の車輪』にのって霊脈巡りの旅をしていたウェイバーは顎に手を当てて考えこんでいた。別にアーチャーが敗退したのはマイナスではなく、むしろ勝率で言えばプラスである。自身のサーヴァントであるライダーの最終宝具である『王の軍勢』に勝てそうなのはアーチャー位でなければ不可能であろう。ライダーの実力だけで勝ち抜けるだろう。

そう、イスカンダルは勝利と聖杯を掴むであろう。しかし、それはウェイバーの勝利にはならない。ウェイバーにとっての勝利とは、皆が自分を優秀な魔術師と認める事だ。聖杯戦争に勝利しようとしているのは、手段でしかない。なのに、マスターとして、魔術師として何も出来ていない。せいぜいが魔力提供しかやっていない。それはマスターの義務なのに、それしか出来ないでいる。やった事は川に魔術の名残がないのか調べたのと、キャスターの拠点候補を上げただけである。しかも、どちらも成果は無いも同然の結果であった。

「坊主、具体的な事は解らんのか？」

「ん？あ、ああ。新しい使い魔を送った時には終わってた。多分余所もそうだと思う」

思考の渦に呑まれそうになっていたウェイバーだったが、ライダーに話掛けられて戻って来る。

「……仕掛けたのは、おそらくバーサーカーかキャスターであろうな。あるいは、その両方か……」

「はあ？何を根拠にキャスターが出てくるだよ。バーサーカーは対抗できるみたいだからおかしくはないけど」

「キャスターは勘と言うかだなぁ、あやつならやってもおかしくないと余は思う訳だ。相手が王だろうが、何なんだろうが気後れするような玉ではない」

豪快に笑いながらライダーは言う。

「だとしても、両方はもっとありえない。共闘なんてまずしないだろ」

聖杯戦争はバトルロワイヤル。自分以外は敵であるのが当然である。共闘を持ちかけられても、まず受けないのが普通である。信用できないのもそうだが、手の内をいずれ敵になる相手に晒さなければならなくなるかもしれないのだ。

「たった一回だけならどうだ？アーチャーという危険極まりないサーヴァントを倒す為だけに、連携など考えておらずに、同時に仕掛ける。もしくは、マスターが操られているとかな。セイバーやランサーは自分のマスターがその様な事をすれば反発するかもしれないが、バーサーカーは反発しないだろう」

「……」

有り得ない話ではなかった。足りなければ、余所から持ってきて補うのは魔術師らしい考えであるし、キャスターのマスターは魔術師の様にはウェイバーには感じられなかった。暗示などに抵抗力を持っていなければ操ることは不可能でないし、協力しなければ令呪で自害しろと命令させればいいのだ。

「前者だったら、まだ良いけど。後者だったら、次に狙われるのは

僕達じゃないか？」

「まあ、そうであろうな。余の宝具は最強であるからな。尤も、アーチャーが脱落していればの話になるんだがな」

「なんで脱落していないなんて思うんだよ。相手の工房に攻め入ったんだから、万全の準備をして押し入ったんだろ？遠坂邸が陥落したんだから、アーチャーは脱落したと思うのが自然だろ？」

「令呪を使えば、逃げる事も可能であろう。アーチャーのマスターが瞬時の判断を誤ったり、迷ったりしなければだがな」

たった3回だけの絶対命令権は、単純な命令ほど効果が強くなる。条件によってはサーヴァントのポテンシャル以上の行動も可能にする。その力と、アーチャーの能力を考えれば逃げに徹すれば逃げる事はさほど難しくは無いであろうとライダーは考えていた。

「アインツベルンの城への来訪。間桐邸への襲撃に続き、今度は遠坂邸への襲撃。キャスターは始まりの御三家の拠点に直接足を運んだ事になるのか……」

新たに手に入った情報に、切嗣は1人で安ホテルの一室で頭を悩ましていた。間桐雁夜とキャスターが手を組んで動いている。それを知りえたのは偶然に近かった。間桐邸を監視していた使い魔が、雁夜、バーサーカー、キャスターが間桐邸に乗り込む瞬間を捉えていた。しかし、捉えられていたの1体だけで、複数配置していた他

の使い魔は捉えてなかったので何かしらの手段で隠蔽していたのであろう。
遠坂邸への襲撃は使い魔を潰されたので見れなかったが、結果は知り得た。アーチャーと時臣は冬木教会に逃げ込み、バーサーカーとキャスターはどちらも欠けずに現界している。現界しているサーヴァントの数が減ったかどうかを知る手段が幸いにも切嗣にはあった。
どちらも今すぐにどうこうは出来ない。アーチャーと時臣は初めから監督役と繋がっていたようであったから、今現在時臣を匿っているいるのを問い詰めても無駄であろう。
バーサーカーとキャスターも危険であるが、出来る事は限られている。どちらのマスターも平然と戦場に出て来る事が無いであろうし、拠点に籠られると手が非常に出しにくいのと、その拠点が見つからないのだ。獲物（マスター）が完全に身を隠して居る限りは、魔術師殺しも狩りが出来ない。
出来る事は、セイバーを全快の状態にする。ランサーを退場させるか、『必滅の黄薔薇』を破壊するしかない。だが、バーサーカーとキャスターが共闘しているのでは、最善なのはこっちも共闘するか、サーヴァントを令呪ごと奪って服従させるだ。奪うとするなら、ライダーが好ましい。ライダーの宝具は非常に強力で、セイバーが万全でも勝敗が判らないのでなるべく早く始末したいのだ。
だが、セイバーはそれをよしとはしないであろう。捕虜に戦わせるようなそんな行為は、清廉潔白であるセイバーが納得しそうにない手段だ。尤も、共闘するにしても、奪うにしても現実的ではない。共闘はまずしようなどと他のマスターが考えない可能性が高い。奪うのなら他のマスターの所在を掴めないのでは、遭遇戦に期待するしかない。サーヴァントが消えない限りは殺しても令呪は手に入るが、遠距離から狙撃による暗殺は令呪を奪うのならあまり良くない。折角殺しても、監督役の指示で自分達が令呪を回収する前に死体ごと回収されかねない。確実に奪う為には敵のマスターをサーヴァン

トより先に殺すか、令呪が宿っている部分を切り離す必要がある。その際に、魔術師として戦い、秘術と秘術をぶつけ合わなければならない可能性もある。上手く行かなければ切嗣が死ぬ可能性が高い。

契約する上では、令呪は絶対に必要なモノではないのだが、サーヴァントが暴走したり反逆した場合に最低でも一画は必要である。一画だけであれば、自身の令呪を移せば良いのだがランサーにしてもライダーにしても令呪で強制しなければ従いそうに無い。

「なんにしても、ケイネスの拠点を見つけ出すか、アイリ達が遭遇しないと呪いが解けない、か……」

そう切嗣は呟くと、安ホテルを出て探索にでた。探し求めるのは、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

動き（後書き）

追記　２０１１年１０月１１日　設定と違う部分を発見したので修正。ストーリーには影響無し。

動き2（前書き）

感想　かにかま様

ありがとうございます！

動き2

魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは遜色無しの天才である。家が魔術師の名家である事も加味しても、裕福で――――他人から見れば――――満ち足りた生活をしていた。その人生で、廃工場に不法侵入をした挙句に、そこを仮とはいえ拠点にしている現状は我慢ならないモノがあった。それはソラウもそうであった。その御蔭で、切嗣の捜索から逃れている側面があったりする。実は、宴の際にアインツベルンの城を襲撃しようとしたのは、まともな拠点を手に入れる為だった割合が大きい。城なら自分もソラウも納得できるであろうし、アインツベルンが拠点としていたのだから地の利は悪くなく、むしろ良い方である。アインツベルンの魔術は錬金術とは有名な話なので、マスター同士の戦いではまず負けないという自信もあったが。

しかし、好機と取って襲撃しようと乗り込んだ先では宴が開かれていたせいで何も出来なかったばかりか、キャスターに強制転移させられて良いとこ無しで終わった。その後でアインツベルンの城が外見上は無人になったのを使い魔で確認したのだが、罠の危険性がある為に手出しができずにいた。

そんなケイネスにとって明るいニュースになったのが、遠坂邸陥落である。尤も、それが麗しのソラウの機嫌を良くはしない出来事だった。ソラウの不満はみすぼらしい場所にいるのもそうだが、ランサーが明らかにソラウを避けている事であった。ランサーの魔貌の虜になって、恋する乙女のような状態になっているのだから仕方が無いであろう。

「ランサー、今日こそはその役目を果たせ」

「ハッ」

（昨日も、一昨日も同じ事を言ってなかったかしら？）

壺に入っている魔術礼装を抱えて拠点を出て行くケイネスとランサーを見送ってから、ソラウは使い魔を操って情報収集を再開する。彼女の行動原理はケイネスが勝つ事でなく、ランサーであるディルムッド・オディナが勝つ事である。女として凍っていた、もしくは枯れていた感性に火をつけた。ソレが魔貌による現象であろうとも、ソラウは女として抑えれなかった。

その事実はケイネスは知らない。ランサーにただならぬ感情を向けているのには気付いているが、ソフィアリ家の一員で魔に対する抵抗力を持つ彼女がランサーの魔貌の虜になっているとは思っていない。事実、アイリスフィールやセイバーは、ランサーの魔貌に前にしても抵抗力で無効にしていた。ソラウが持つ抵抗力は十分なモノであるが、抵抗する意思が無ければ効果を発揮しないのだ。

（ランサーどうかご無事で……）

そんな彼女は、死地へ向かっている未来への夫ではなく、その――――魔術師ならそう見るべき――――道具の心配をしていた。

「運が無いな……このままではセイバーとランサーが遭遇してしま

う」

霊体化しているバーサーカーを連れたキャスターは、戦支度の格好では無く昼間にしている格好で路地裏で呟く。アイリスフィールとケイネスの位置情報と、進路を考えた結果である。

ランサーを襲撃予定だったのだが、ランサーの拠点には魔術師とはいえマスターではない女性がいたので、拠点を襲撃するのは止めたのだ。ランサーとの戦いに巻き込まれて、喰っても意味が無い程の損傷を避ける為の配慮な訳だが……

「まあ、問題無いか。その為のバーサーカーだ」

見えないはずなのに、バーサーカーの眼光が鋭くなったのを感じたキャスターは命令を下す。

「実体化しろ。転移で遭遇しそうな位置の近くに行く。セイバーの相手をしてもらうが、殺すなよ」

「アイリスフィール、この闘志は間違いなくランサーです」

「そう……。呪いを解くチャンスね」

「それもそうですが、私にとっては唯一騎士として戦える機会です」

ランサーの放つ闘志を感じ取ったセイバーは、笑ってランサーが

いるであろう方向を見据えている。アイリスフィールは内心穏やかでは居られなかった。切嗣は間違いなく闇の中から見守っており、確実に聖杯戦争の参加者を消すような手段を取るのには判っている。その手段はセイバーの掲げる騎士道とは対極の位置にある手段になる。それはセイバーも判っているだろう。

わざわざ「唯一騎士として戦える機会です」なんて口に出したのは、手を出さないで欲しいという意思表示なのだろう。しかし、「魔術師殺し」がその意志を尊重はしないであろう。

「セイバー……」

「皆まで言わないで下さい、アイリスフィール。判っています。だから、最初から全力で戦います。手を出す前に決着をつけられるように……」

悪辣な手段は止められない。だったら、それが行われる前に事を終えるしかセイバーには手段がない。騎士として正々堂々とした戦いを互いにしたいだけなのだが、その戦いを用意した聖杯戦争という枠組みのせいで、互いにマスターによって不本意な決着の着き方になるところであった。

「やはりお前か、セイバー」

セイバー達が着いた場所は新都に行く為の橋であった。人が普段通る場所ではサーヴァント同士が戦うのは手狭だが、その上にある車道なら十分な広さがある。位置条件からして、ビルのような高層建築物からで無い限りはまず見えないというのも良い。更に、ケイネスが結界を張った事で音が漏れる事も、人が近寄る事も無い。十分な広さがあり、ある程度隔離されたかのような状況は神秘の秘匿をしつつ戦うには持って来いの場所であった。

「ああ、そうだ。互いに悔いの残らない戦いにしよう、ランサー」
「元より、そのつもりだ」
セイバーとランサーは笑い、得物を抜く。
「いざ」
「尋常に」
「「勝負！！」」
セイバーは不可視の剣を振り上げ、ランサーは短長の２つの槍を振るって目の前の敵に向けて最良の一撃を叩き込んだ。
４回の金属音と、４振りの刀がその一撃を防いだ。ランサーの２槍はキャスターが防ぎ、セイバーの剣はバーサーカーが防いだ。突然割り込んできた２人に、セイバーとランサーは驚愕を隠せなかった。
「キャスター……？」
「バーサーカー……？」
それぞれ相手のクラスを確認するかのように言い、意識を切り替えて眼前の相手を敵と認識して一旦は距離を取る。
「なんのつもりだ、キャスター。騎士の戦いに横槍を入れるとは」
「騎士？それがどうした。高潔な精神な素晴らしいだろうな。だが、

今の戦いはなんだ？聖杯戦争だ。戦争では横槍なんて日常茶飯事だろうに。それとも何か？マスターを狙って欲しかったか？」

「……」

キャスター達がマスター狙いの戦いをしていれば、セイバーとランサーはそれこそ手出しが出来ない内に敗北していた。やろうと思えば、バーサーカーと2手に別れてそれぞれのマスターを殺すなんて造作も無かったであろう。

「それではつまらん。だから、わざわざこうして止めるように横槍をいれた訳だ。バーサーカー、もういいぞ」

キャスターの言葉で、それまで動きを見せなかったバーサーカーが咆哮を上げてセイバーに斬りかかる。振るうのは2振りの刀。それがセイバーを斬り裂かんと風を斬りつつ肉薄する。

「セイバー！」

「余所見をするな。続き、という訳ではないが存分に闘おうか」

まるで倉庫街での再戦かのような構図になった。セイバー対バーサーカー、ランサー対キャスター。違うとすれば、キャスターとバーサーカーが手を組んでいる事であろう。

「クッ！」

バーサーカーの攻めは二刀流である利点である手数が多いのを活かした、反撃の隙を与えない終始攻めにまわる狩人のような戦法であった。弱点としては、動きが多くなると体力の消耗は比例して多

くなり、動きが鈍ったり、攻め切れなければ息切れを起こして途中で攻撃の手を緩めざるおえない状況になる。それは、人間であった場合の話だが。サーヴァントの場合は、魔力が尽きない限りはなんら問題無い。マスターである雁夜が、以前のままであれば下手をすれば途中で死んでいたであろう。しかし、雁夜はバーサーカーに十分な魔力提供を行えている。自滅は今のままなら有り得ない。

前回の二の舞であった。魔力放出のスキルでセイバーはなんとかバーサーカーの猛攻を防いでいるが、それが何時まで続くかは判らない。バーサーカーが簒奪の宝具以外を使えたら、使わした時点でセイバーは負けてしまうかもしれない。

（如何にか……如何にかできないのか！？）

手が無い訳ではない。剣を不可視にしている宝具である鞘である風王結界（インヴィジブル・エア）の応用である風王鉄槌（ストライク・エア）を使えば不意打ちを叩き込める。しかし、未来予知に近い彼女の直感がそれは危険だと告げている。たった一撃叩き込んだところで、バーサーカーが倒れ伏すなど無いであろう。

「何をやっている！キャスター如きに時間をかけるな！」

ケイネスは自分のサーヴァントを叱りつけるように怒鳴るが、それは無意味でしかなかった。ランサーは白兵戦に必要な俊敏と筋力においてはキャスターを上回っているが、それ以外は劣るか同等だ。

「Ｓ（斬）ｃａｌｐ！」

自分のサーヴァントを愚鈍と決め付けて、ケイネスは壺の中から

出していた自身の魔術礼装の『月霊髄液（ヴォールメヌドグラム）』で掩護を開始する。『月霊髄液』は、ケイネスの――魔術師としても稀有な――2重属性である風と水が得意とする流体操作を遺憾なく発揮できる攻守万能の魔術礼装である。常温で液体として存在する金属である水銀を使う事によって、攻撃の際にはその重さと高圧、高速で発生する運動エネルギーで超高圧水流カッターかのような斬れ味を発揮し、防御においては厚さ1ミリ以下であろうとも、魔力で圧搾されれば鋼鉄となんら変わらない固さを発揮する。そして、最大の利点は液体であるから形状は変幻自在。攻撃は鞭のようにしならせて遠方の敵を攻撃できれば、槍ようにして近くの敵を串刺しにもできる。防御では全方位からの攻撃であろうとも、球状にすれば相手の攻撃が『月霊髄液』の張った防御膜を突破できる攻撃をしない限りは絶対防御を発揮できれば、本当に壁のようにして分厚い防御壁を作ることもできる。無論、あくまで存在する水銀を使いまわすので、量――今回は10リットル――以上に必要なる形状は不可能である。また、使いやすくする為に幾つかの形状が設定されている。

「くだらん」

だが、それらは全てが人間基準である。キャスターから言わせれば、単純な一撃だけを幾ら放たれようとも中らない。サーヴァントにとっては人間が速いと言っても、普通に目で追える速さである。俊敏が極端に低いサーヴァントなら、至近距離であれば中るだろう。威力も、サーヴァントに傷を付けるには十分にある。

「主よ、危険ですから下がっていてください！」

「黙っておれ！最弱と言われるキャスター1体に手間取っておる貴様が言える事か！？」

（仲の悪いことだな……）

マスターとサーヴァントでありながら、連携など考えていない２人組にキャスターは呆れたが、ランサーにはもう見るべき所が無いと見切りをつけ、決めにかかる。

「射殺（いころ）「ＡＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａＬａｉｅ（アアアアララララライッ）！！」なァ！？？」

またもや突然に戦闘に介入してくる者のせいで、決めるのを先延ばしにされた。

動き2（後書き）

思い付いた最強な気がする組み合わせ。
バーサーカー＋月霊髄液
攻守万能な宝具の完成。対魔力がどれ程作用するかによって変わるけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4988w/

仮面の英雄の聖杯探求記？

2011年10月13日20時45分発行